

京都府遺跡調査概報

第122冊

1. 俵野廃寺
2. 中山城跡第3次・中山近世墓
3. 阿良須古墳群
4. 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次
5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡
 - (1) 案察使遺跡第8次
 - (2) 桜久保遺跡
6. 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡
7. 木津川河床遺跡
8. 佐伯遺跡・佐伯館跡

2007

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成18年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、京都府農林水産部の依頼を受けて行った、俵野廃寺、中山城跡第3次・中山近世墓、阿良須古墳群、亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡、長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡、木津川河床遺跡、佐伯遺跡・佐伯館跡に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京丹後市教育委員会、舞鶴市教育委員会、福知山市教育委員会、南丹市教育委員会、亀岡市教育委員会、長岡京市教育委員会、八幡市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

1. 俵野廃寺
2. 中山城跡第3次・中山近世墓
3. 阿良須古墳群
4. 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次
5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡
6. 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡
7. 木津川河床遺跡(平成18年度)
8. 佐伯遺跡・佐伯館跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

| | 遺跡名 | 所在地 | 調査期間 | 経費負担者 | 執筆者 |
|----|--------------------|-------------|-----------------|----------|------|
| 1. | 俵野廃寺 | 京丹後市網野町俵野 | 平18.10.17～11.29 | 京都府土木建築部 | 村田和弘 |
| 2. | 中山城跡第3次・中山近世墓 | 舞鶴市中山 | 平18.11.22～12.22 | 京都府土木建築部 | 竹井治雄 |
| 3. | 阿良須古墳群 | 福知山市大江町北有路 | 平18.10.19～11.15 | 京都府土木建築部 | 石尾政信 |
| 4. | 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次 | 南丹市八木町室橋 | 平18.5.18～9.8 | 京都府農林水産部 | 田代 弘 |
| 5. | 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡 | | | 京都府土木建築部 | |
| | 案察使遺跡第8次 | 亀岡市保津町上火無 | 平18.12.1～12.21 | | 森島康雄 |
| | 桜久保遺跡 | 亀岡市千歳町毘沙門下坪 | | | |
| 6. | 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡 | 長岡京市井ノ内横ヶ端 | 平18.10.2～11.16 | 京都府土木建築部 | 竹井治雄 |
| 7. | 木津川河床遺跡(平成18年度) | 八幡市八幡焼木 | 平18.11.6～平1.16 | 京都府土木建築部 | 松尾史子 |
| 8. | 佐伯遺跡・佐伯館跡 | 亀岡市蕪田野町佐伯 | 平18.11.16～12.8 | 京都府土木建築部 | 黒坪一樹 |

3. 本書で使用している座標は、世界測地系国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

| | |
|--|----|
| 1. 俵野廃寺発掘調査概要----- | 1 |
| 2. 中山城跡第3次・中山近世墓発掘調査概要----- | 9 |
| 3. 阿良須古墳群発掘調査概要----- | 13 |
| 4. 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次発掘調査概要----- | 19 |
| 5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡平成18年度試掘調査概要----- | 31 |
| 6. 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡発掘調査概要----- | 35 |
| 7. 木津川河床遺跡(平成18年度)発掘調査概要----- | 41 |
| 8. 佐伯遺跡・佐伯館跡試掘調査概要----- | 47 |

挿図目次

| | |
|-------------------------------------|----|
| 1. 俵野廃寺 | |
| 第1図 調査地位置図----- | 1 |
| 第2図 調査トレンチ配置図----- | 2 |
| 第3図 第1トレンチ遺構図----- | 3 |
| 第4図 第1トレンチ南壁土層断面図----- | 4 |
| 第5図 第2トレンチ遺構図----- | 5 |
| 第6図 第2トレンチ北壁土層断面図----- | 5 |
| 第7図 第2トレンチ土坑SK1平・断面図----- | 6 |
| 第8図 第3トレンチ遺構図----- | 7 |
| 第9図 出土遺物実測図----- | 7 |
| 第10図 出土瓦実測図----- | 8 |
| 2. 中山城跡第3次・中山近世墓 | |
| 第11図 調査地位置図----- | 9 |
| 第12図 調査トレンチ配置図----- | 10 |
| 第13図 各トレンチ検出遺構平・断面図および堀切1土層断面図----- | 11 |
| 3. 阿良須古墳群 | |
| 第14図 調査地および周辺遺跡分布図----- | 13 |

| | | |
|------|----------------|----|
| 第15図 | 調査地周辺地形図----- | 15 |
| 第16図 | 第1地点平面図----- | 16 |
| 第17図 | 第1地点断面図----- | 16 |
| 第18図 | 第2地点平面図----- | 17 |
| 第19図 | 第2地点断面図----- | 17 |
| 第20図 | 土坑SK01実測図----- | 18 |

4. 野条遺跡第11次・室橋遺跡

| | | |
|------|---|----|
| 第21図 | 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次調査地位置図----- | 19 |
| 第22図 | 野条遺跡第11次調査トレンチ配置図----- | 20 |
| 第23図 | 第1トレンチ土層堆積状況(西壁)----- | 20 |
| 第24図 | 野条遺跡第11次調査遺構検出状況----- | 21 |
| 第25図 | 溝SD02断面(東端)----- | 22 |
| 第26図 | 野条遺跡第11次調査出土遺物実測図----- | 22 |
| 第27図 | 室橋遺跡第4次調査トレンチ配置図----- | 23 |
| 第28図 | 室橋遺跡第4次調査検出遺構実測図----- | 24 |
| 第29図 | 室橋遺跡第4次調査竪穴式住居跡SH01実測図----- | 25 |
| 第30図 | 室橋遺跡第4次調査竪穴式住居跡SH01竈実測図----- | 25 |
| 第31図 | 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ溝SD02・竪穴式住居跡SH03実測図----- | 26 |
| 第32図 | 室橋遺跡第4次第1トレンチ溝SD04実測図----- | 26 |
| 第33図 | 室橋遺跡第4次調査第2・3トレンチ検出溝実測図----- | 27 |
| 第34図 | 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ竪穴式住居跡SH01出土遺物実測図----- | 28 |
| 第35図 | 室橋遺跡第4次調査第2トレンチ竪穴式住居跡SH05出土遺物実測図----- | 28 |
| 第36図 | 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ溝SD02出土遺物実測図----- | 29 |
| 第37図 | 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ近世遺物実測図----- | 30 |

5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡

| | | |
|------|------------------------|----|
| 第38図 | 調査位置図----- | 31 |
| 第39図 | 調査地配置図----- | 32 |
| 第40図 | 案察使遺跡トレンチ平面図・断面図----- | 32 |
| 第41図 | 桜久保遺跡北トレンチ平面図・断面図----- | 33 |
| 第42図 | 桜久保遺跡南トレンチ平面図・断面図----- | 34 |

6. 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡

| | | |
|------|------------------------------|----|
| 第43図 | 調査地位置図----- | 35 |
| 第44図 | 調査トレンチ配置図----- | 36 |
| 第45図 | 1・2トレンチ検出遺構平面図----- | 37 |
| 第46図 | 1トレンチ北・西壁および溝SD01・02土層図----- | 38 |

| | | |
|--------------------|---------------------------------|----|
| 第47図 | 2トレンチ東・北壁土層図----- | 38 |
| 第48図 | 出土遺物実測図----- | 39 |
| 7. 木津川河床遺跡(平成18年度) | | |
| 第49図 | 調査地および周辺遺跡位置図----- | 41 |
| 第50図 | トレンチ配置図----- | 42 |
| 第51図 | 第1トレンチ土層図および立面図----- | 43 |
| 第52図 | 二重口縁壺出土状況図----- | 44 |
| 第53図 | 第2トレンチ平面図および土層柱状図----- | 44 |
| 第54図 | 出土遺物実測図----- | 45 |
| 第55図 | 琴柱形石製品実測図----- | 46 |
| 8. 佐伯遺跡・佐伯館跡 | | |
| 第56図 | 調査地位置図----- | 47 |
| 第57図 | 調査トレンチ(1～3)およびグリッド(a～d)配置図----- | 48 |
| 第58図 | 各トレンチ柱状断面図----- | 49 |
| 第59図 | 3トレンチ完掘状況----- | 49 |
| 第60図 | 出土遺物実測図----- | 50 |
| 第61図 | チャート剥片----- | 50 |

図 版 目 次

1. 俵野廃寺

| | | |
|------|-------------------------|-----------------------|
| 図版第1 | (1)調査地遠景(北東から) | (2)第1トレンチ瓦堆積状況(北東から) |
| 図版第2 | (1)調査地遠景(南東から) | (2)礎石発見場所(大正11年)(北から) |
| | (3)第1トレンチ作業風景(北東から) | |
| 図版第3 | (1)第1トレンチ瓦堆積状況(南から) | |
| | (2)第2トレンチ瓦堆積状況(北から) | |
| | (3)第2トレンチ作業風景(西から) | |
| 図版第4 | (1)第2トレンチ土坑SK1検出状況(西から) | |
| | (2)第3トレンチ全景(北から) | (3)第3トレンチ瓦堆積状況(南東から) |
| 図版第5 | 出土遺物(1) | |
| 図版第6 | 出土遺物(2) | |

2. 中山城跡第3次・中山近世墓

- 図版第7 (1) 中山城跡遠景(西から) (2) 1 トレンチ全景(北から)
(3) 2 トレンチ全景(北から)
- 図版第8 (1) 3 トレンチ堀切3 調査前風景(西から)
(2) 堀切3 断面(西から) (3) 4 トレンチ全景(北から)
- 図版第9 (1) 4 トレンチ柱穴群(西から) (2) 4 トレンチ堀切1 断面(東から)
(3) 4 トレンチ斜面・犬走り全景(南から)
- 図版第10 (1) 4 トレンチ斜面・犬走り断面(東から) (2) 5 トレンチ全景(南から)
(3) 5 トレンチ柱穴群全景(南から)

3. 阿良須古墳群

- 図版第11 (1) 調査地遠景(南から)
(2) 第1 地点8 号墳調査前状況(北西から)
(3) 第1 地点8 号墳下位の平坦地調査前状況(南東から)
- 図版第12 (1) 第1 地点1 トレンチ全景(北西から)
(2) 第1 地点1 トレンチ中央部(南東から)
(3) 第1 地点3 トレンチ全景(西から)
- 図版第13 (1) 第2 地点調査前状況(南から) (2) 第2 地点西部(南から)
(3) 第2 地点全景(西から)
- 図版第14 (1) 第2 地点全景(南東から)
(2) 第2 地点北壁断面5 号墳の切り離し溝(南西から)
(3) 第2 地点土坑 S K01(南から)

4. 野条遺跡第11次・室橋遺跡

- 図版第15 (1) 野条遺跡第11次調査地全景(上が東)
(2) 野条遺跡第11次調査トレンチ(北から)
- 図版第16 (1) 野条遺跡第11次重機掘削風景(北西から)
(2) 野条遺跡第11次作業風景(北西から)
(3) 野条遺跡第11次調査地空撮作業風景
- 図版第17 (1) 野条遺跡第11次第1 トレンチ溝 S D04 検出状況(南から)
(2) 野条遺跡第11次土坑 S K05 検出状況(東から)
(3) 野条遺跡第11次土坑 S K05 掘削風景(西から)
- 図版第18 (1) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D01 検出状況(北西から)
(2) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D01 検出状況(南東から)
(3) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D01 埋土の状況(北西から)
- 図版第19 (1) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D02 検出状況(西から)
(2) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D02 検出状況(西から)
(3) 野条遺跡第11次第2 トレンチ溝 S D02 遺物出土状況(上が南)

- 図版第20 (1)野条遺跡第11次第2トレンチ溝SD03検出状況(北西から)
 (2)野条遺跡第11次第2トレンチ溝SD02掘削風景(南から)
 (3)野条遺跡第11次第2トレンチ溝SD01遺物出土状況
- 図版第21 (1)室橋遺跡第4次調査地全景(上が北)
 (2)室橋遺跡第4次第1トレンチ全景(上が西)
- 図版第22 (1)室橋遺跡第4次第1トレンチ溝SD02全景(南から)
 (2)室橋遺跡第4次第1トレンチ溝SD02埋土(南から)
 (3)室橋遺跡第4次第1トレンチ溝SD02掘削風景(西から)
- 図版第23 (1)室橋遺跡第4次第1トレンチピット検出状況(北東から)
 (2)室橋遺跡第4次第1トレンチピット検出状況(北西から)
 (3)室橋遺跡第4次第1トレンチ調査風景(北東から)
- 図版第24 (1)室橋遺跡第4次第1トレンチ竪穴式住居跡SH01全景(南東から)
 (2)室橋遺跡第4次第1トレンチ竪穴式住居跡SH01全景(北東から)
 (3)室橋遺跡第4次第1トレンチ竪穴式住居跡SH01カマド跡(南東から)
- 図版第25 (1)室橋遺跡第4次第1トレンチ竪穴式住居跡SH01遺物出土状況
 (2)室橋遺跡第4次第1トレンチ竪穴式住居跡SH01遺物出土状況
 (3)室橋遺跡第4次第1トレンチ溝SD02遺物出土状況(上が東)
- 図版第26 (1)室橋遺跡第4次第3トレンチ溝SD06(南から)
 (2)室橋遺跡第4次第3トレンチ溝SD06(東から)
 (3)室橋遺跡第4次第3トレンチ溝SD06埋土(南から)

5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡

- 図版第27 (1)調査前風景(北西から) (2)トレンチ全景(北西から)
 (3)トレンチ全景(南東から)
- 図版第28 (1)調査前風景(北西から) (2)南トレンチ全景(南から)
 (3)北トレンチ全景(南東から)

6. 長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡

- 図版第29 (1)調査地手前(2トレンチ)全景(北から)
 (2)1トレンチ全景(東から) (3)1トレンチ溝SD01全景(北東から)
- 図版第30 (1)1トレンチ溝SD02全景(北から) (2)1トレンチ溝SD01断面(北から)
 (3)1トレンチ溝SD01断面(北から)
- 図版第31 (1)2トレンチ全景(北から) (2)2トレンチ溝SD03断面(北から)
 (3)2トレンチ東壁断面(西から)
- 図版第32 出土遺物

7. 木津川河床遺跡(平成18年度)

- 図版第33 (1)第1トレンチ島畠(東から) (2)第1トレンチ中世溝(東から)

- 図版第34 (1)二重口縁壺出土状況(南から)
(2)第1トレンチ西壁曲隆部分(南西から)
(3)第1トレンチ東壁(北端墳砂：西から)
(4)第1トレンチ墳砂(東から) (5)第1トレンチ作業風景(北西から)
- 図版第35 (1)第2トレンチ全景(北から) (2)第2トレンチ中央部分(南西から)
(3)第2トレンチ西壁中央部分(東から)
- 図版第36 出土遺物

8. 佐伯遺跡・佐伯館跡

- 図版第37 (1)1トレンチ全景(東から)
(2)1トレンチ西半部溝検出状況(北東から)
(3)2トレンチ全景(西から)
- 図版第38 (1)試掘グリッドb・c掘削風景(西から)
(2)bグリッド完掘状況(東から) (3)出土遺物

1. 俵野^{たわらの}廃寺発掘調査概要

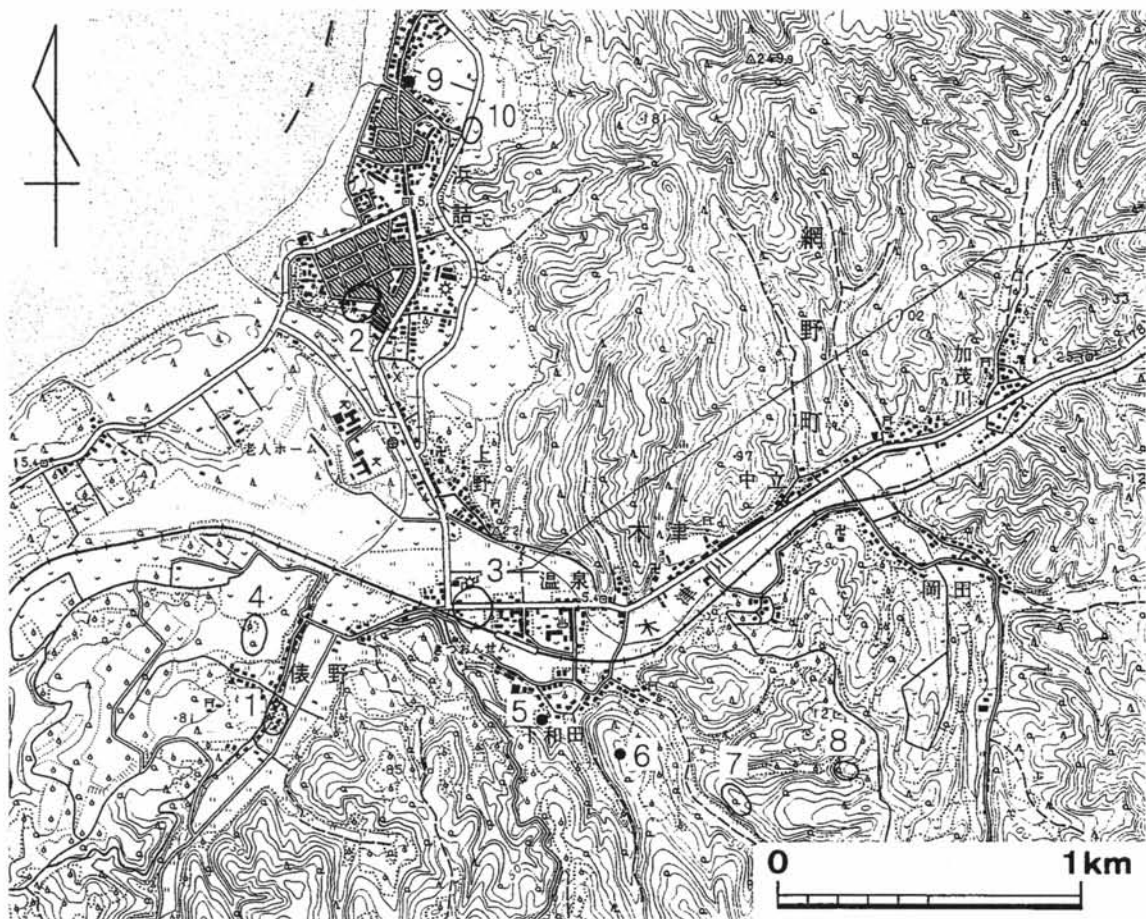
1. はじめに

今回の調査は、俵野川緊急河川整備事業に伴い京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。俵野廃寺は、京丹後市網野町俵野に所在し、俵野地内のほぼ中央部に立地している(第1図)。

調査期間は、平成18年10月17日～11月29日である。調査面積は150m²である。今回の調査は、事業予定地内での遺構の有無やその広がりを確認するための試掘調査である。

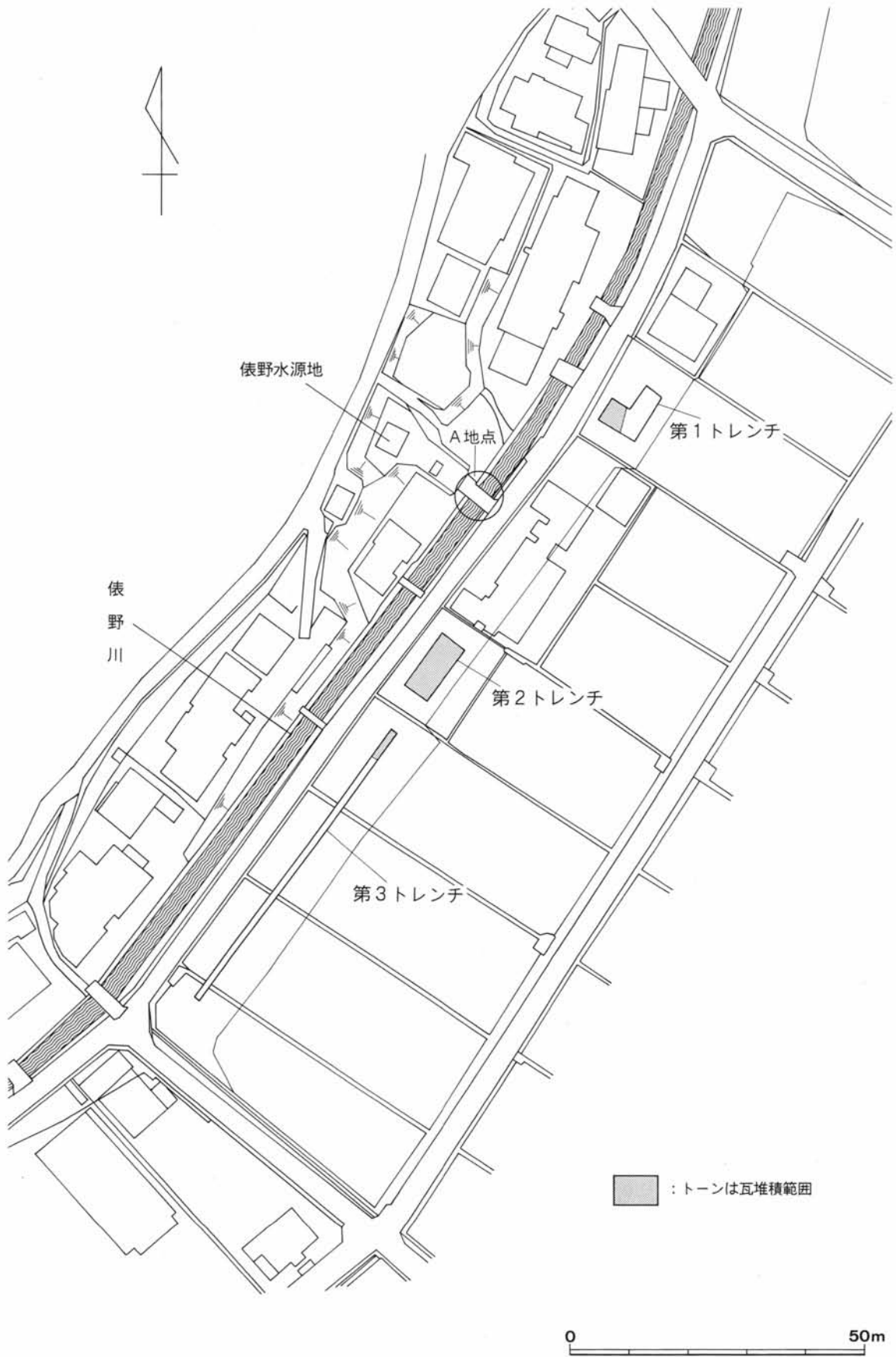
調査に際しては、京都府教育委員会ならびに京丹後市教育委員会をはじめとする諸機関、地元の方々に御指導・御協力をいただいた。記して感謝したい。^(注1)

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

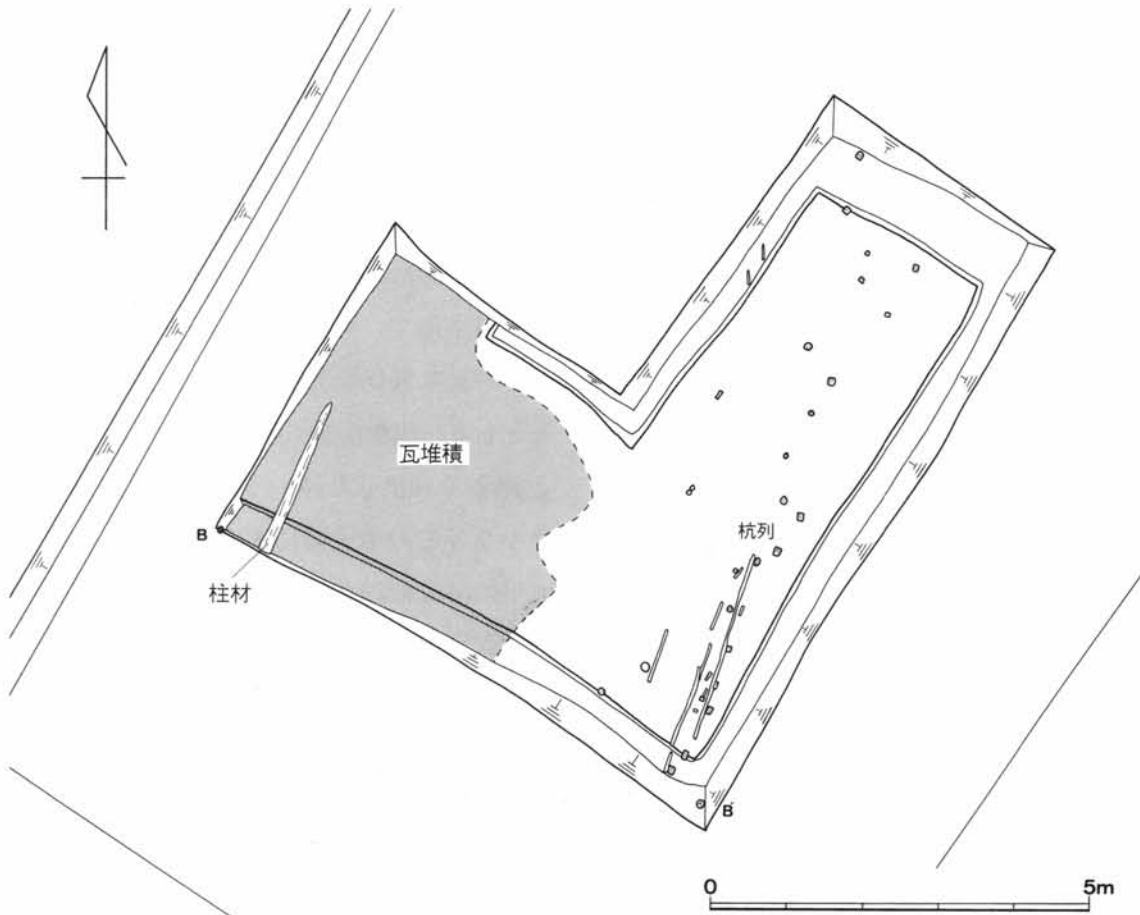


第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000網野)

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 1. 俵野廃寺 | 2. 浜詰遺跡 | 3. 松ヶ崎遺跡 | 4. 丹ノ谷古墳群 | 5. 下和田古墳 |
| 6. 女布谷西古墳 | 7. 女布谷古墳群 | 8. 天王山古墳群 | 9. はやし古墳 | 10. 浜詰古墳群 |



第2図 調査トレンチ配置図

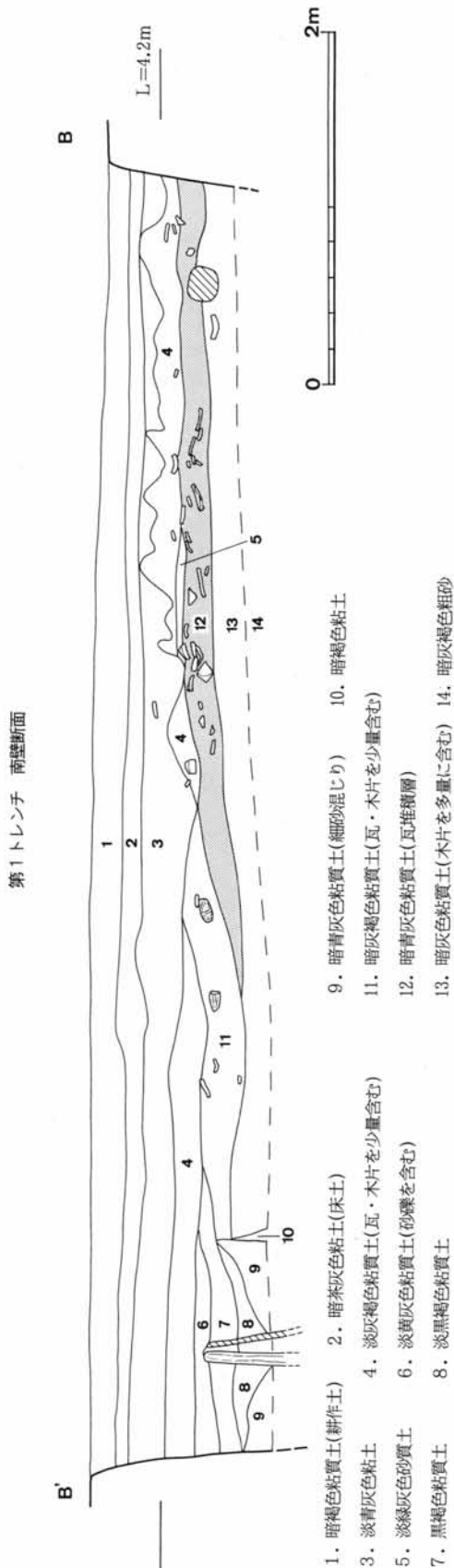


第3図 第1トレンチ遺構図

2. 調査の経緯

俵野廃寺は、大正11年耕地整理に伴う俵野川改修工事で、現在の俵野水源地付近(第2図A地点)で塔の心礎と思われる礎石と壺の破片、複弁蓮華文軒丸瓦などが発見されたことによって古代寺院跡と認識されるようになった。その後、昭和14年頃、礎石が発見された位置より100mほど北側での護岸工事で、柱根数本と鬼瓦が発見された。また、昭和58年、俵野川改修護岸工事の際、重弧文軒平瓦などが発見されている。出土した瓦は、やや雑な作り方の鋸歯文をもつ複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、凹面に細かな布目痕、凸面に格子タタキ痕を認める平瓦など、白鳳期の瓦の特徴をよく表わしている。本遺跡の周辺には、塔の坪、寺口、寺屋敷、防垣などの地名が残る。また、与謝郡成相寺に伝わる正徳元(1288)年の「丹後国諸庄郷保惣田数帳」には、木津の条下に「一町三段旦経寺十八町五段百八十歩同帰院」という記載があり、古くからこの地に寺があったことが想像される。

このように、俵野廃寺は、発見された瓦の特徴から、丹後最古の古代寺院として、かねてから注目されてきた遺跡である。しかしながら、これまで発掘調査は行なわれていないため、伽藍配置や寺域の範囲などについては一切不明であった。そして今回、俵野川の改修工事にとまなう事前調査として、はじめて発掘調査を実施することとなった。



第4図 第1トレンチ南壁土層断面図

3. 調査の概要

調査では、3地点にトレンチを設定した(第2図)。以下に各トレンチの概要を報告する。

(1) 第1トレンチ

かつて礎石が発見された地点から約20m北側に設定した(第3図)。調査の結果、トレンチの西半部で、西から東へ緩やかに傾斜し、多量の瓦を含む堆積層(25~40cm)を確認するとともに、杭や板材が並ぶ遺構(以下、「杭列」と表記)を検出した(第4図)。杭列は、かつて狭小な谷筋の中央部に依野川が流れており、河川の氾濫を防ぐための施設であった可能性も考えられる。

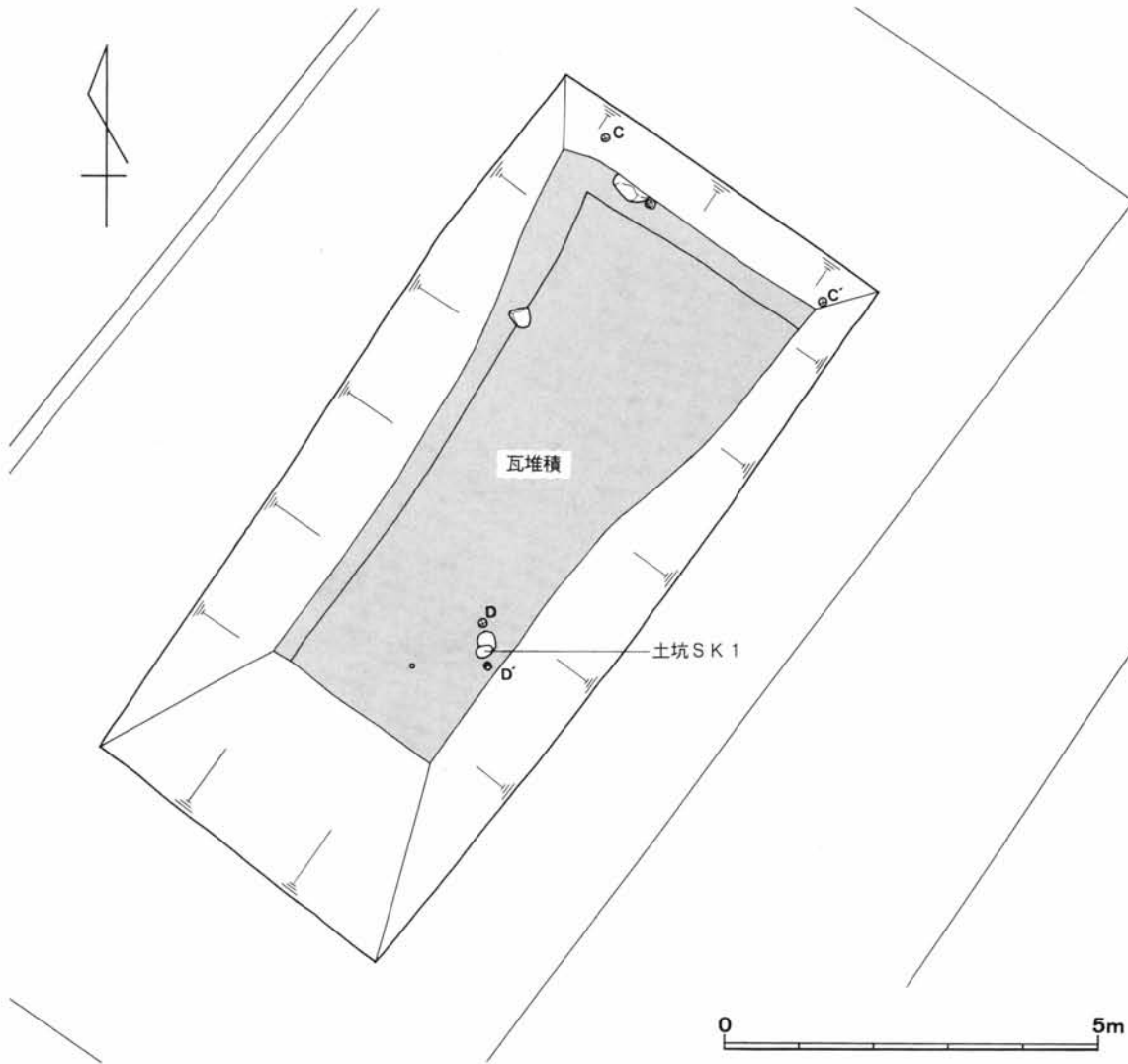
なお、今回は試掘調査のため、第1トレンチの瓦堆積層や杭列は確認のみにとどめた。改めて次年度以降に面的な調査を実施する予定である。

(2) 第2トレンチ

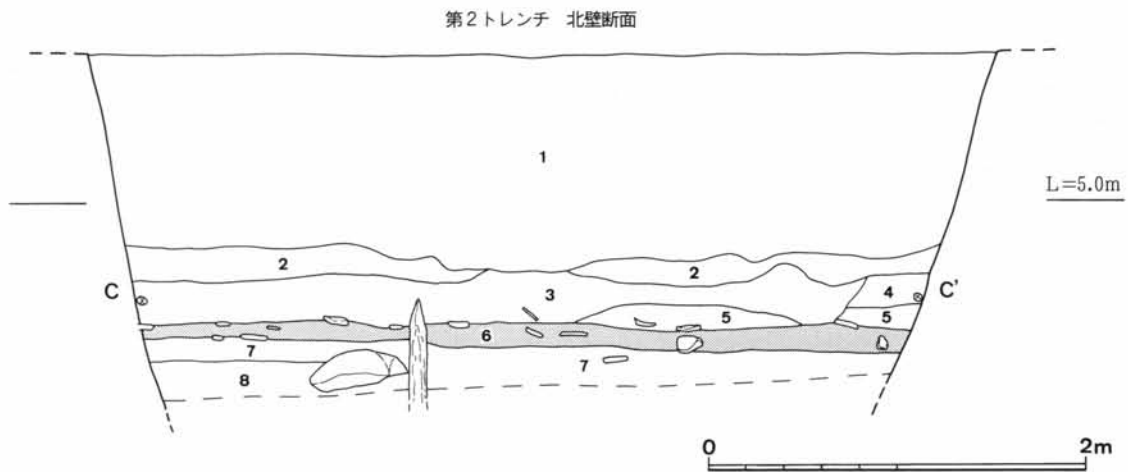
検出した遺構は、第1トレンチと同様の瓦堆積と土坑2基を検出した(第5図)。瓦堆積層は、第1トレンチに比べると平坦であり、厚みも20cm前後と薄い状況である(第6図)。土坑SK1は直径約0.3m、深さ約0.4mを測り、丸瓦を立てた状態で据えられていた(第7図)。第2トレンチについては、遺物を取り上げ、遺構を完掘して今年度で調査を終了した。

(3) 第3トレンチ

遺構・遺物が分布する範囲の南限を確認するため、第2トレンチの南側で幅1.2m、長さ52mの南北に長いトレンチを設定した(第8図)。その結果、北端部で瓦堆積層を確認したが、それ以南については、河川の氾濫による砂と粘土の堆積層が2m以上堆積しているのみであった。なお、この砂・粘土の堆積層からの遺物は、瓦や土師器などの小片が若干



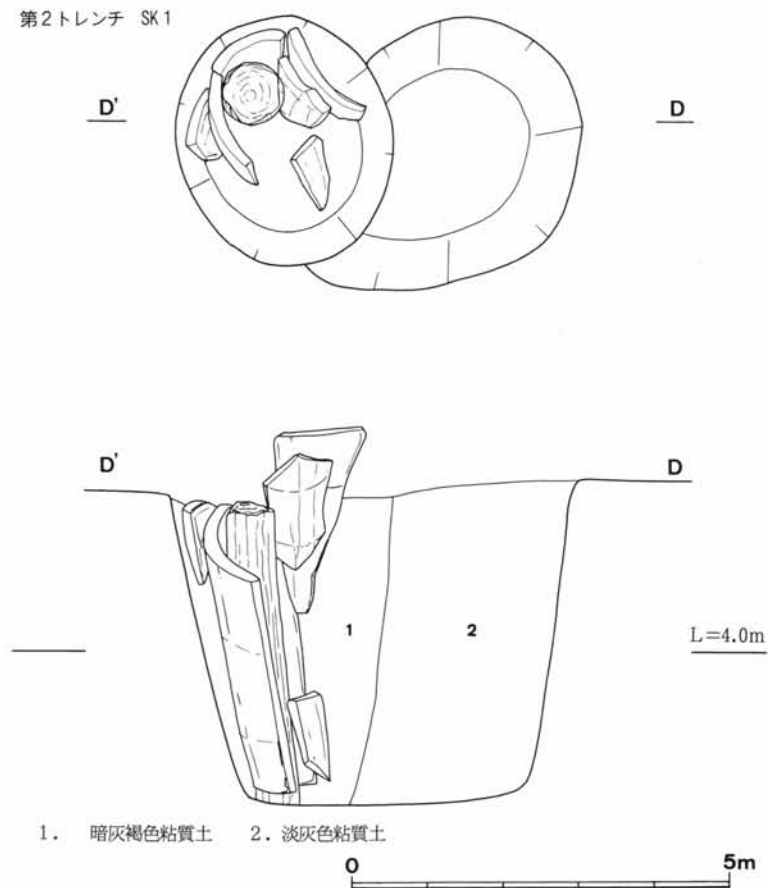
第5図 第2トレンチ遺構図



- | | | | |
|----------------|-----------------|--------------------|-------------------|
| 1. 黄褐色粘質土(盛土) | 2. 暗灰褐色粘土(旧耕作土) | 5. 暗灰褐色粘土 | 6. 暗灰色砂礫粘質土(瓦堆積層) |
| 3. 暗茶褐色粘土(旧床土) | 4. 灰褐色粘土 | 7. 暗青灰色粘性砂質土(砂礫含む) | 8. 黒灰色粘土 |

第6図 第2トレンチ北壁土層断面図

第2トレンチ SK1



第7図 第2トレンチ土坑SK1平・断面図

の上層部から出土した底部が糸切りの須恵器杯で、底部に「■中」と書かれた墨書土器である。平安時代に属し、瓦堆積層が形成された時期を示すものと考えられる。10は瓦堆積層の上層部から出土した使用痕のある土師器の灯明皿、11は瓦堆積層の下層部から出土した土師器甕である。

瓦類は、多量に出土した瓦の一部について報告する。12は第1トレンチの瓦堆積層から出土した軒丸瓦である。13~15は第2トレンチの瓦堆積層から出土した軒丸瓦である。14は軒丸瓦で、瓦当と丸瓦との接合部からはずれ、丸瓦は欠損している。これまでに当寺跡から採取されている軒丸瓦と同範と考えられる。16は第2トレンチの瓦堆積から出土した二重弧文の軒平瓦である。17は第1トレンチの瓦堆積から出土した完形の丸瓦である。

6. まとめ

今回の調査では、建物跡など叡野廃寺の伽藍に直接関連する遺構は確認できなかったが、瓦堆積層や南側の遺物の分布範囲を確認することができた。第1・2トレンチの瓦堆積層では、比較的大形の破片や軒瓦が認められることから、近接して堂宇跡が存在することを示唆しているものと思われる。第3トレンチは、トレンチの北端部で薄い瓦堆積層を確認したにとどまるが、これにより寺院の南限がほぼ確定できたと考え、面的な調査を行なう必要のある範囲をほぼ確定できたとと言える。なお、瓦堆積層の以南については、若干の遺物は出土したが、小片であり、土層も

出土したにとどまる。

4. 出土遺物

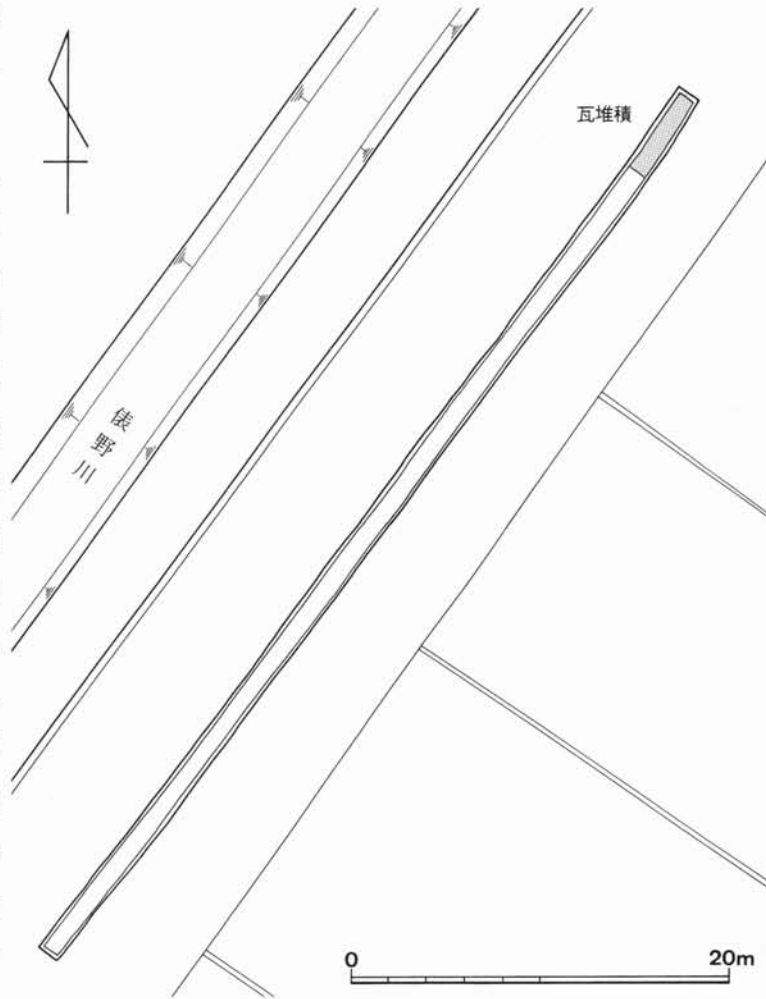
今回、出土した遺物の大半は瓦類で、土器類はわずかであった(第9・10図)。

土器類は、1~9が第1トレンチ、10・11が第2トレンチから出土した。1は杭列の精査時に出土した須恵器杯蓋、2・3は瓦堆積層から出土した須恵器杯である。4は、東側排水溝掘削時の杭列付近で出土した高台をもつ須恵器で、奈良時代前期に属する。5は須恵器杯の底部、6は須恵器甕の口縁部、7・8は土師器の底部で、いずれも瓦堆積層から出土した。9は瓦堆積層

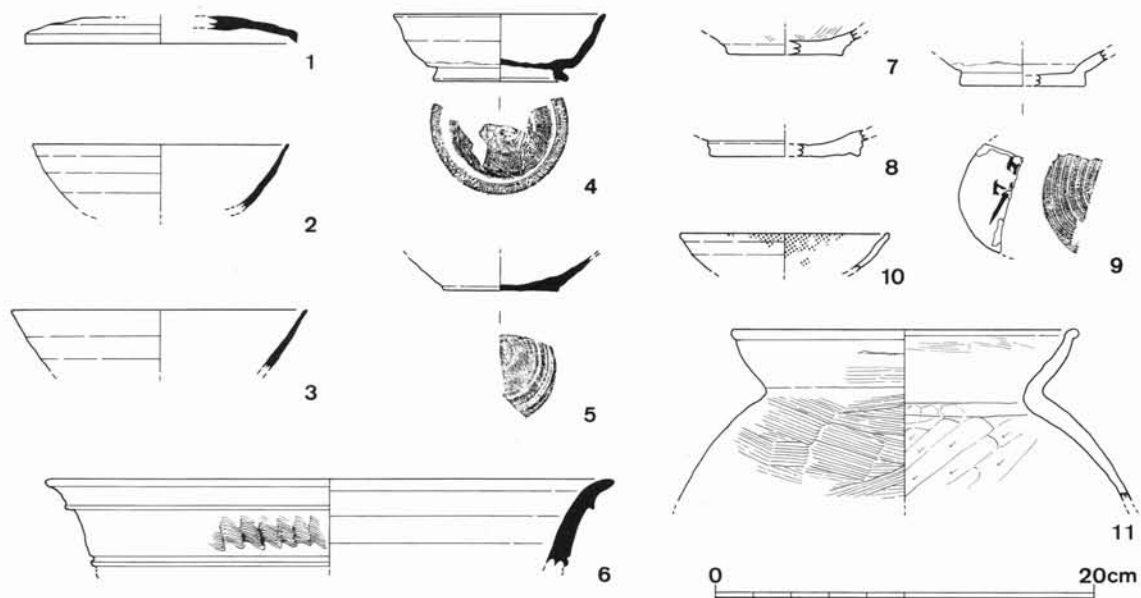
倭野川の氾濫による水成堆積層であるため、遺構は残存しないと判断した。

今回の調査で出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦である。軒丸瓦は鋸歯文のある複弁八葉蓮華文軒丸瓦、軒平瓦は二重弧文軒平瓦、丸瓦や平瓦に見られる布目痕や格子状のタタキ目痕など、白鳳期の特徴をもつことから、改めて倭野廃寺は奈良時代前期（7世紀後半～末）に建立された寺院であることを確認した。しかし、今回の調査は、試掘調査であるため、建物跡の確認をはじめとする寺院の具体像については今後の面的な調査の成果を待って改めて検討したい。

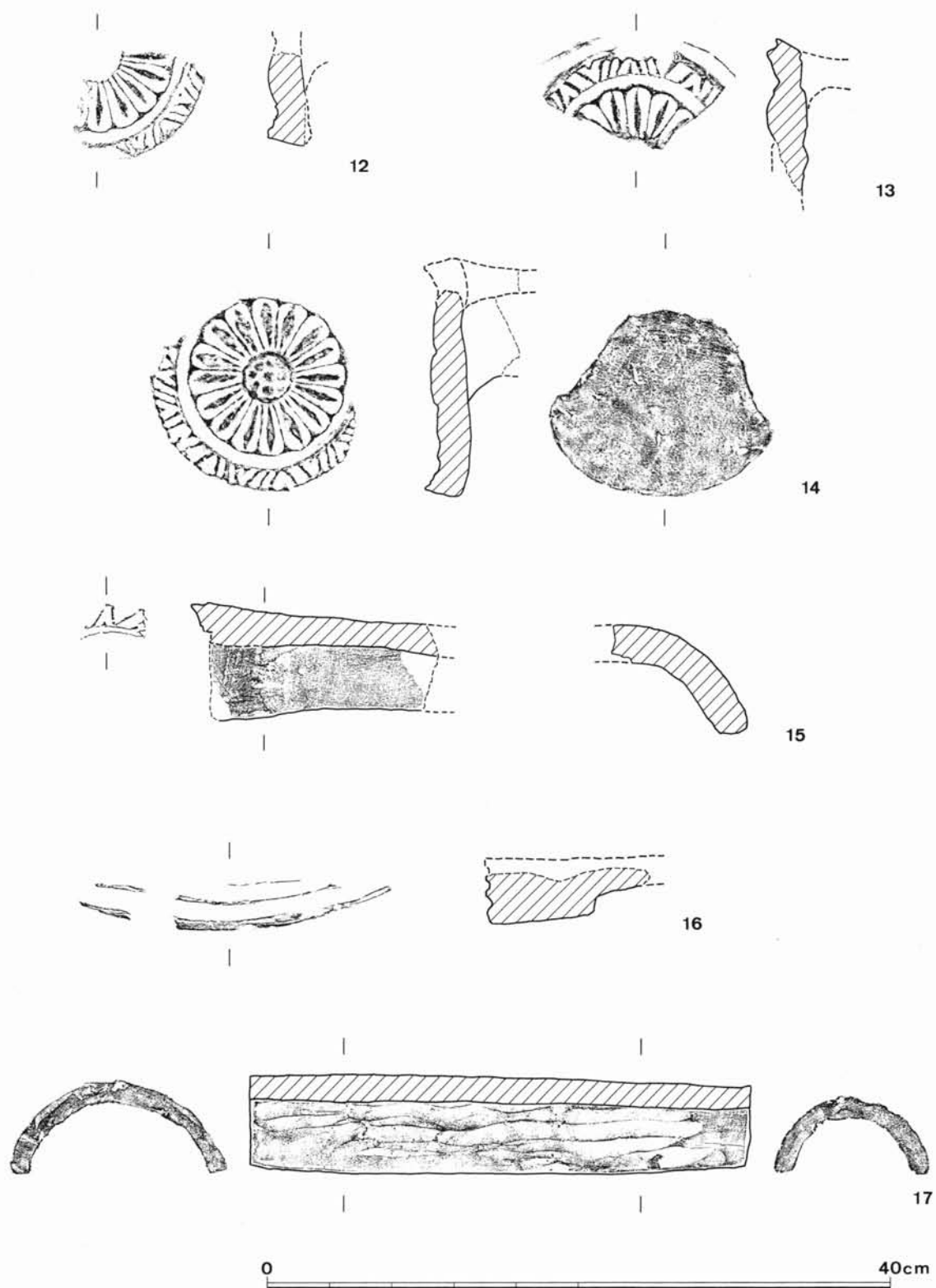
(村田和弘)



第8図 第3トレンチ遺構図



第9図 出土遺物実測図



第10図 出土瓦実測図

注1 調査参加者 井上由起子・井本祐子・小笠原順子・小路すみ子・清水友佳子・松本彬成・吉岡千代美

参考文献 網野町誌編集委員会「第二章古代」『網野町誌 上巻』 1992

林和広「俵野廃寺出土の古瓦」(太邇波考古第3号 両丹技師の会) 1983

2. ^{なかやま}中山城跡第3次・中山近世墓発掘調査概要

1. はじめに

今回の発掘調査は、舞鶴市中山地内において、平成18年度地方道路交付金事業西神崎上東線に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

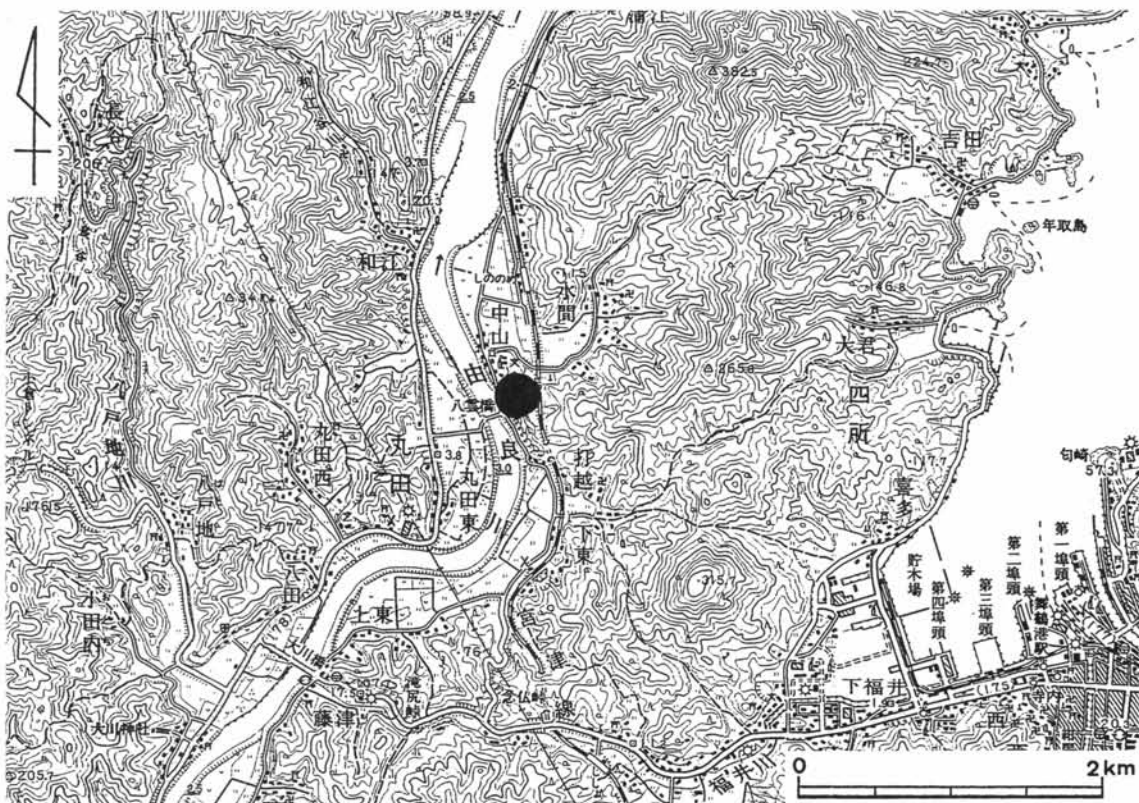
中山城跡は、舞鶴市中山ほかに所在する。由良川に面した丘陵上に築かれた戦国時代の山城跡であり、江戸時代には近世墓も営まれている。

本年度の調査は、丘陵上に展開する郭や堀切などの山城を構成する各遺構について、その残存状況を確認し、本発掘調査が必要となる範囲を特定するための試掘調査として実施した。丘陵上の郭、堀切を中心に6か所の試掘トレンチを設定した。調査面積は150m²である。

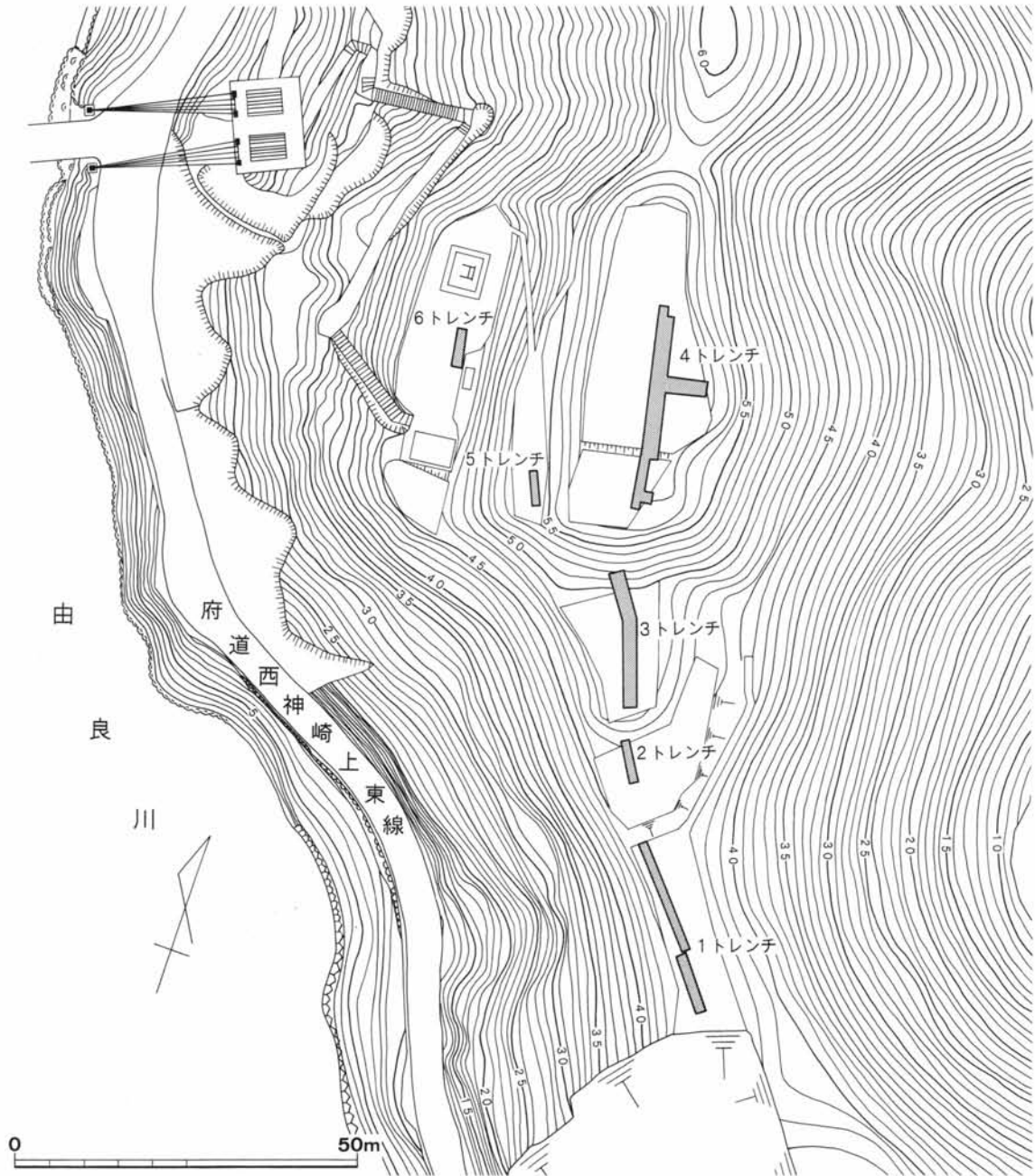
調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、専門調査員竹井治雄が担当した。現地での調査は、平成18年11月21日～12月22日まで実施した。

調査にあたっては、京都府教育委員会、舞鶴市教育委員会ならびに地元自治会、地元住民の方々の御指導、御協力を得た、記して感謝したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第11図 調査地位置図(国土地理院1/50,000舞鶴)



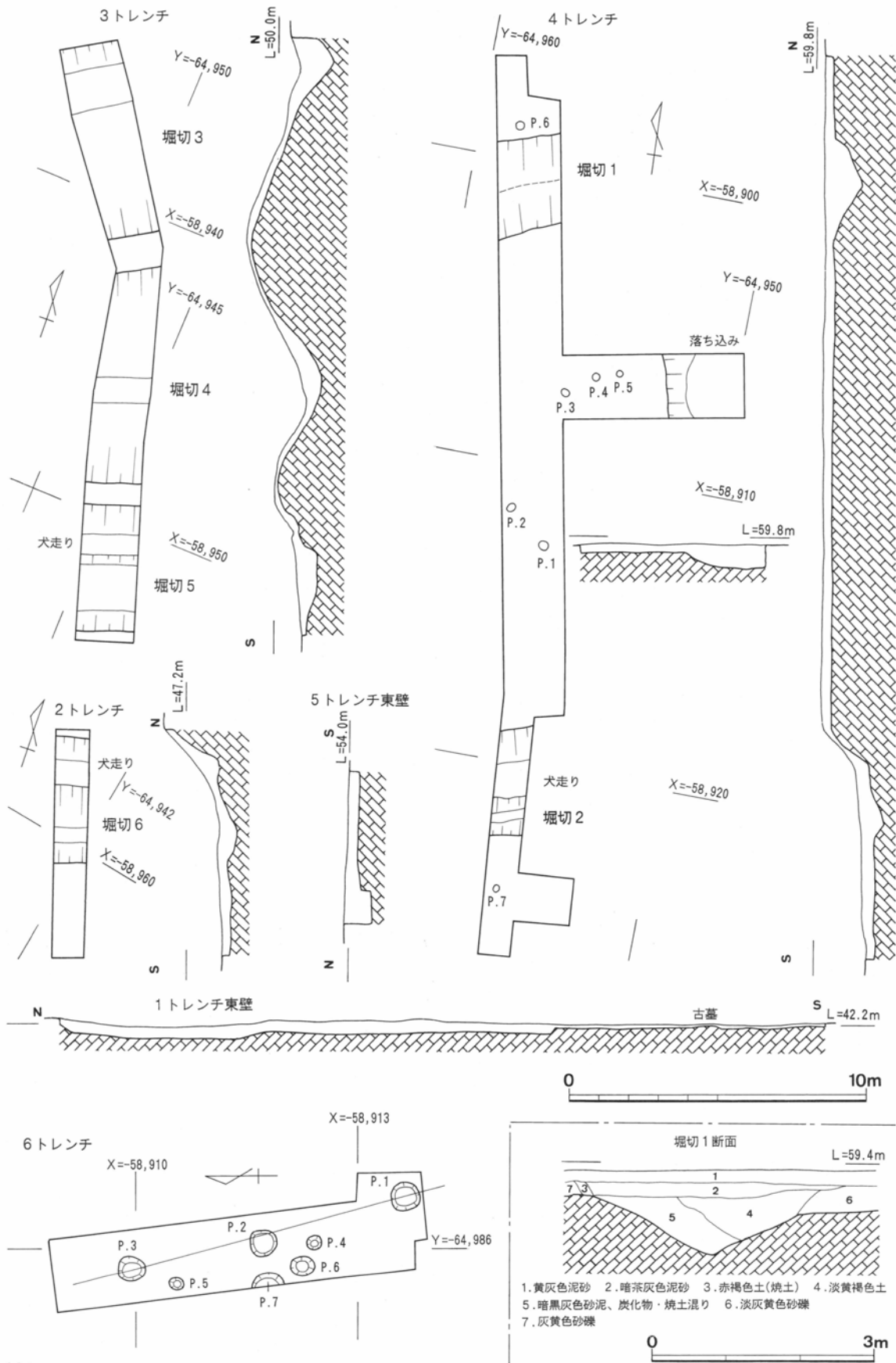
第12図 調査トレンチ配置図

2. 検出遺構

調査は、山城の主要施設とみられる丘陵頂部、中腹部の平坦面、土塁、堀切などに、幅1～2m、長さ5～30mの試掘トレンチを6か所設定し、行った。調査の結果、建物跡(柱穴群)、堀切6条、犬走り3条などを検出した。

第1トレンチ 標高42m前後の尾根筋に長さ25m、幅1mのトレンチを設定した。トレンチの南端部では2か所の黄褐色土の高まりがあり、さらに、1か所の暗褐色土の広がりを確認した。これは、昭和58年度調査地で見つかった近世墓の北側に続く遺構の可能性がある。

第2トレンチ 標高47～45mの地点に、第1トレンチよりかなり幅広の平坦面が認められる。この平坦面の北半部にトレンチを入れた。トレンチ北端で確認した急斜面は、比高差1.5m以上、



第13図 各トレンチ検出遺構平・断面図および堀切1土層断面図

傾斜角約60°を測り、北側の第3トレンチを入れた部位へと続く。これに接続する犬走りは幅1mを測りほぼ水平である。堀切6は幅2.5m、深さ0.4mを測り、断面は「U」字形を呈する。堀切内の堆積土は、灰黄色土、赤褐色土である。これらの遺構は、概ね表土下0.2mから検出された。

第3トレンチ 標高48～51m前後の地点の堀切、土塁と見られた地点に設定した。掘削の結果、3条の堀切からなることが判明した。堀切3は、幅7m以上、深さ2.5m(標高48.2m)を測る。断面「V」字形を呈し、崩落した淡黄灰色土が厚さ0.2～1.0m堆積する。堀切4は、幅7m、深さ2.0m(標高48.5m)を測る。断面「V」字形を呈し、崩落した淡黄灰色土が厚さ0.1～0.4m堆積する。堀切4の南には、幅0.8mを測る犬走り状の平坦面を設ける。堀切5は、幅2.5m、深さ0.5m(標高48.5m)を測る。断面「U」字形を呈し、崩落した淡赤灰色土が堆積する。

第4トレンチ 今回の調査範囲のなかでは、最も広い郭部分に設定した調査区である。現地地形は、比高差1.4mの段差をもつ平坦面が2面あり、標高59～57mを測る。ここでは、堀切や建物跡の存在を示す柱穴といった遺構を検出した。堀切1は、幅3m、深さ1.0m(標高58.3m)を測る。断面「V」字形を呈し、その土層は、厚さ0.1～0.4mの赤褐色土(焼土)、暗黒灰色砂泥(炭化物)、黄灰色土からなり、南側から埋まった状況を示す。柱穴は、合計6基検出している。P1・2は、直径25cm、柱間寸法は、約1.8mを測る。また、P3～5は柱穴の規模はさまざまであるが、柱穴の堆積土が類似していることから一連のものと思われる。これら柱穴からは、複数の建物跡が存在したことがうかがえる。堀切2は、幅1.2m、深さ0.4m(標高57.4m)を測る。断面「U」字形を呈し、内部には淡黄灰色土が堆積する。落ち込み遺構は、平坦面の東側を画するものである。

第5トレンチ 第4トレンチの郭の西側に位置する小規模なテラス状地形に設定した調査区である。地表下1m以上で、西側に向かって傾斜する地山面を確認した。

第6トレンチ 第5トレンチのさらに西側の標高45mの地点には、東西約12m、南北約45mの平坦地があり、現在城山八万神社が祀られている。この社殿前面に調査区を設定した。ここでは地表下約5cmで地山面となり、柱穴群が検出された。柱穴列P1～3は、直径35～50cm、柱間寸法各2.1m・1.9mを測る。時期は不明であるが、この平坦面にも、建物跡が配置されていた可能性が高いものと考えられる。

3. まとめ

今回の調査では、調査範囲内の各トレンチにおいて、堀切、建物跡などの中山城跡に伴う各種遺構を確認することができた。特に、調査地内最高所に位置する第4トレンチの郭では、郭平坦面を区画する堀切の存在が明らかになったことや、複数の建物跡が存在したことがうかがえるなどの成果を得た。さらに堀切1内には、焼土・炭化物の堆積も認められたことから、この郭上の建物が火災に遭っている可能性も想起された。(竹井治雄)

注 調査参加者(順不同) 小島健之介・小東猪野之助・谷田一正・片桐益弘・片桐晃子・半治勝美・森口寛・小谷昭一・村上優美子・丸谷はま子

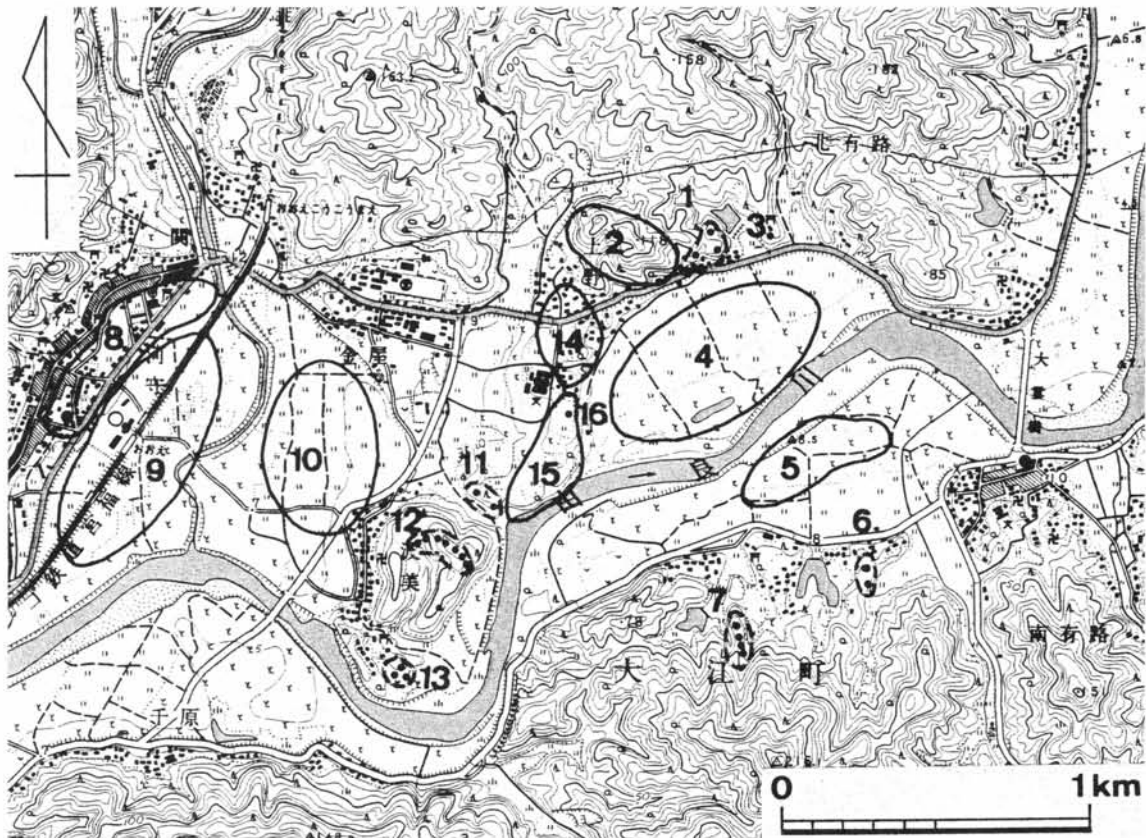
3. 阿良須古墳群発掘調査概要

1. はじめに

今回の調査は、福知山市大江町北有路に所在する阿良須古墳群のうち1・3・4・5・8号墳の急傾斜地対策工事に伴う発掘調査で、京都府土木建設部の依頼を受けて実施した。

阿良須古墳群は、『京都府遺跡地図 [第3版] 第1冊』によると直径10m、高さ1.0~1.5mを測る3基の円墳で構成され、2号墳では石材の散乱が確認できることから横穴式石室の可能性が指摘されていた。その後、福知山市教育委員会の分布調査によると前述の3基の古墳のほかに、古墳状隆起が確認され、現状では10基の古墳の存在が予想されている。また、この丘陵の山頂部付近では郭や塹堀を有する山城(阿良須城跡)があり、今回調査対象地の8号墳でも平坦面が確認できることから、山城関連施設の存在の可能性も考えられる地点である。

今回の調査は、阿良須古墳群10基の古墳のうち、丘陵先端に立地する1・3・4・5・8号墳が、丘陵の一部の急斜面が民家に近接した位置にあり、急傾斜地が崩壊する危険性を考えた安全



第14図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院 1/25,000河守)

- | | | | | |
|-----------|-----------|--------------|----------|------------|
| 1. 阿良須古墳群 | 2. 阿良須城跡 | 3. 阿良須神社境内古墳 | 4. 阿良須遺跡 | 5. 高川原遺跡 |
| 6. 丸山古墳群 | 7. 大山田古墳群 | 8. 河守北遺跡 | 9. 河守遺跡 | 10. 金屋波美遺跡 |
| 11. 仲仙古墳群 | 12. 波美古墳群 | 13. 宮山古墳群 | 14. 上野遺跡 | 15. 平遺跡 |
| | | | 16. 大良古墳 | |

対策のために、丘陵地の一部を削り取る必要が生じ、工事対象地に立地する1・3・4号墳の墳丘の裾部を確認することと、分布調査で確認した8号墳の性格を確認する調査である。

現地調査は古墳の規模などを確認するため、2か所のトレンチを設定し、平成18年10月19日に着手し、同年11月15日に終了した。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同専門調査員石尾政信が担当した。調査面積は100m²である。

調査に際しては、福知山市教育委員会をはじめとする関係機関の御協力・御援助を得た。また、現地調査・整理作業には地元有志の方々の参加・協力があつた。^(注)記して感謝したい。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 周辺遺跡の概要

阿良須古墳群が立地する丘陵の山頂部周辺には郭と竪堀を有する阿良須城跡があり、今回の調査でも一部平坦面があり(8号墳)、郭の可能性を考慮して試掘グリッドを設定した。この阿良須古墳群の東方にある阿良須神社境内には、直径5.0m、高さ1.0mの円墳で須恵器が出土した阿良須神社境内古墳がある。また、阿良須古墳群とは由良川を挟んだ対岸に大田古墳群、丸山古墳群がある。大田古墳群は直径13.0～16.0m、高さ1.0～2.0mを測る4基の円墳で構成され、大田3号墳では石材が確認でき横穴式石室の可能性のある古墳である。丸山古墳群は直径13.0～16.0m、高さ1.0～1.8mを測る2基の円墳で構成される古墳群である。古代以降の遺跡として阿良須古墳群と大田古墳群の間で、由良川左岸の沖積地に条里制地割が確認できる阿良須遺跡が存在する。

阿良須古墳群周辺での発掘調査としては、由良川右岸の高川原遺跡で縄文時代の土器や石器、弥生時代中期の土器が出土したほか、古墳時代後半(7世紀)の竪穴式住居跡9基を検出している。阿良須城跡から南西にのびる丘陵上に所在する平遺跡の調査で発見された大良古墳は墳丘が削平されていたが、長さ約3.7m、幅約1.6m、深さ0.1mの礫敷きの主体部が検出され、鉄刀・鉄鏃が出土している。周辺の出土遺物から6世紀前半～中頃の古墳と推定されている。仲仙古墳群はゆるやかな丘陵先端部に位置し、調査された1号墳は直径約13mのやや楕円形の円墳で、高さは1.5～0.4mを測る。長さ2.8m、幅1.1mの墓室内に長さ2.4m、幅0.6mの木棺痕跡が検出され、須恵器の蓋杯3セットと臙、玉類、鉄剣などが出土し、6世紀中頃の古墳と推定されている。

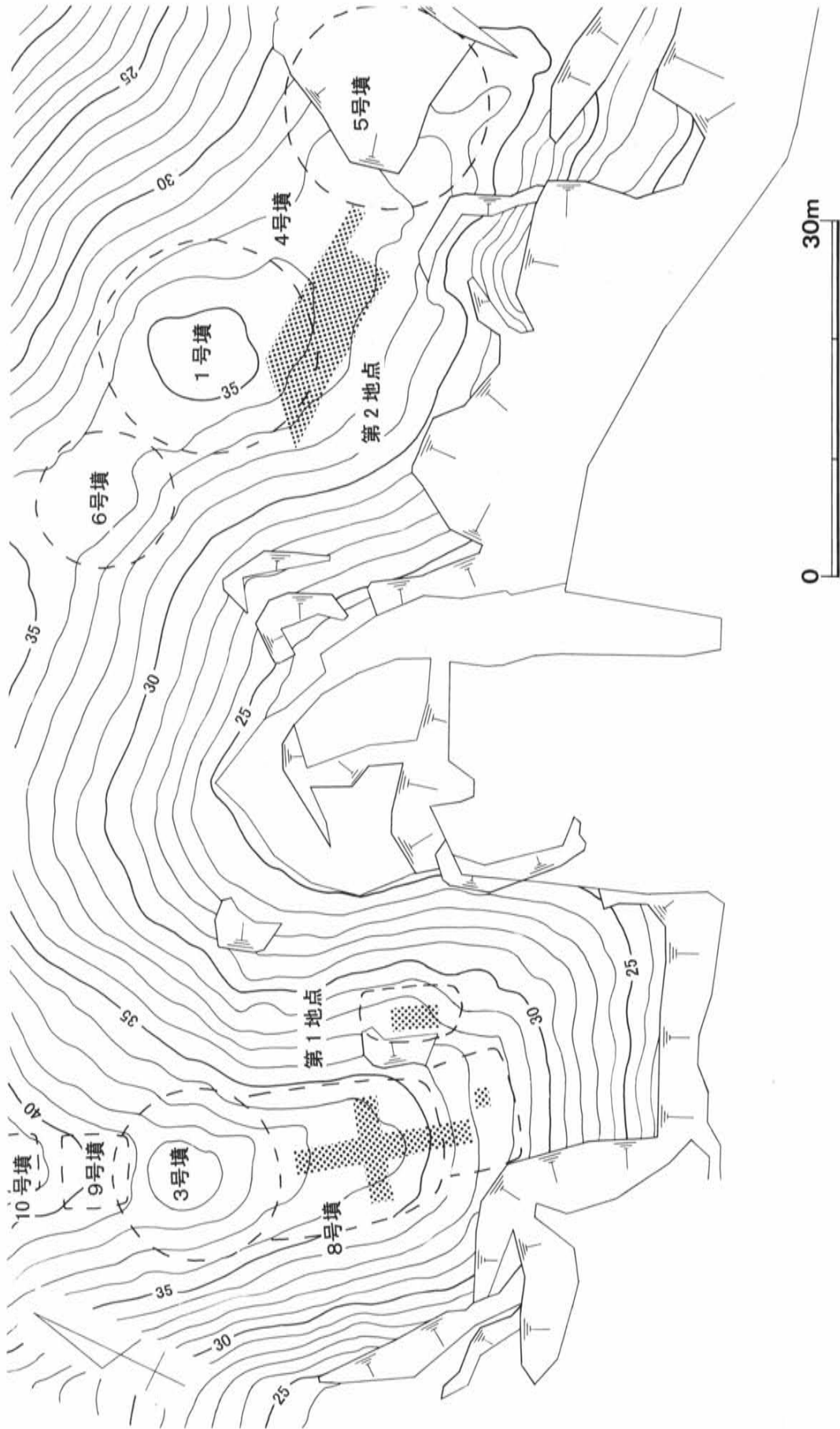
また、由良川と宮川が合流する地点にある河守北遺跡でも古墳時代後期の竪穴式住居跡のほか、平安時代の瓦が多量に出土している土坑や溝などを検出している。

3. 調査概要

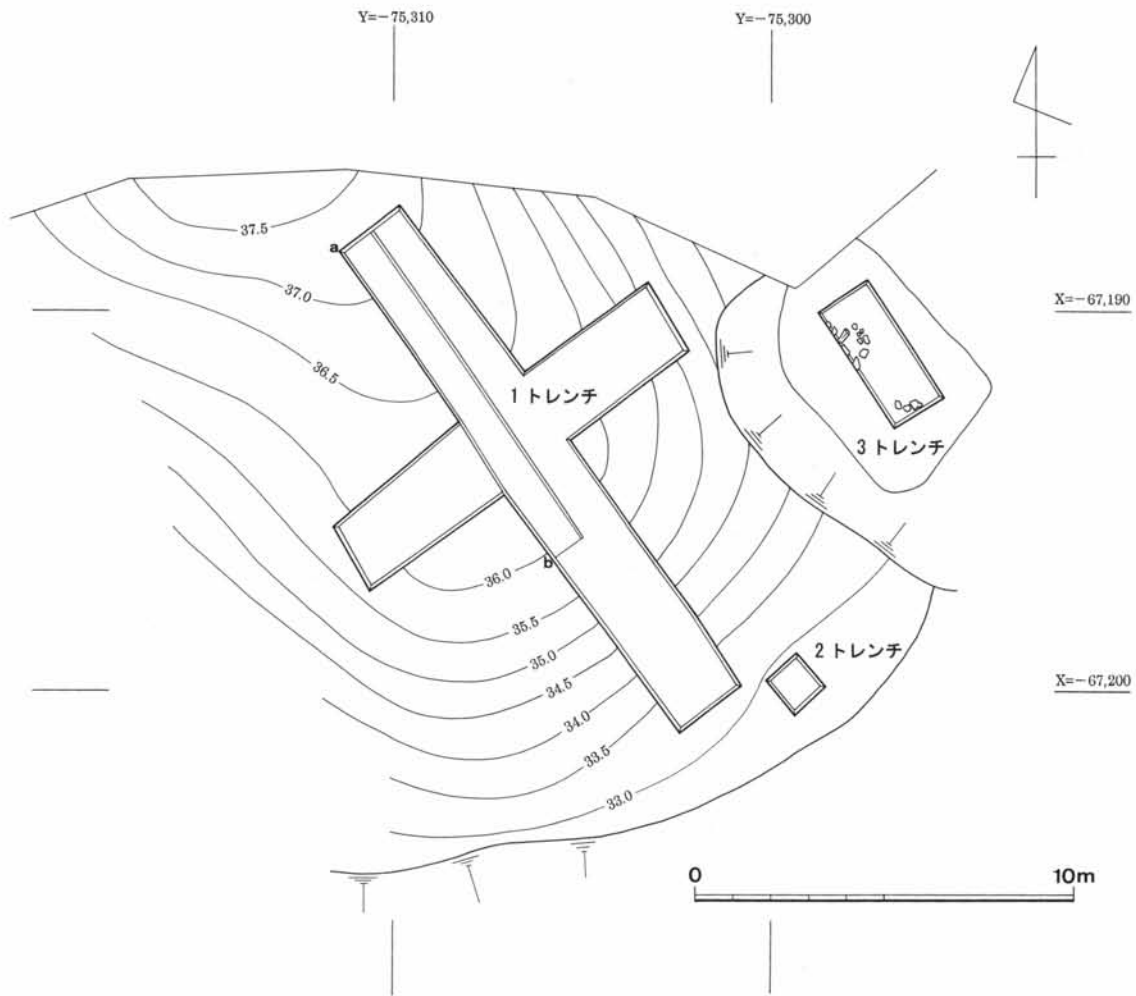
今回調査を実施した地点は、3号墳の墳丘裾部と8号墳、郭の可能性を考慮して試掘トレンチを設定した8号墳の下位の平坦地2か所を含めた第1地点、3号墳の東側で1・4号墳の墳丘裾部分の第2地点で調査を行った。

(1) 第1地点の調査

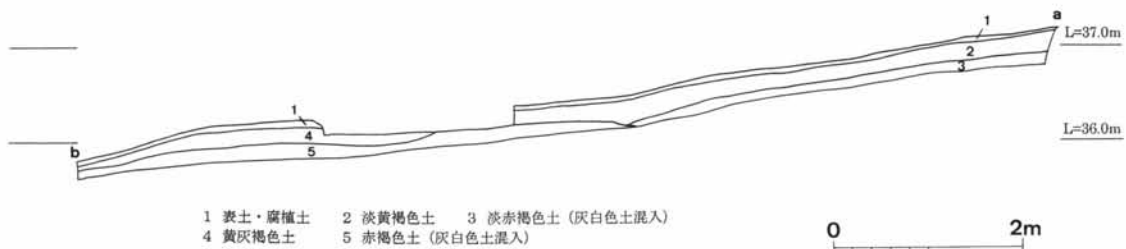
第1地点では、主に8号墳の墳頂平坦面と3号墳の裾(基底部)を確認するため十字にトレンチ



第15図 調査地周辺地形図



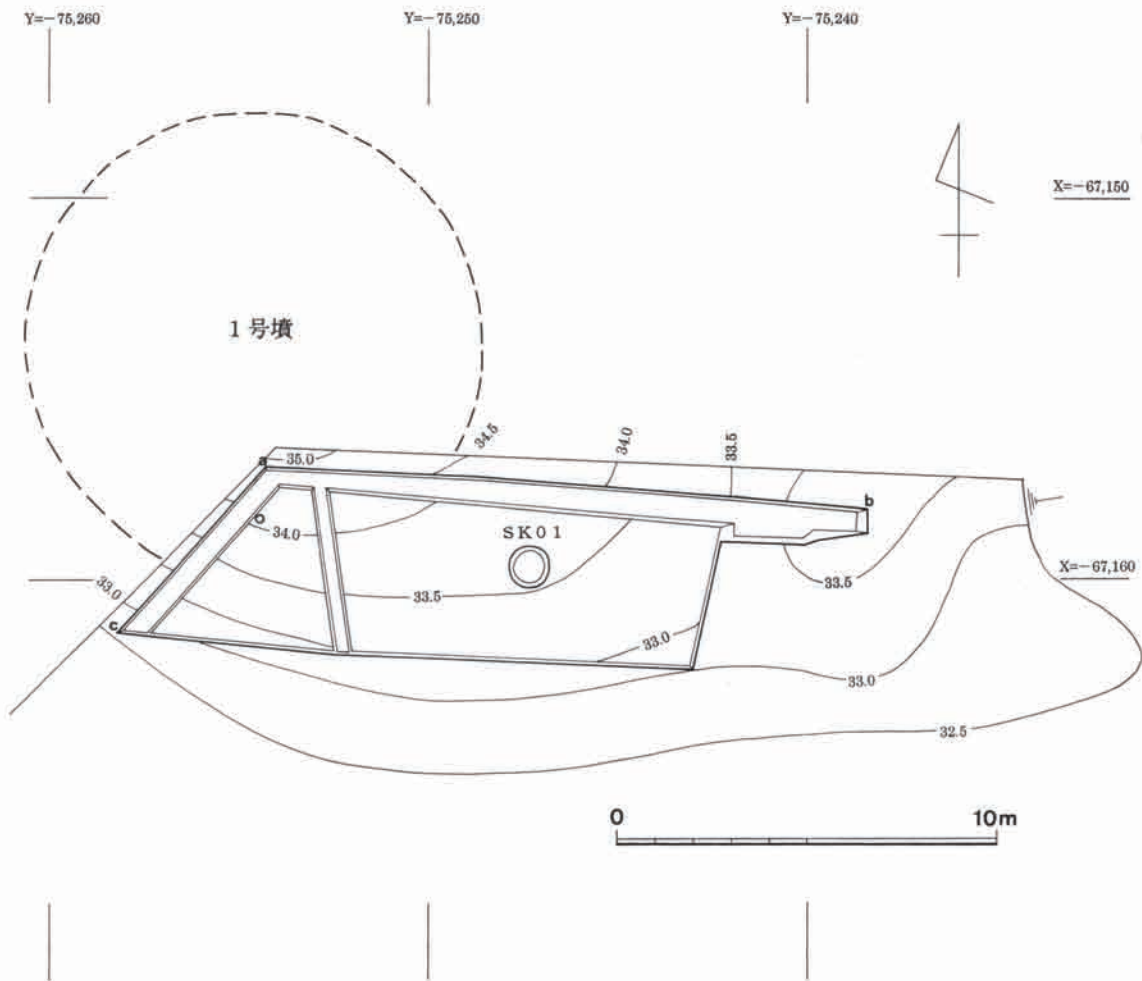
第16図 第1地点平面図



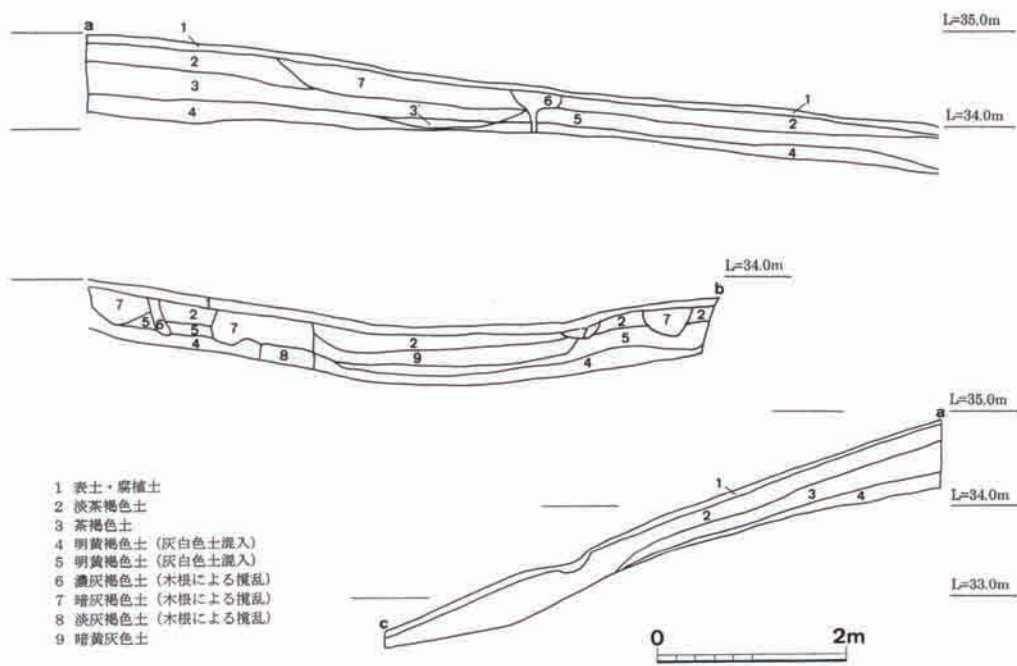
第17図 第1地点断面図

を設定した(1トレンチ)。ここでは樹木伐採の後、表土層以下を人力によって掘削した。地表から0.2~0.3mで灰白色土が混じる淡赤褐色土・赤褐色土の「地山」面となる。十字に設定した中央部で土色変化が認められたので、断ち割りを行ったところ木根によるものと判明した。積極的に古墳あるいは郭を想定できる遺構や遺物、土層の堆積は確認できなかった。

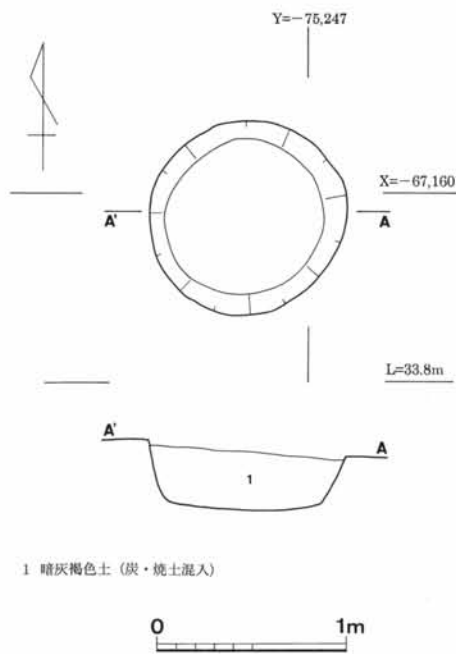
8号墳の下位で郭を想定して設定したトレンチ(2・3トレンチ)でも山城に関連した遺構や遺物、土層の堆積は確認できなかった。ただ、この平坦面のうち、3トレンチでは、河原石が散乱した近代以降の墓跡(墓穴は未確認)を確認しており、近世以降に墓地として利用するため平坦面を造成したと推測される。地元の人によると、人家の裏山の丘陵上に墓地が存在していたと言は



第18図 第2地点平面図



第19図 第2地点断面図



第20図 土坑S K01実測図

れている。

(2) 第2地点の調査

第2地点では、1・4・5号墳の墳丘規模と基底部を確認するためにトレンチを設定した。トレンチ西部では表土・淡茶褐色土・茶褐色土の下に「地山」と考えられる灰白色土混入の明黄褐色が堆積する。このうち茶褐色土を1号墳の盛土と考えて断ち割りを実施したが木根による攪乱で範囲を明確にできなかったが、西壁・北壁で検出した茶褐色土と、周辺地形から1号墳は直径12~14mの円墳と考えられる。4号墳にあたる部分での断面観察では明瞭な痕跡を検出していない。北壁東部の断面で、周辺で見られない暗黄灰色土を検出したことから、5号墳の西側に丘陵を切り離した溝が存在していた可能性が高い。

トレンチ中央部で直径約1.0m、深さ約0.3mの土坑S K01を検出した。埋土に炭・焼土が混入しているが土坑の内側は被熱していない。出土遺物がなく時期は不明である。

4. まとめ

今回の調査は、急斜面地の崩落危険箇所での崩落対策工事に伴う調査で、調査地点も限られており、8号墳推定地の平坦部の性格と、1・4・5号墳の規模と墳丘基底部を確認するための調査であり、各古墳の墳丘平坦面と埋葬施設の確認までには至っていない。調査でわかったことは、以下のとおりである。

第1地点の調査では、古墳に関連する遺構・遺物を検出しておらず、8号墳は、古墳ではなかったと思われる。また、郭に関連する遺構・遺物も検出していない。8号墳の推定地は、近世以降に周囲が削られ、平坦面が形成された可能性が高い。

第2地点の調査では、1号墳の盛土と推定される茶褐色土を検出した。周囲の地形から推測して4号墳は直径12~14m、高さ1.5~2.0mの円墳と考えられる。5号墳の西側では、丘陵の切り離し溝を検出したが、墳丘の大半は現給水施設にあったものと思われる。

(石尾政信)

注 補助員 真下春美 整理員 中村ひろみ・長尾恵美子

参考文献

堤圭三郎ほか『高川原遺跡発掘調査報告書』 大江町教育委員会 1875

松本学博「河守北遺跡発掘調査概要」(『大江町文化財調査報告書』第14集 大江町教育委員会) 2005

4. 野条^{のじょう}遺跡第11次・室橋^{むろはし}遺跡第4次発掘調査概要

1. はじめに

野条遺跡、室橋遺跡は、南丹市八木町に所在する。両遺跡は、八木町教育委員会と京都府教育委員会の分布調査、試掘調査により、古代から中世にかけて営まれた集落遺跡であることが確認されている。両遺跡地内において府営経営体育基盤整備事業が計画されたことから、京都府農林水産部の委託を受けて、野条遺跡600㎡、室橋遺跡400㎡を対象として調査を実施した。

調査担当者は、当調査研究センター調査第2課第3係長石井清司、同主任調査員田代 弘である。現地調査は、平成18年5月18日に調査を着手し、同年9月8日に終了した。

現地調査、発掘調査整理報告を実施するに当たり、京都府教育委員会、南丹市教育委員会、南丹市文化財保護委員会など機関からご指導、ご助言いただいた。また、現地作業・整理作業には、地元の方々に参加協力していただいた。ここに記して感謝申し上げます^(注1)

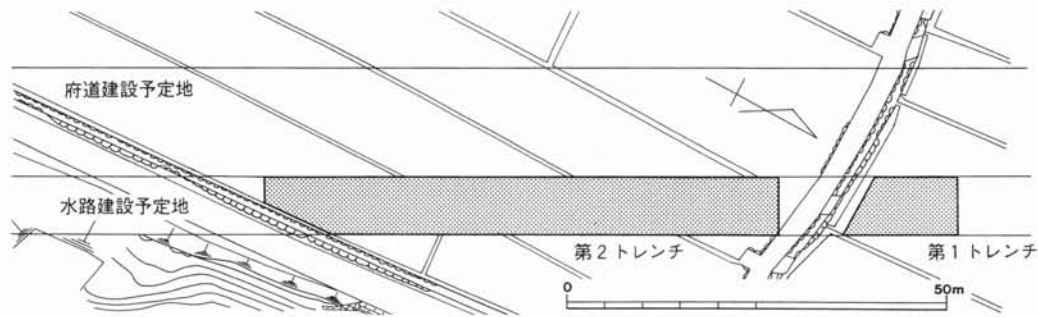
なお、調査に係る経費は、全額、京都府農林水産部が負担した。

2. 遺跡の位置

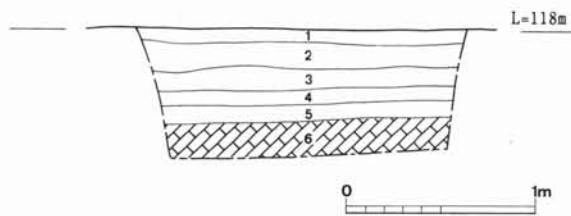
野条遺跡、室橋遺跡が所在する八木町室橋地区は、亀岡盆地の北端に位置する筏森山の東麓に



第21図 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次調査地位置図



第22図 野条遺跡第11次調査トレンチ配置図



第23図 第1トレンチ土層堆積状況(西壁)

1：耕作土 2：床土 3：暗灰褐色土 4：黒土色
5：暗茶褐色土 6：黄色粘土

位置している。このあたりは、丹波山中に源を発する保津川が亀岡盆地に注ぎ込むところで、園部盆地へ通ずる交通の要衝である。筏森山の東麓には肥沃な沖積地が形成され、豊かな田園風景が広がる。この付近では、集落跡や古墳、山城など、数多くの遺跡が確認されている(第21図)。

3. 調査概要

(1) 調査経過

野条遺跡第11次調査、室橋遺跡第4次調査の順に実施した。野条遺跡第11次調査は、5月18日に着手し、7月13日に関係者説明会を開催し終了した。室橋遺跡第4次調査は、6月19日に着手し、9月6日に関係者説明会を開催し9月8日に終了した。

調査においては、まず、調査地点の縄張りを行い、次に、重機による表土掘削を行った。耕作土と床土以下の土層を区別しながら表土を除去し、遺構を検出することができる深さまで掘削した。その後、人力により精査を行い、遺構の検出に努めた。作業の進み具合に応じて、随時、写真撮影、図面作成などの記録作業を行った。調査の結果、両遺跡から、多数の遺構を検出した。

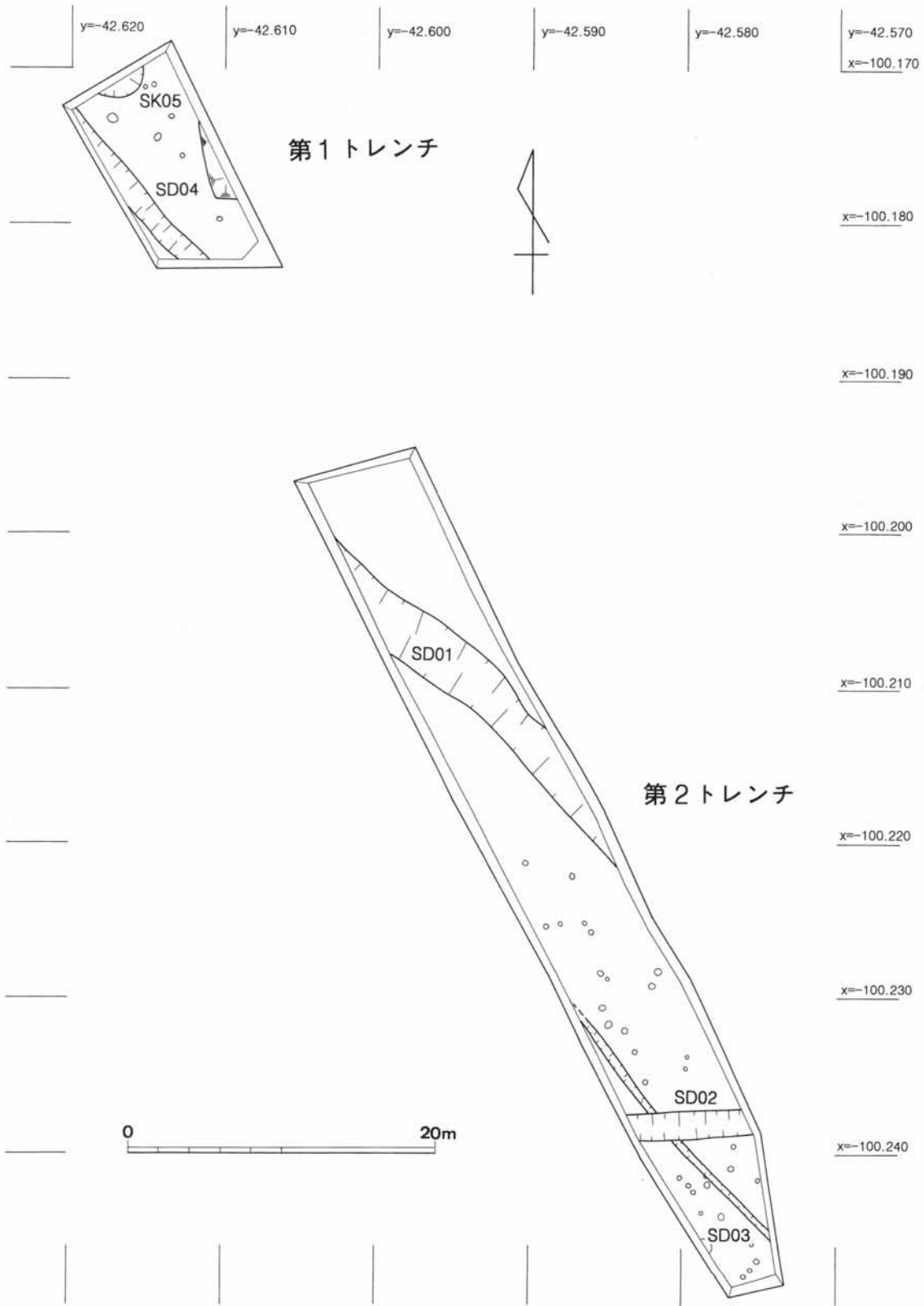
(2) 調査成果

①野条遺跡第11次

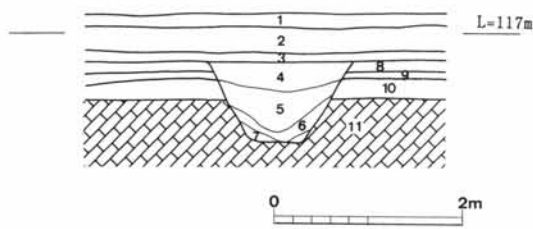
野条遺跡では、農業用水路を挟んで2つの調査区を設けた(第22図)。北側に位置する調査区を第1トレンチ、南側に位置するものを第2トレンチとした。基本層序は、第23図の通りである。1層は、水田の耕作土である。2層は、水田耕作土の床土にあたる土層である。2層は複数の水田耕作土と床土からなる土層であるが、一括した。3層は、中世の土器を包含する土層であり、中世以降の遺構が形成された文化層と考えられる。4層は、黒色～黒褐色の黒ボクの再堆積土である。5層は、4層と5層の漸移的土層である。6層は、黄色粘土層である。チャートの小礫を含む無遺物層であり、地山とした。遺構は、5層あるいは6層上面で検出した。

1) 検出遺構 溝、土坑、ピット、攪乱坑などを検出した(第24図)。

第1トレンチ：東西8m、南北15mの長方形の調査区である。120m²を対象とした。



第24図 野条遺跡第11次調査遺構検出状況



第25図 溝S D02断面(東端)

1：耕作土 2：床土 3：暗灰褐色土 4：黒褐色粘質土 6：黒褐色土(黄色ブロック混じり) 7：暗褐色粘質土 8：黒色土 9：暗茶褐色土 10：明茶褐色土 11：黄色土(地山)

溝S D04 南北に主軸をもつ溝である。規模は、検出長、約13m、幅約1.5m、深さ約0.3mである。埋土は黒色土で、溝底に、チャート小円礫が認められた。埋土中から、奈良時代後半期の須恵器杯身が出土した(第26図10)。

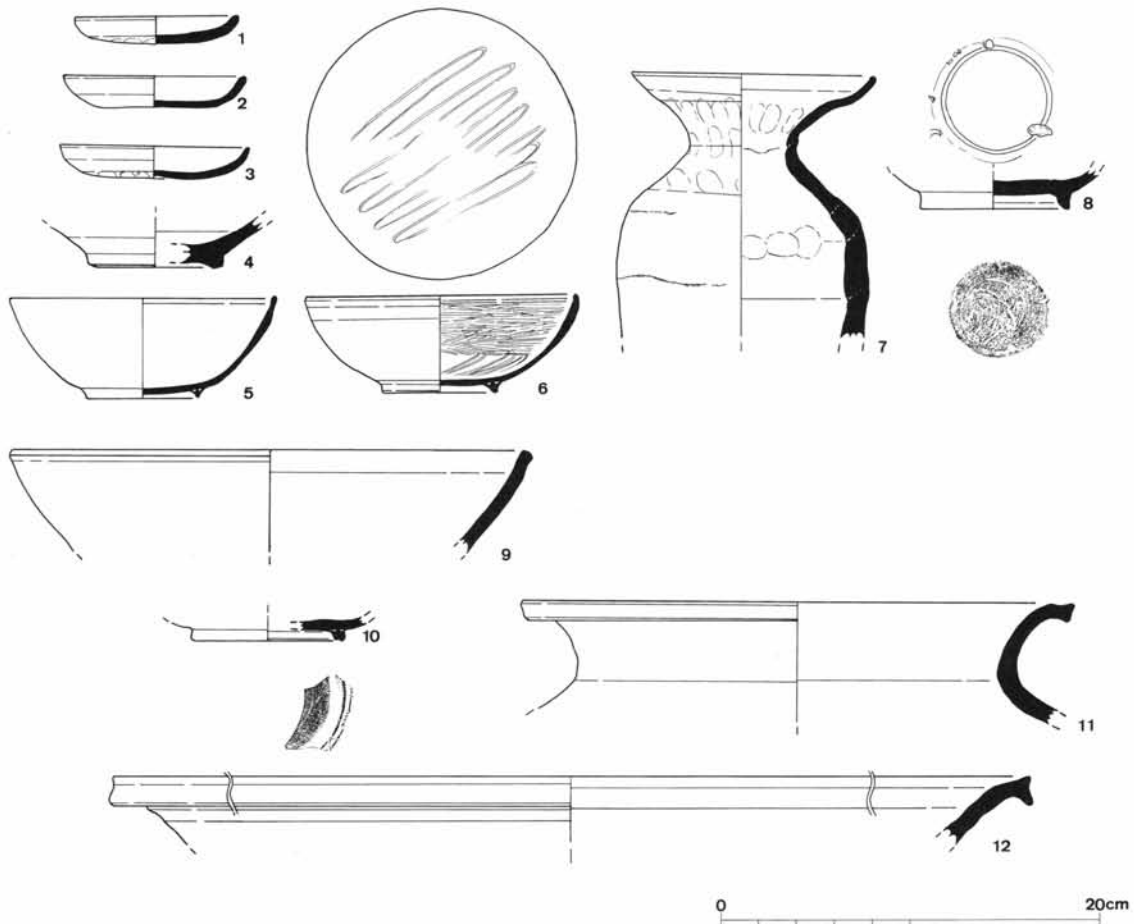
土坑S K05 長さ約13m、幅約1.5m、深さ約0.3mの不整形土坑である。埋土は黒色土である。遺物を含まず、形成年代は不明。風倒木の痕跡であろうか。

ピット 直径20~40cm前後のものがある。柱の痕跡をもつものはなく、散発的である。

攪乱坑 2層直下より形成された大型土坑である。下層は微細な砂層であり、上層は大型の礫群が充填されている。近代の瓦、磁器破片が包含されていた。現代の遺構と考えられる。

第2トレンチ：480m²を対象とした。

溝S D01 南北に主軸をもつ溝である。規模は、検出した長さ約28m、幅約3.2m、深さ約0.2



第26図 野条遺跡第11次調査出土遺物実測図

1~7：第2トレンチ 8・9・11・12：第2トレンチ 10：第1トレンチ溝S D04

mである。埋土は、砂礫が多量に混入した黒色土である。礫は円礫で、大きい物は拳大ほどのものが認められた。砂礫に混じって、土器類が出土した。土器類には、須恵器、土師器、緑釉陶器などがある。出土遺物は、平安時代後期に製作された土器が主体を占める。

溝S D02 東西に主軸をもつ溝である。検出長約8m、幅約1.8m、深さ約0.8mである。底面は平坦に形成されている。断面形は、逆台形である。埋土は、暗灰褐色土である。第3層中で形成された遺構である。埋土上層と下層から土器が出土した。出土土器は、土師器皿・甕、瓦器碗・皿、陶磁器類などである。上層の土器は細片化・摩耗した物に限られる。下層出土遺物を図示した(第26図)。

溝S D03 南北に主軸をもつ溝である。埋土は、黒色土である。第5層中で形成された遺構と考えられる。検出長約20m、幅約0.3mである。溝底に、水流により堆積したと見られるチャート小円礫が認められた。出土遺物がなく、形成年代は不明である。

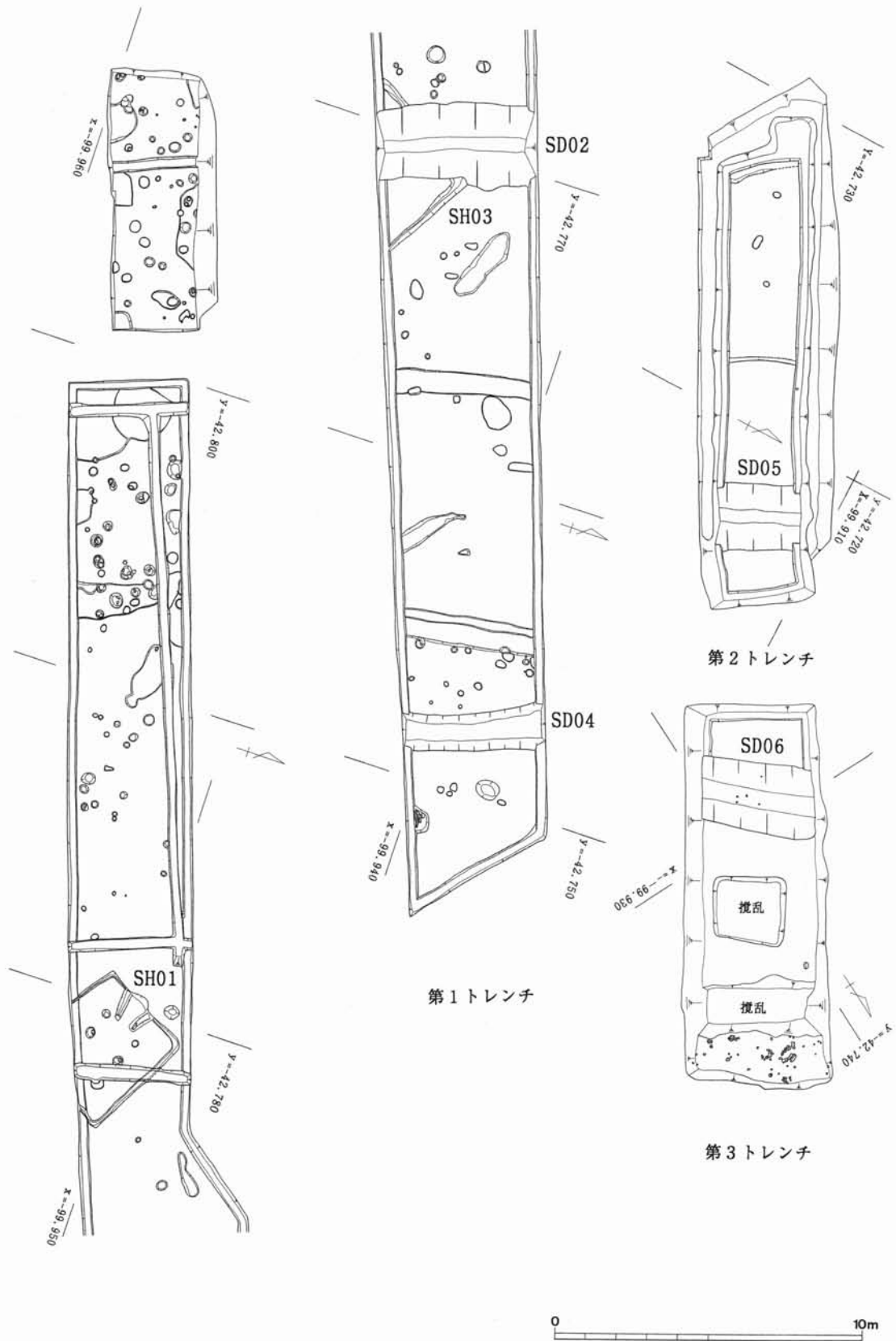
ピット ピットは、トレンチ内に散発的に分布しており、建物としてまとまるものは無い。

2) 野条遺跡第11次調査出土遺物(第26図)

1～7・9は、溝S D02下層、8・11・12は溝S D01、10は、溝S D04から出土した遺物である。1～3は土師器皿、4は白磁碗、5・6は瓦器碗、7は瓦器瓶である。9は瓦器鉢である。



第27図 室橋遺跡第4次調査トレンチ配置図



第28図 室橋遺跡第4次調査検出遺構実測図

平安時代末期頃～鎌倉時代にかけての遺物群である。8は近江産緑釉椀、10は奈良時代の須恵器杯身、11・12は平安時代の須恵器甕である。

②室橋遺跡第4次

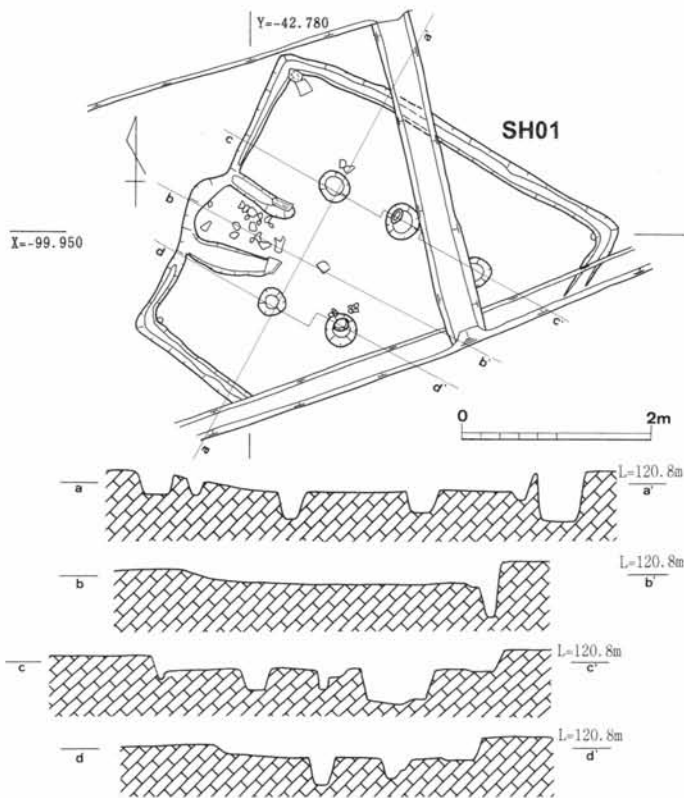
調査対象地は、水路建設が予定されている東西に長い地区である。東西に3つ(第1～3トレンチ)、南北に一つのトレンチ(第4トレンチ)を設けて調査を実施した(第27図)。

室橋遺跡の基本層序は、上層から、1：暗青灰色土(耕作土)、2：黒色土、3：暗茶褐色土、4：黄色土である。第3層は、無遺物層の地山である。第4層上面で全ての遺構を検出した。

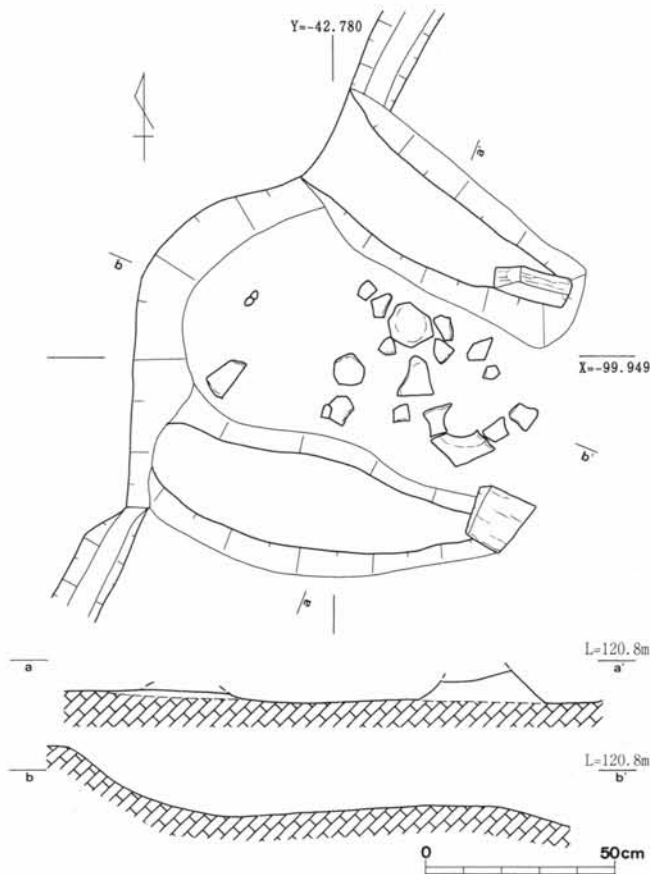
1) 検出遺構(第28図)

第1トレンチ：第1トレンチは、第2層、第3層が無く、耕作土直下で第4層が認められた。このトレンチでは、竪穴式住居跡、溝、土坑、ピットなど、多数の遺構を検出した。主な遺構について説明する。

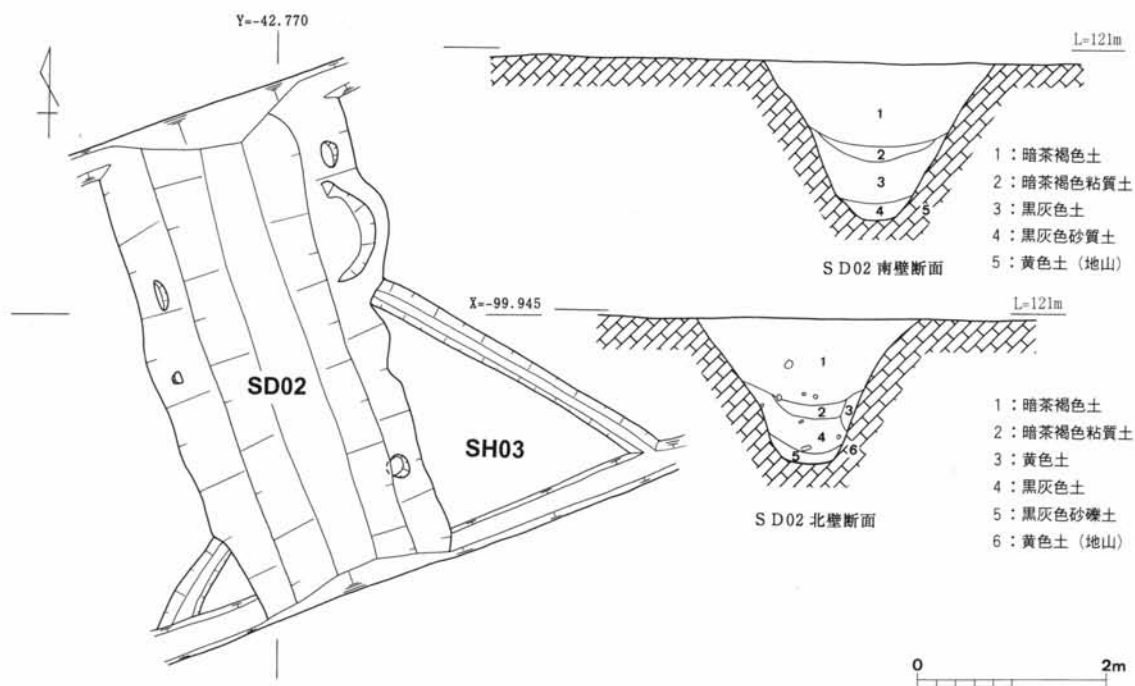
竪穴式住居跡SH01(第29図) 平面形が、一辺約3mの方形竪穴式住居跡である。北辺中央付近に造り付けの竈が認められた。竈は壊れており、基部と焚き口の一部が遺存していた。焚き口の両端には、花崗岩の板石が付加されていた。壊れた竈の中から、土師器甕と甑の破片が出土した。床面では、屋根を支えた柱穴、壁に沿って掘られた溝(周壁溝)を検出した。出土した土器から、古墳時代中期中頃に形成された遺構と考えられる。



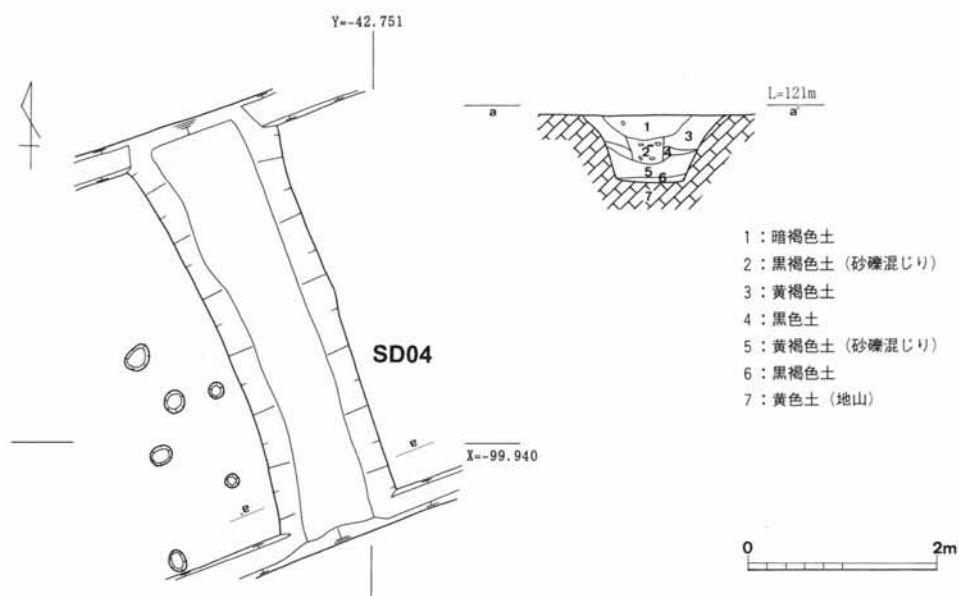
第29図 室橋遺跡第4次調査竪穴式住居跡SH01実測図



第30図 室橋遺跡第4次調査竪穴式住居跡SH01竈実測図



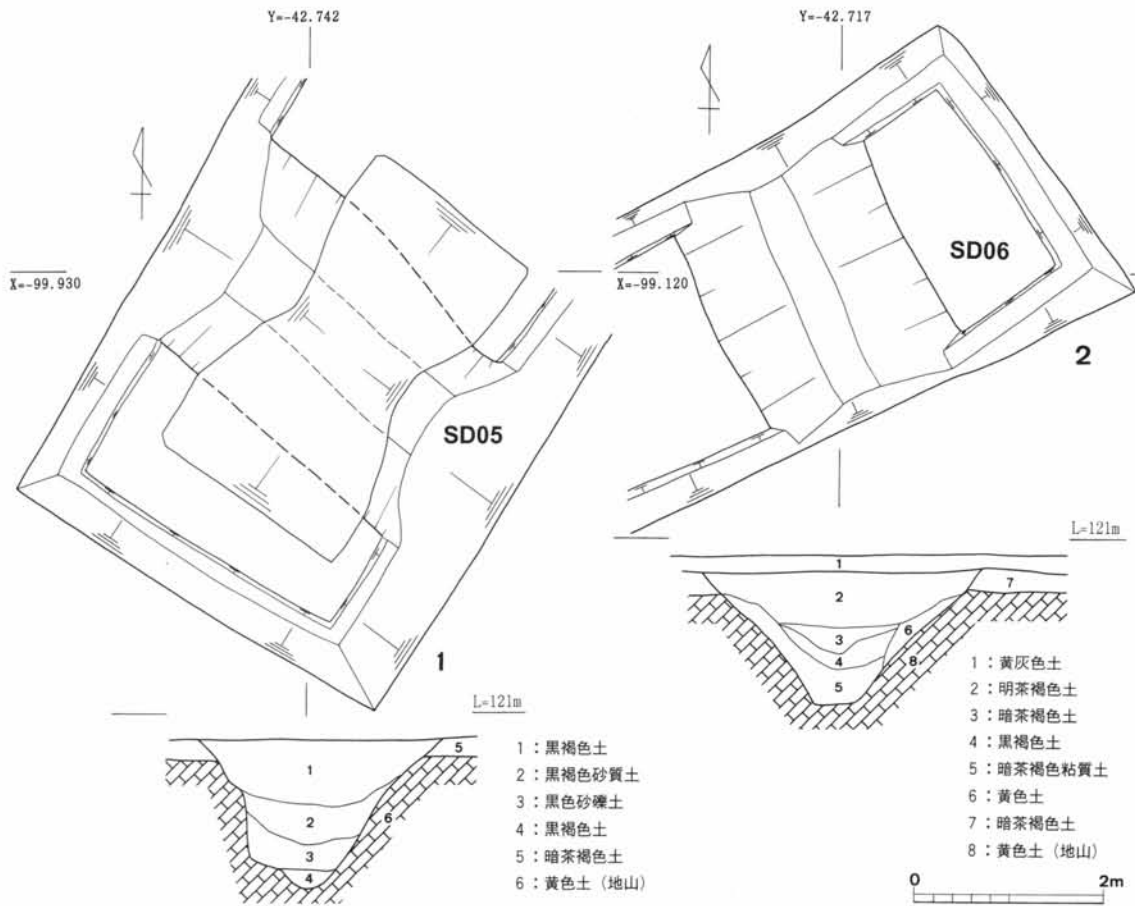
第31図 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ溝S D02・竪穴式住居跡S H03実測図



第32図 室橋遺跡第4次第1トレンチ溝S D04実測図

竪穴式住居跡S H03(第31図) 方形の竪穴式住居跡である。溝S D02と重複しており、溝S D02により大半が破壊されていた。南西隅の一部を検出した。遺物が出土しておらず、遺構の大半が調査対象地外にあることから、形成年代と規模など、遺構の詳細については明らかでない。建物主軸が、竪穴式住居跡S H01とほぼ同じであること、隣接することなどから、S H01と同時期とみている。

溝S D02(第31図) 幅約2.2m、深さ約1.6mの規模をもつ、断面形が「V」字形の溝である。溝の下層から平安時代前期の土器類が、上層からは平安時代後期の土師器と須恵器が出土してい



第33図 室橋遺跡第4次調査第2・3トレンチ検出溝実測図

1：第2トレンチ溝SD05 2：第2トレンチ溝SD06

る。土器類は、食器類・貯蔵用器などの生活用具である。

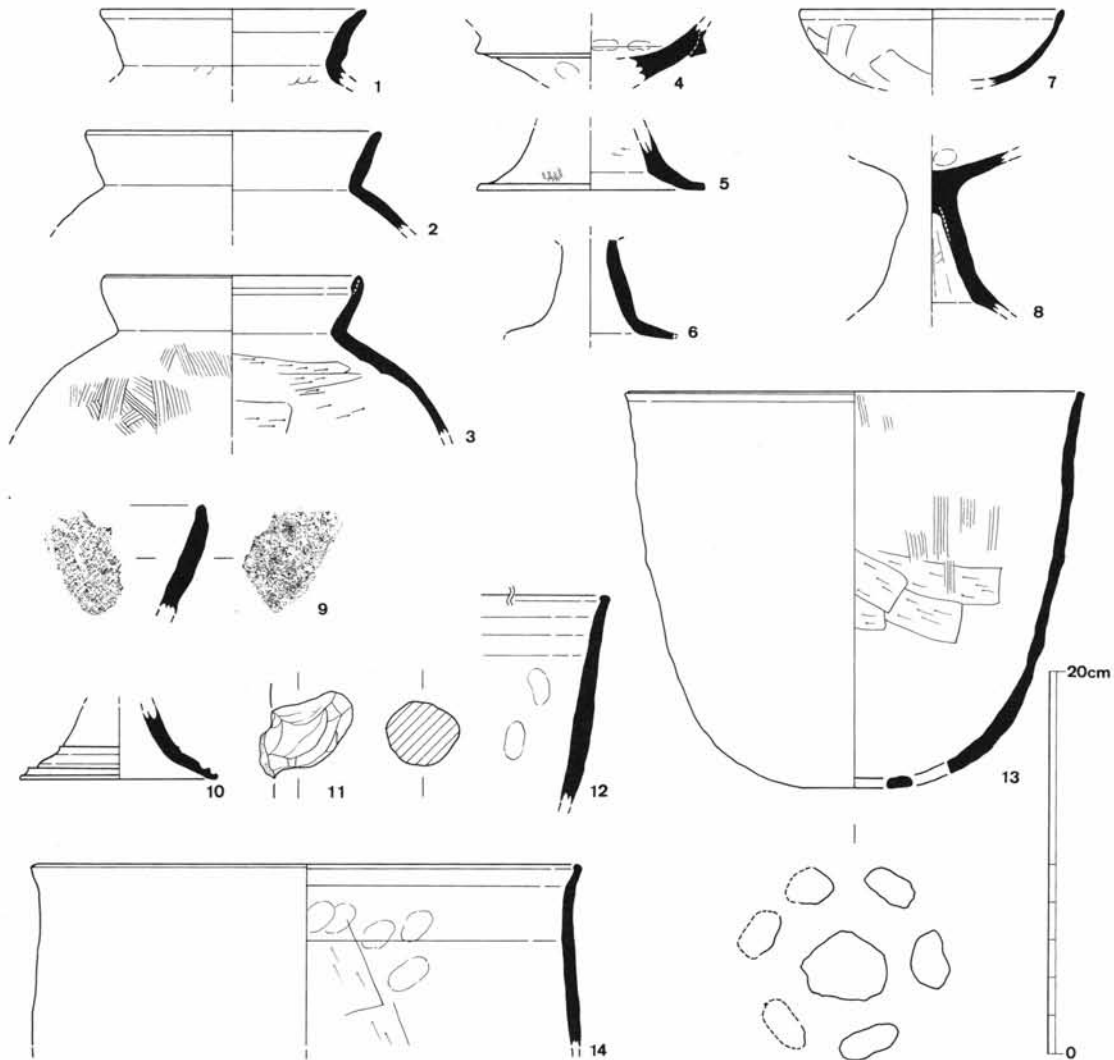
第2トレンチ：水路の西側に位置する。現代の攪乱が著しい。南北に走る溝一条を検出した(第33図-1)。幅約2.4m、深さ約1.6mの溝である平安時代の遺物を少量検出した(第35図)。

第3トレンチ：4m×16mのトレンチである。耕作土、床土の下に黒色土の厚い堆積が見られた。このトレンチでは、溝2条とピットを検出した。トレンチの東端で大溝を検出した。溝は、幅約2.5m、深さ約1.6m、断面「V」字形の断面をもつ。出土遺物がなく、形成時期は不明。

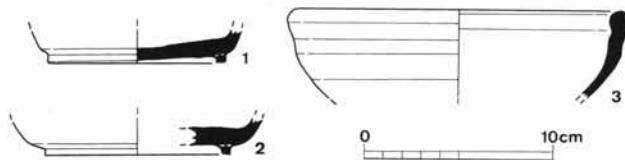
第4トレンチ：調査対象地の南東部に設けた試掘トレンチである。地山まで掘削したが、遺構は認められなかった。

2) 室橋遺跡第4次調査出土遺物(第34～37図)

第1トレンチSH01出土遺物(第34図1～14) 住居跡埋土出土遺物である。1～3は甕である。1・2は、直線的立ち上がる口縁部を有する。3は、口縁が内湾し端部を内側に肥厚させる古式の甕である。4は、器台の受け部の一部とみられる。5は器台の脚部、6・8は高杯の脚部であろう。7は、高杯の杯部である。9は、粘土紐接合痕を残す製塩土器である。内湾しながら立ち製塩土器であろう。10は古式の須恵器高杯脚部である。11～13は、甌である。11は把手、10は底部に孔がある。



第34図 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ竪穴式住居跡S H01出土遺物実測図



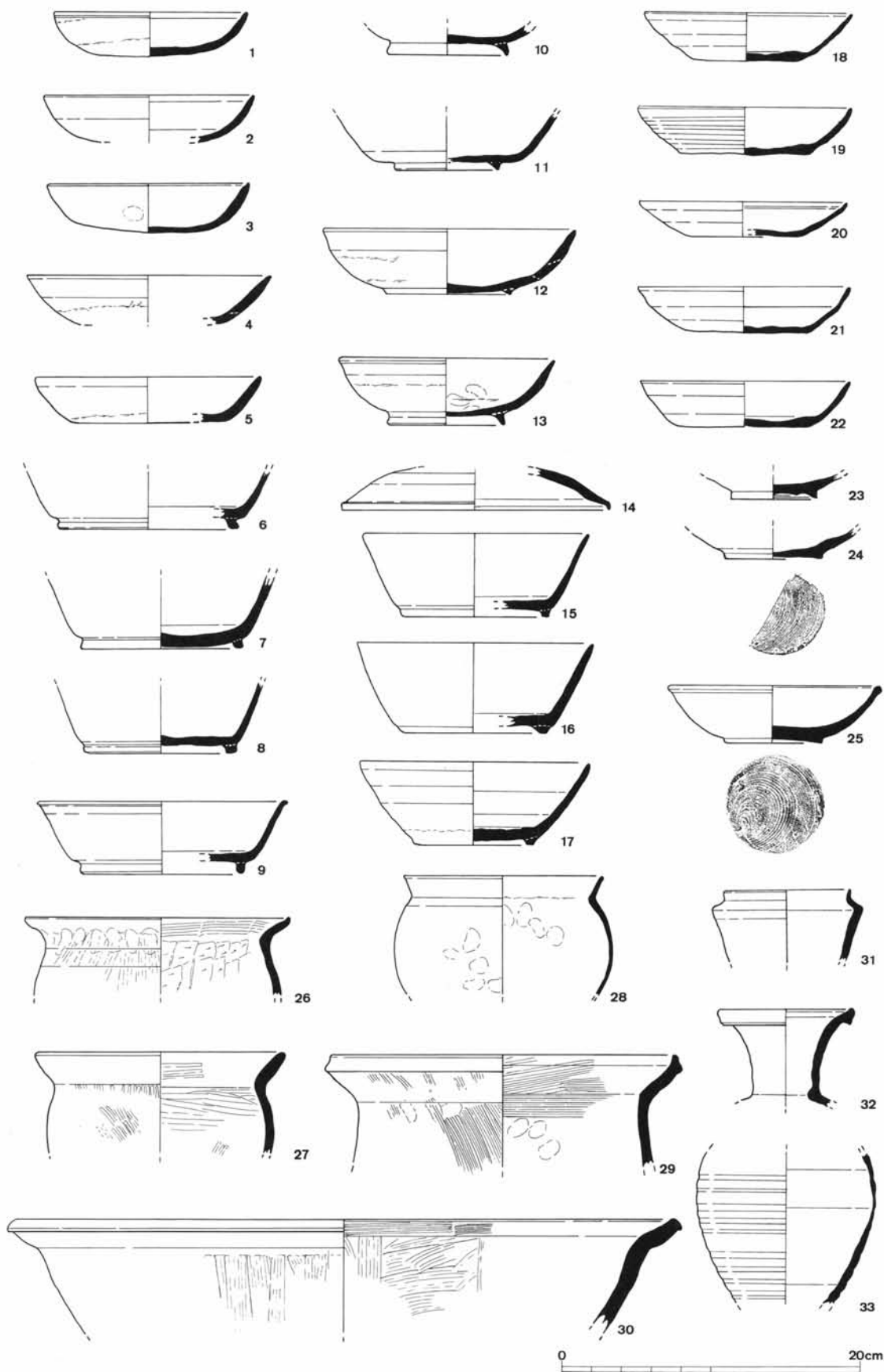
第35図 室橋遺跡第4次調査第2トレンチ
竪穴式住居跡S H05出土遺物実測図

第1トレンチS D02出土遺物(第36図1
~33) 埋土中層で出土した平安時代の
土器群である。平安京I~III期頃にか
けてのものがある。1~4は、土師器杯身、
5~9・15~17、18~22は、須恵器杯身
である。10~13は、土師器碗、23・25は

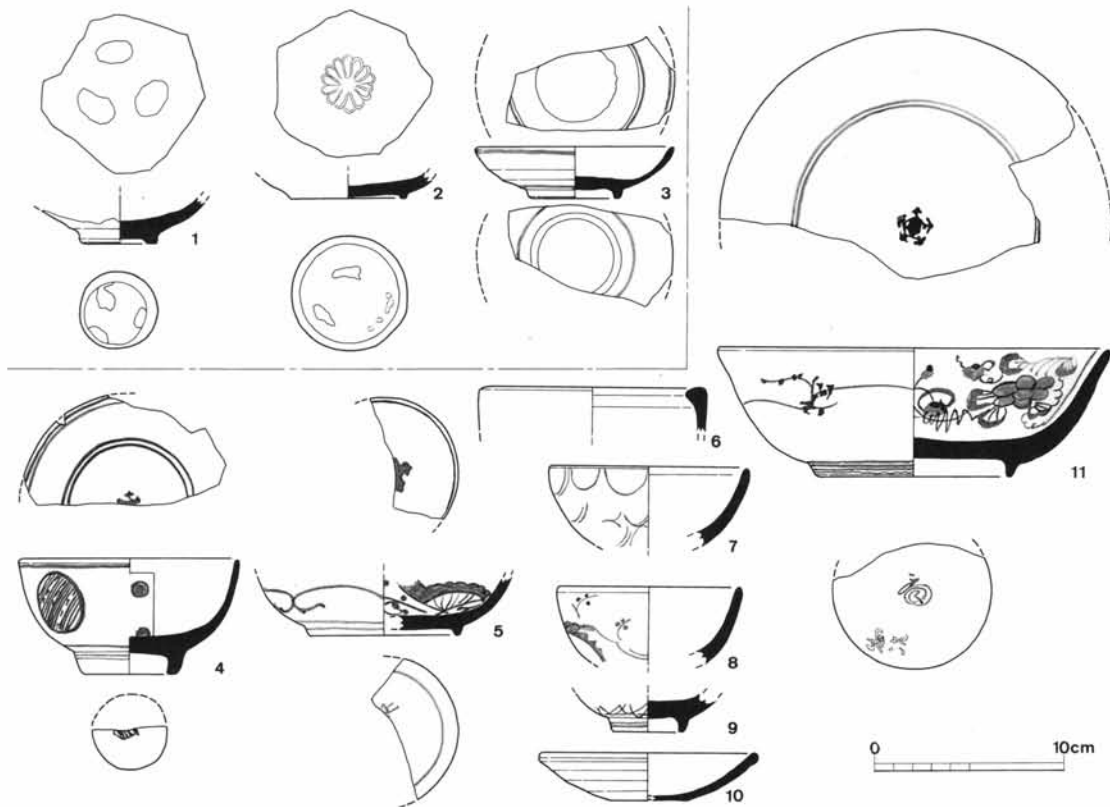
須恵器碗である。26~29は土師器甕である。30は、土師器鍋である・31は、短い口縁部をもつ小形の須恵器壺である。32・33は、須恵器瓶である。

第2トレンチS D05出土遺物(第35図1~3) 1・2は、貼り付け高台を有する須恵器杯身の底部である。3は、口縁端部を内側に肥厚させる碗である。

第1トレンチ出土近世遺物(第37図1~10) 1~3は、ピットの底面で検出した皿である。1・2は陶器、3は磁器である。1は見込みに砂目が3か所認められる。2には菊花が刻印されている。4~11は暗渠に充填された礫に混じって出土した陶磁器である。4・5・7~9・11は



第36図 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ溝S D02出土遺物実測図



第37図 室橋遺跡第4次調査第1トレンチ近世遺物実測図

染付である。4・7・8・9、5・11は皿である。6は青磁香炉である。10は陶器製の灯明皿である。

3. まとめ

(1) 野条遺跡では、溝、ピット、土坑などの遺構と、奈良時代から平安時代にかけての土器類を検出した。溝には、水路とみられるもの(溝S D01・03)と、区画溝とみられるもの(溝S D02)が認められた。これらは、当該調査に隣接する府道建設予定地で検出された溝の一部である。

(2) 室橋遺跡で明らかになった事柄は以下の点である。

1) 古墳時代中期の竪穴式住居跡を2基検出しており、周辺に複数の竪穴式住居跡が存在すると思われる。室橋遺跡の成立は、古墳時代中期に遡ることが判明した。

2) 遺跡地内に南北に流れる複数の大溝があることが判明した。第1～3トレンチで検出した大溝のうち溝S D02・05は、出土土器から平安時代前期以前に掘削されたものであることが判明した。これらは、古代の基幹的用水路とみられるものであり、今後、上流域・下流域においてどのように遺構が展開しているかを検証することが望まれる。

(田代 弘)

注1 松本敏子・麻田あさの・三髯順子・松本孝子・西山尚史・西垣久江・木村末子・松倉和美 明田弘之・麻田節子・松本安治・麻田忠治・梅井ゆき子・平井義次・福本正吉・広瀬慶典・中川慎也

注2 上村憲章ほか「第二章 土器と陶磁器」(『平安京提要』 角川書店) 2004

5. 亀岡園部線地方道路交付金事業関係遺跡 平成18年度試掘調査概要

はじめに

この調査は、平成18年度亀岡園部線地方道路交付金事業に先立って、京都府土木建築部の依頼を受けて行った案察使遺跡と桜久保遺跡の試掘調査である。調査対象地は、それぞれ亀岡市保津町町上火無、千歳町毘沙門下坪に所在する。現地調査は平成18年12月1日～12月21日まで実施した。調査面積は各100m²である。

調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛、同主任調査員森島康雄が担当した。調査に当たっては京都府教育委員会、亀岡市教育委員会、保津町自治会、千歳町自治会をはじめ、多くの方々にご協力をいただいた。記してお礼申し上げたい。

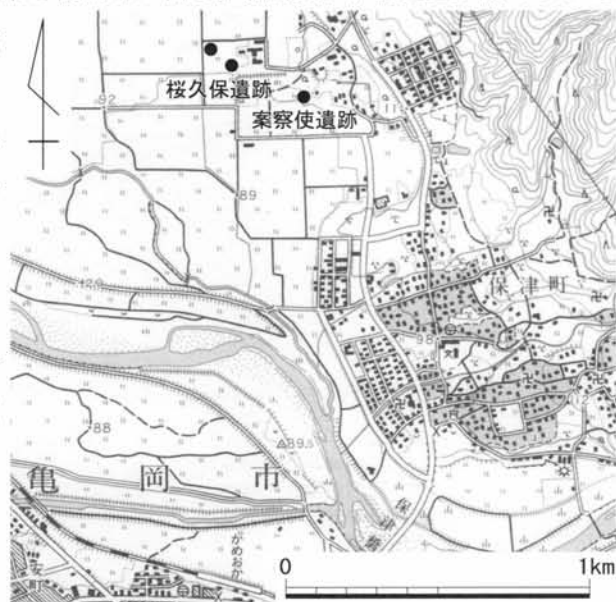
なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

(1)案察使遺跡第8次

案察使遺跡は亀岡市保津町の北部に所在する。遺跡の中心は桂川左岸の沖積平地であるが、平成15年度から実施している亀岡園部線関係の調査地は、沖積平地の縁辺部から段丘末端にかかる部分で、遺跡の北東部縁辺にあたる。平成15・16年度の調査では、沖積平地に設けられた調査区で縄文時代早期の押型文土器や弥生時代中期末と後期末の粘土採掘土坑が、段丘上に設けられた調査区で弥生時代中期の土器棺墓や平安時代末の柱穴などが検出された。

調査概要 今回の試掘トレンチは、縄文時代早期の押型文土器が出土した調査区の北西に隣接する段丘上に位置し、同時代の遺構・遺物の検出される可能性が考えられた。

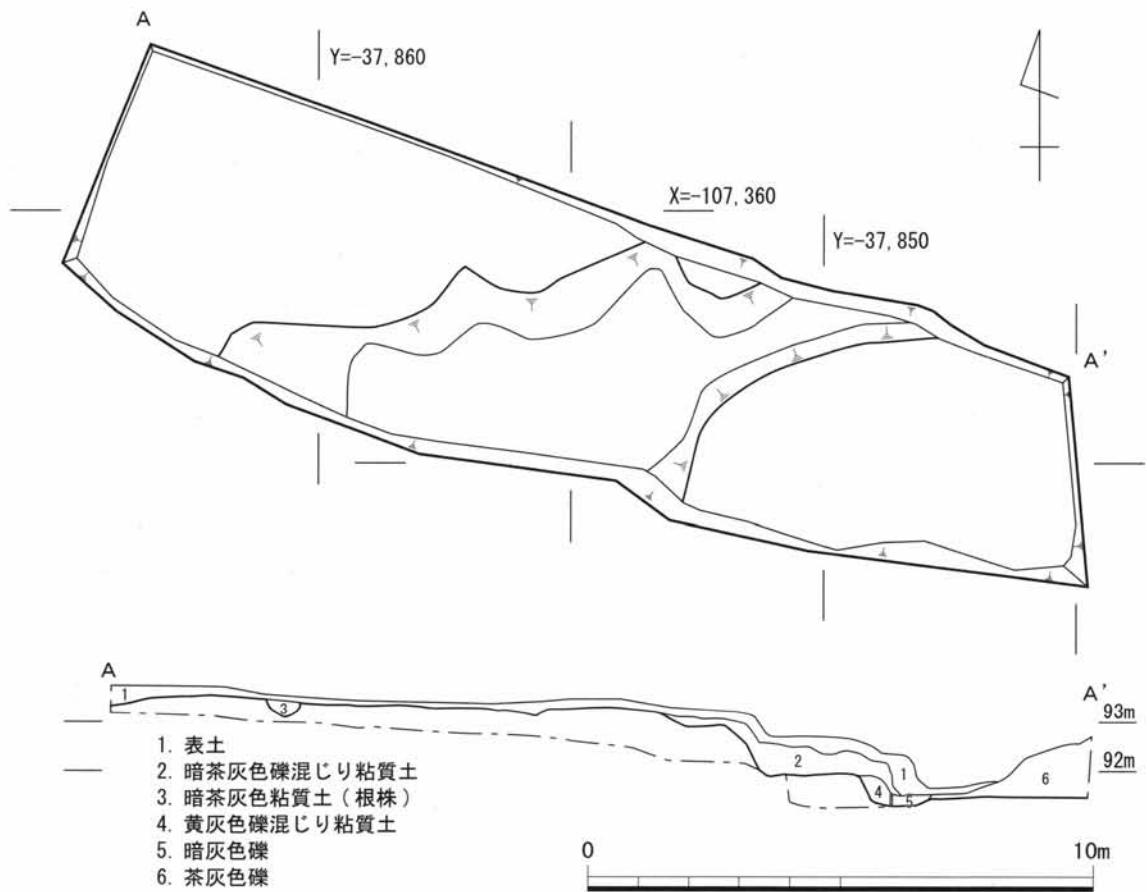
調査地には、西南西から東北東に延びる谷状地形が認められた。これは、沖積平地に広がる水田に水を引くために30年ほど前から徐々に掘削が進められた結果生じた人工的な地形である。調査トレンチはこの谷状地形を斜めに横切る形で設定した。



第38図 調査位置図(S=1/25,000亀岡)



第39図 調査地配置図 (S=1/4,000)



第40図 案察使遺跡トレンチ平面図・断面図 (S=1/150)

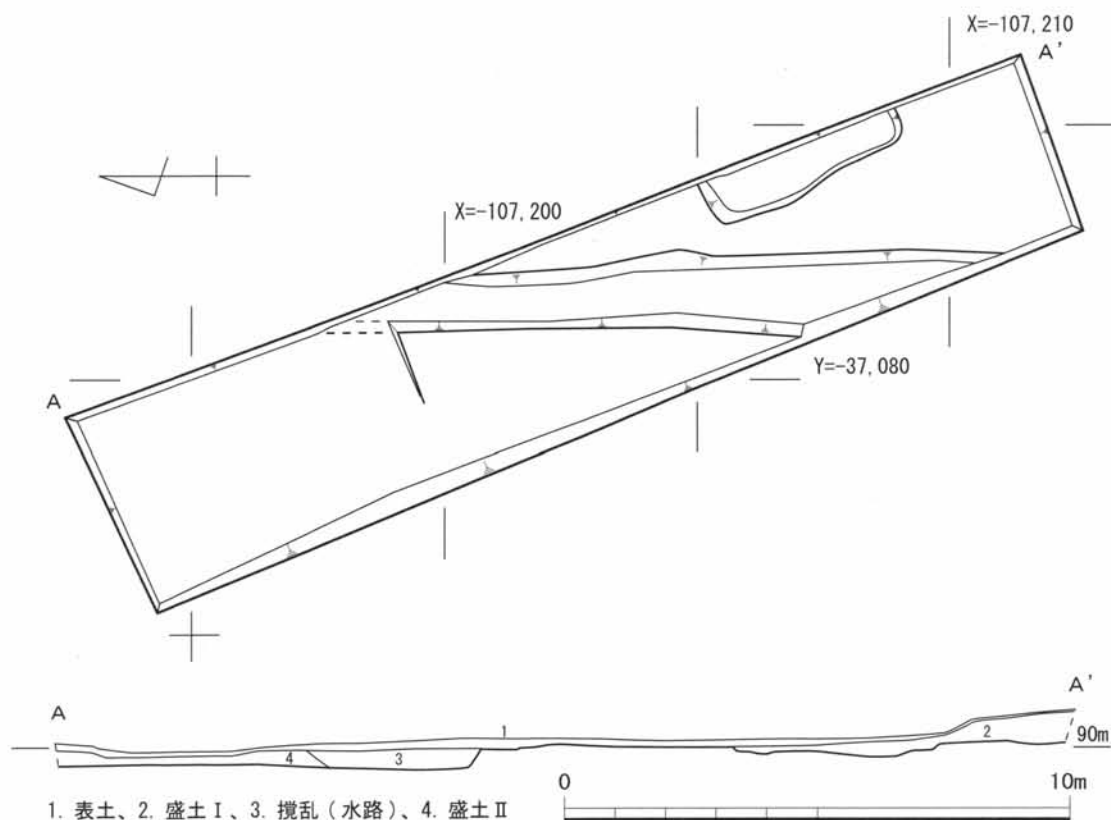
調査の結果、谷状地形の北西側は全面に表土直下で暗赤茶色粘質土と灰色礫の地山が認められ、谷状地形の北側斜面には暗茶灰色と黄灰色の礫混じり粘質土が堆積していた。谷状地形の底には土止めの木杭が打たれ、わずかに暗灰色の礫が堆積していた。谷状地形の南東側は表土がほとんどなく、締まりの悪い茶灰色の礫が堆積していた。段丘上から崩落した堆積物と考えられる。遺物は出土しなかった。

まとめ 谷状地形が掘削されたところが本来の段丘裾であることが判明した。谷状地形は、段丘末端からの湧水を求めて掘削されたものと考えられる。遺構・遺物ともに検出されず、昨年度に行った試掘調査地点とあわせて遺跡の範囲をはずれているものと考えられる。

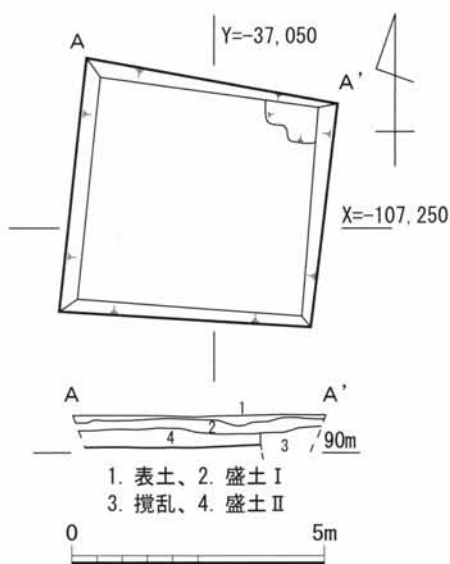
(2) 桜久保遺跡

桜久保遺跡は、亀岡市千歳町南部に所在する。遺跡は案察使遺跡の北西に位置し、遺跡の範囲は丘陵部から沖積平地にまたがる。過去の調査例はなく、今回が初めての調査になる。今回の調査地点は遺跡の北西端付近の沖積平地にあたる。

調査地はほぼ平坦な荒地で、周辺のは場整備以後、耕作された形跡は認められない。試掘トレンチは、南北2か所に設定し、それぞれ、北トレンチ、南トレンチと称した。面積は北トレンチが約80㎡、南トレンチが約20㎡である。



第41図 桜久保遺跡北トレンチ平面図・断面図(S=1/150)



第42図 桜久保遺跡南トレンチ
平面図・断面図(S=1/150)

調査概要 北トレンチでは現代の盛土を除去すると、南北方向の溝が認められた。この溝には塩ビ管やU字溝が接続されており、ほ場整備前の水路と考えられる。この水路の東側は灰黄色粘質土の地山が認められるが、西側には別の盛土があり、その下に青灰色粘土の地山が認められる。遺構・遺物は認められなかった。

南トレンチでは現代の盛土を除去すると、灰黄色粘質土の地山が認められた。盛土は2層に分れ、下層の盛土上面から掘り込まれた攪乱がトレンチの北東隅に認められた。旧表土が認められないことから、盛土整地の前に旧地表が削平されているものと考えられる。遺構・遺物は認められなかった。

まとめ 南北トレンチともに、2層の盛土整地が認められ、旧表土は認められなかった。新しい方の盛土は近年に実施されたほ場整備に伴うものと考えられる。北トレンチでは、ほ場整備以前にも、水路の西側に盛土が行われている。旧地表面が残っていないのは、この際に削平されたためと考えられる。

(森島康雄)

調査参加者は以下の通りである(順不同・敬称略)。

調査補助員 草薙大蔵

整理員 中島恵美子

作業員 春木一栄・山本君代・秋田嘉春・関口渉・岩本滝雄・松本栄子・岩尾学・伊津大輔・伊津房江・伊豆田進・森川セイ・鴨井秋夫・八木まゆみ・島津イトコ・平野かすみ・谷尻小ちゑ・広瀬秀夫・田中康民・安藤恵子

参考文献

中川和哉「案察使遺跡第5・6次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第116冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2005

中川和哉「案察使遺跡第7次掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第119冊 ((財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2006

6. ^{ながおかきょう}長岡京跡右京第889次・^{いのうち}井ノ内遺跡発掘調査概要

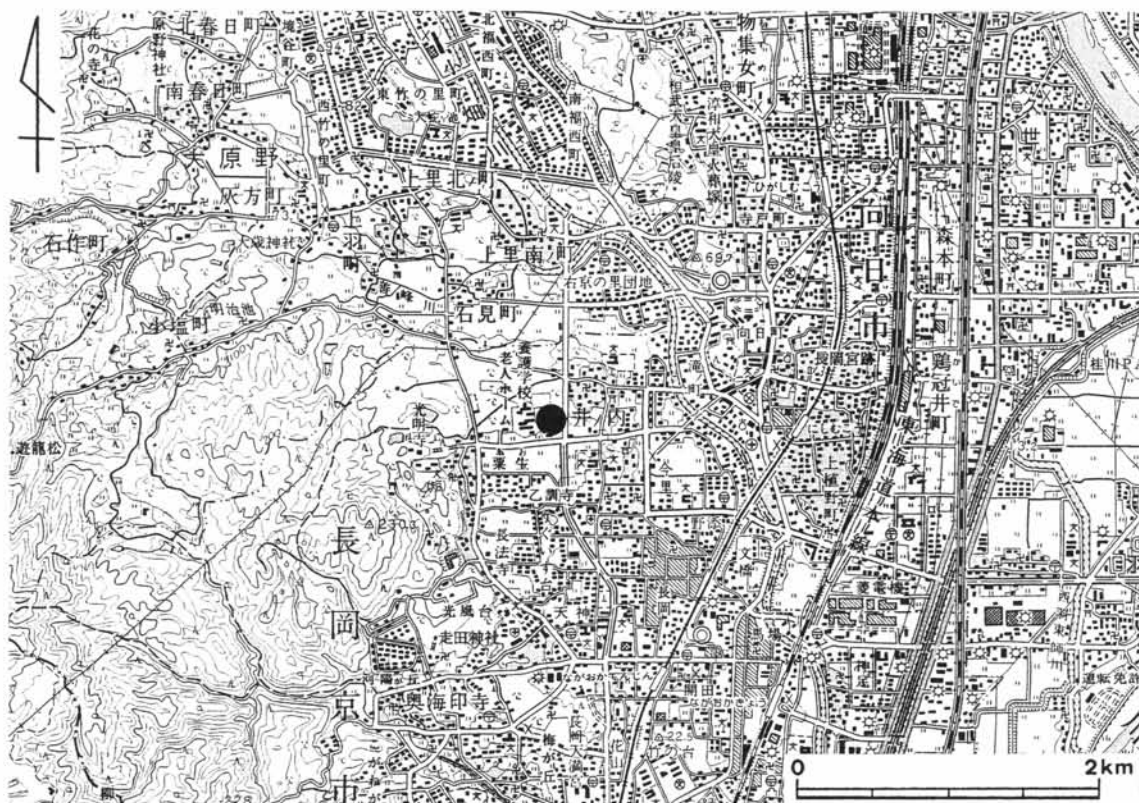
1. はじめに

今回の調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。長岡京の条坊復原案によると、右京三条四坊二町にあたる。地形的には、小畑川右岸の善峯川によって形成された沖積地南側の標高40m前後の低位段丘上に位置する。井ノ内遺跡としては、過去の調査によって弥生時代から中世にかけての多くの遺構が確認されており、長期にわたる遺跡であることが分かっている。

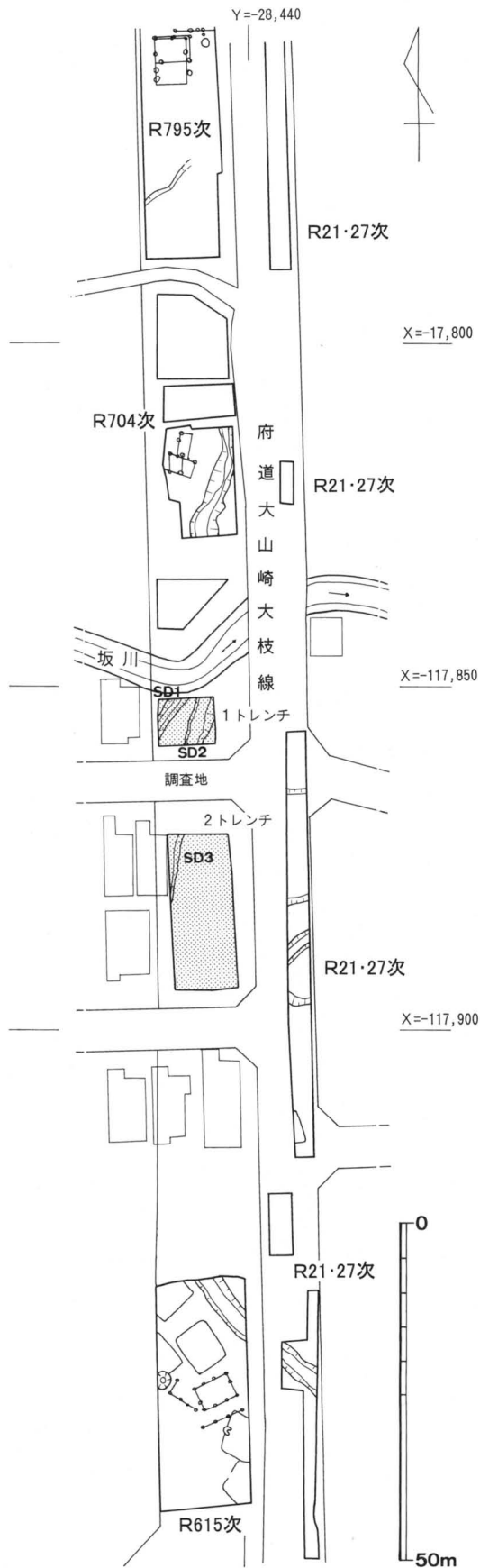
現地調査は、調査第2課調査第2係長森正、専門調査員竹井治雄が行った。調査期間は、平成18年10月2日～11月22日まで実施した。調査面積は、250㎡である。本概要記載の国土座標については、日本測地系を用いた。

調査に際しては、京都府教育委員会、長岡京市教育委員会、京都府乙訓土木事務所をはじめとする関係諸機関、地元自治会、地元住民の方々の御協力を得た。また、現地作業ならびに整理作業にあたっては、多数の方々御協力を得た、心より感謝したい。^(注)

なお、調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。



第43図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第44図 調査トレンチ配置図

2. 調査の概要

調査トレンチは路線内に2か所設定し、北側を1トレンチ(面積50m²)、南側を2トレンチ(面積200m²)とした(第44図)。

1トレンチ 土層は現代の盛土(2~4層)。5~7・9層は、近世の耕作土である。溝SD02の西肩を境にして東側が0.3m低い段差があり、地境が認められる。8・10・11層は主に明黄褐色粘質土を埋め立てた整地層である。以下、南北方向の溝が2本出土した。

溝SD01 北東から南西方向に走り、幅2m、深さ0.8mを測る。断面は底が狭い「V」字形を呈する。埋土のa~d層は、主に茶褐色粘質土の単一層であり、短い期間に人為的に埋められたものと考えられる。最下層のe層は長期間、滞水していたと思われる。遺物は11世紀後半~12世紀前半の土師器、瓦器、白磁、緑釉陶器などが出土した。特に、全層から完形の土師器皿、瓦器椀・皿が多く出土したことから近隣に住居跡などが存在したものと考えられる。

溝SD02 北北東から南南西方向に走り、幅3m、深さ0.6mを測る。断面は底が広い皿状を呈し、さらに、底面には幅0.5m、深さ0.3mの溝が穿かれていた。g~j層は茶灰色砂泥・粘質土、褐灰色砂泥・粘質土が堆積し、早水が繰り返されたものと思われる。溝の最下層は、m~n層(砂礫・細かい砂質土)で流水の痕跡が認められた。溝内からは12世紀後半代の土師器細片、瓦器、把釜などが出土した。溝の堆積状況からみると、溝SD01と同様、人為的に埋められたものと考えられる。

2トレンチ 土層は盛土以下に近世(2~4・6層)の耕作土があり。溝SD03、柱穴群は近世層下層(4・6層)の下から検出され、基盤層は地山である5・7・11層である。地山は中位段

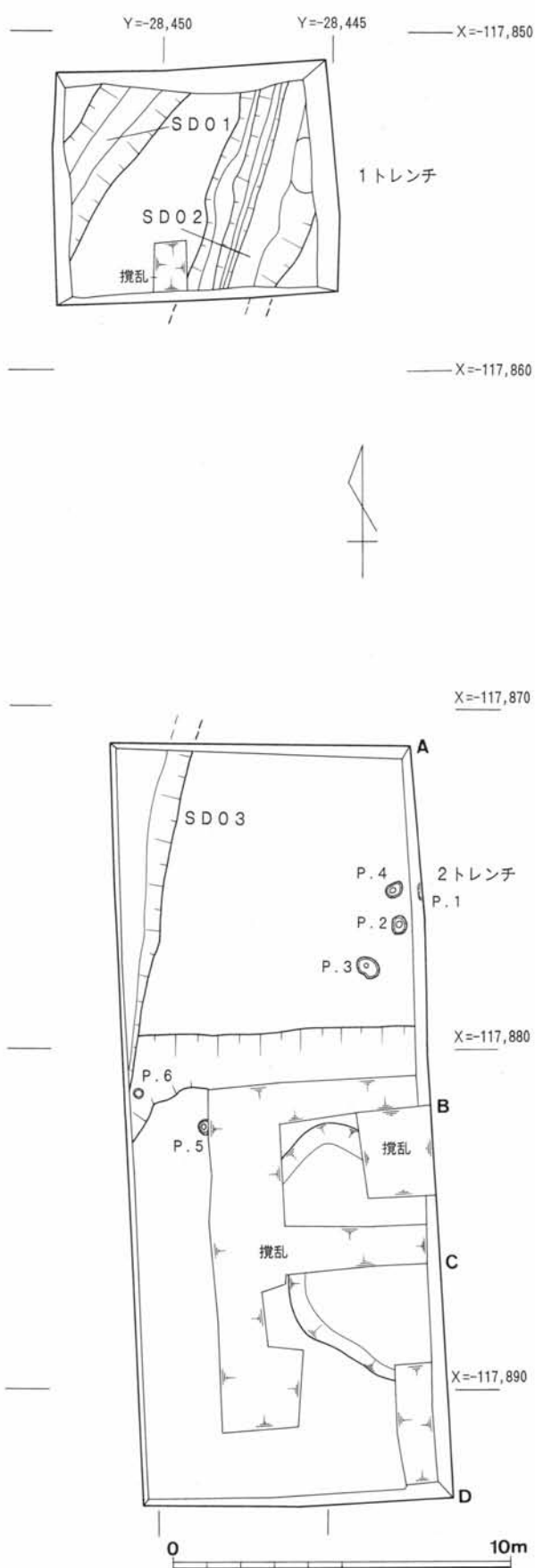
丘上で、粘質土(11層)、砂質土(12層)、砂礫層(5層)などが複雑に堆積しており、沖積段丘を形成する。

溝SD03 北北東から南南西方向の溝で東肩を確認したが、トレンチ外のため溝幅は不明である。深さ0.8mを測り、断面は底が広い皿状を呈するものと推測される。土層はe～g層は砂泥・粘砂質土の互層が堆積しており、h層は細かい砂礫層で流水・氾濫の痕跡と考えられる。この堆積土は溝SD02に酷似する。12世紀後半の土師器、瓦器の碎片がわずかに出土しており、土層の状況からも溝SD02と一連の遺構と考えられる。

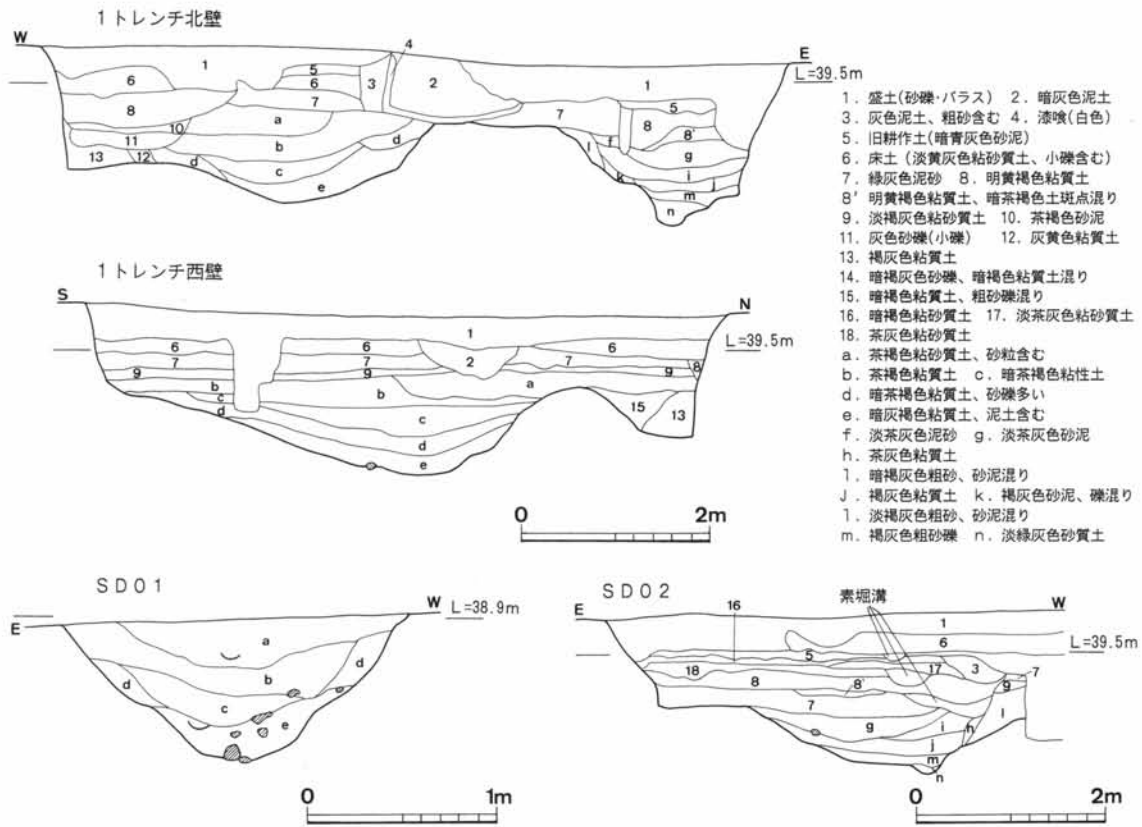
柱穴群(P1～6) トレンチの北半部から円形の柱穴を6基確認した。柱穴の直径0.4m前後、深さ0.2～0.4mを測り、P1～3の埋土は近似する。柱列とも思われるが、一棟の掘立柱建物としては復原ができない。柱穴P2の埋土からは、完形に近い土師器甕が出土した。

3. 出土遺物

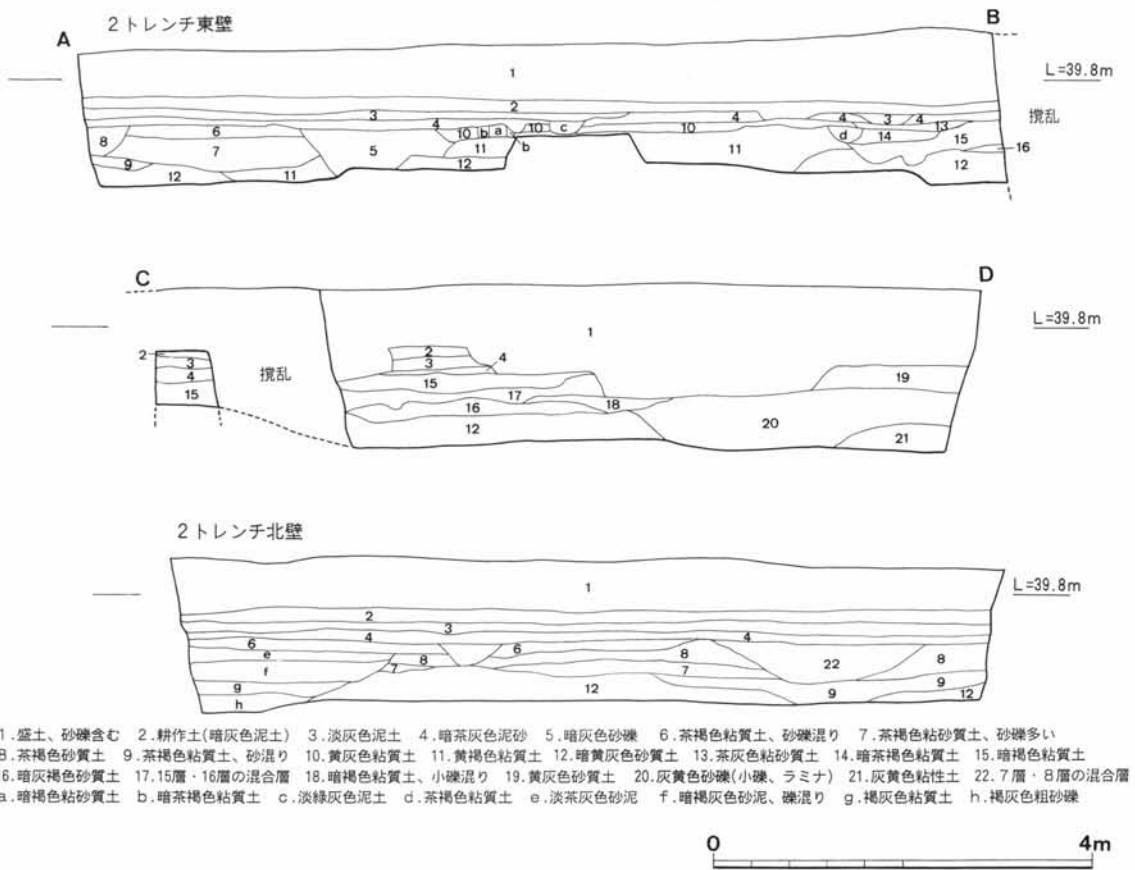
1～24は溝SD01から出土した。1～8は口径9～10cm、器高1.8cmを測り、淡褐色を呈する土師器皿Aである。口縁部は外反気味に斜行し、口縁端部は丸く収める。4・8は肥厚する。9～11は口径14.5～16cm、器高3cm台を測り、淡茶褐色を呈する土師器皿Nである。体部・口縁部は横ナデを施し、口縁端部は丸く収める。12～19は口径15cm前後、器高5cm前後を測り、暗黒灰色を呈する瓦器椀である。内外面は底部外面を除き緻密なミガキが施される。高台は約径6cmを測り、断面は逆台形を呈す



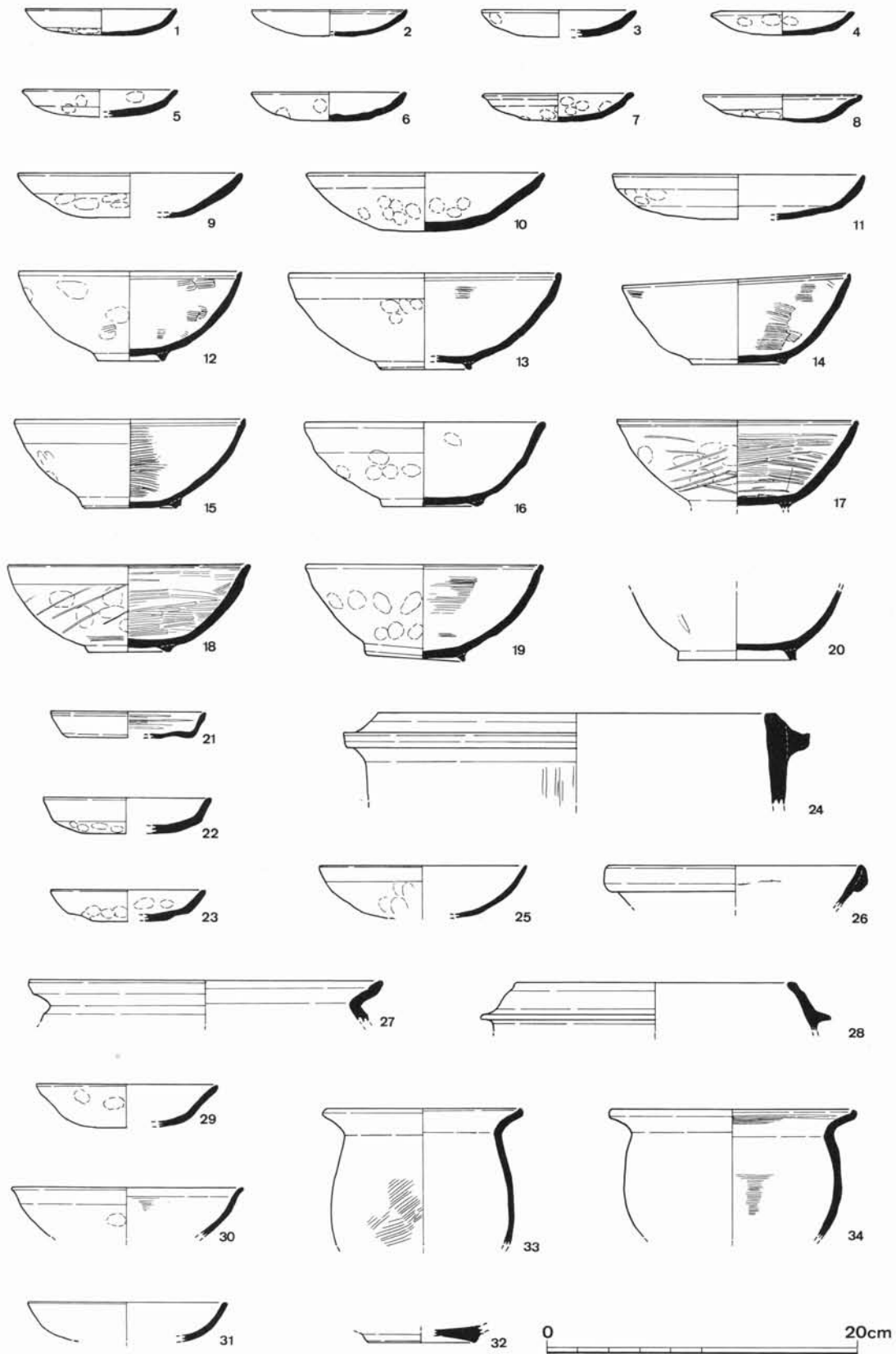
第45図 1・2 トレンチ検出遺構平面図



第46図 1 トレンチ北・西壁および溝SD01・02土層図



第47図 2 トレンチ東・北壁土層図



第48図 出土遺物実測図

る。体部から口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部を丸く収め、内面に一条の沈線を施す。20は高台径8cmを測る緑釉陶器碗。胎土は須恵質で、内外面には濃い緑釉、糸切り痕が残る底部外面には薄く施す。21～23は口径10cm台、器高2cm前後を測り、暗黒灰色を呈する瓦器皿である。底部外面を除き体部内外面にミガキが施される。体部は外反し、端部は丸く収める。24は口径10cmを測る土師器羽釜である。1～8は12世紀前半(第1四半期)であるが、4・8は11世紀後半(第4四半期)である。9～11は口径にバラツキがあるものの12世紀前半代に納まる。12～23は大25～28は溝S D02から出土した。25は口径13.3cm、器高3cm以上を測り、内外面は暗黒灰色を呈し、粗いミガキが施される瓦器碗である。口縁端部内面に沈線は見られない。26は口径16.4cmを測る玉淵口縁をもつ白磁碗である。27は口径22.6cmを測り、淡茶灰色を呈する土師器甕である。口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は平坦面をもつ。28は口径17.5cmを測る土師器羽釜である。口縁部は内傾し、鏝部は狭小、断面三角形を呈する。25は12世紀後半、26は11世紀後半～12世紀中頃、27は12世紀代である。

29～32は溝S D03から出土した。29は口径11.8cm、器高2.8cmを測り、淡黄白色を呈する土師器(白土器)皿Nである。底部から口縁部は外反気味に立ち上がり、器厚は3mm程度で均一である。30は口径15cmを測り、暗黒灰色を呈する瓦器碗である。内外面は粗いミガキを施す。31は口径12.8cm、器高3cm以上を測る白磁皿である。体部から口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部は丸く収める。32は緑釉陶器の碗あるいは皿の高台部分である。29・30は12世紀後半～末期、31は12世紀後半である。33・34は11世紀代である。

33・34は柱穴P-2から出土した。33・34は口径12.8・15.6cmを測り、淡茶褐色を呈する土師器甕である。口縁部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。体部外面は粗い、内面は横方向の緻密なハケメをほどこす。

4. まとめ

今回の調査の結果、平安時代から中世の遺構・遺物が検出されたが、長岡京期の遺構は無く、出土遺物もわずかであった。以下、主要な成果について記述する。

- 1) 溝S D01は、開削時期は11世紀代であり、12世紀第1四半期に人為的に埋没した。その規模、形態などから集落をとりまく環濠、あるいは城館を画する溝などである可能性が考えられる。
- 2) 溝S D02・03は、12世紀後半代に埋没したと見られるが、形態、堆積土、遺物の出土状況、方向などが酷似することから一連のものとする。この溝は、小川など自然流路に人為的な手が加えられ、用水路として利用されていたものと思われる。
- 3) 柱穴群は、建物としての復原はできないが、柱穴P-2からは良好な状況で、土器も出土していることなどから、近隣には住居などが存在しているものと考えられる。

(竹井治雄)

注 調査参加者(順不同) 黒慶子・木村涼子

7. きづがわかしょう 木津川河床遺跡平成18年度発掘調査概要

1. はじめに

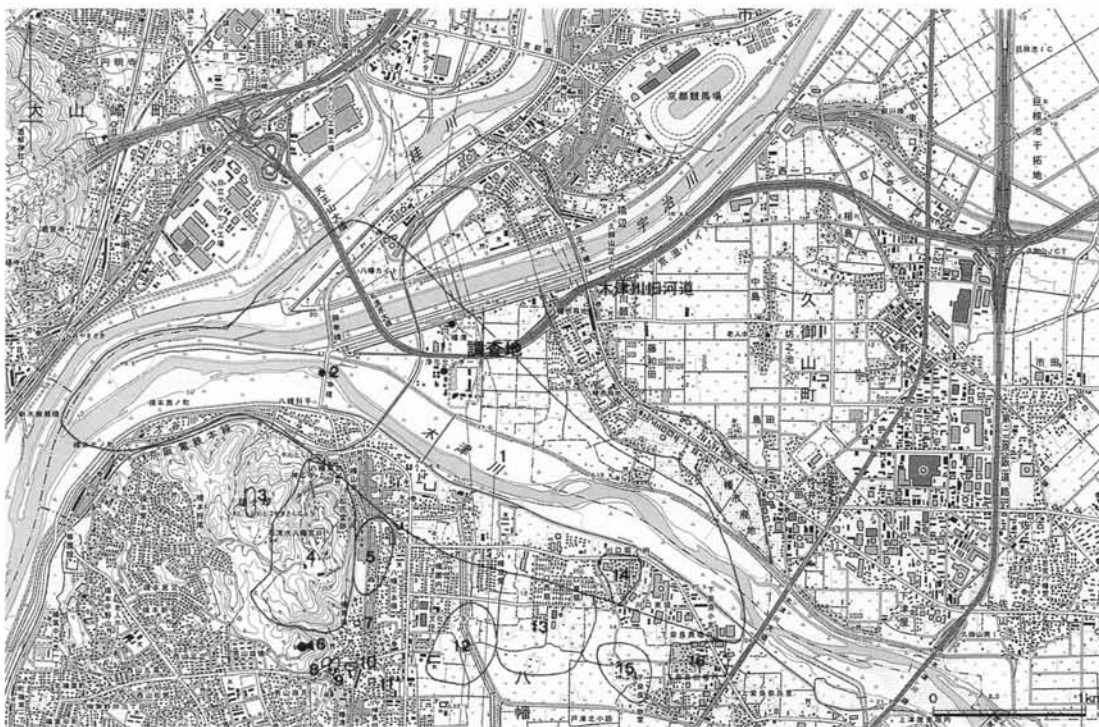
木津川河床遺跡は、京都府八幡市北部の木津川・宇治川・桂川の三川が合流する地点から木津川を中心に広がる弥生～江戸時代に至る複合遺跡である。木津川は明治時代初頭に現在の位置に付け替えられており、それ以前には集落や耕作地が広がっていたと考えられる。

今回の調査は、洛南浄化センターの施設建設および道路建設に伴う事前調査であり、京都府流域下水道事務所の依頼により実施した。調査期間は平成18年11月6日～平成19年1月16日である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第2係長森正、調査第1係調査員松尾史子が担当した。調査期間中は、八幡市教育委員会をはじめとする関係諸機関にご協力いただいた。また、調査に参加された方々には記して感謝したい。^(注1)

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 調査概要

洛南浄化センター内では昭和57年度から12回発掘調査が実施されている。過去の調査で、弥生



第49図 調査地および周辺遺跡位置図(国土地理院1/25,000淀を改変、加筆)

1. 木津川河床遺跡 2. 御幸橋古墳 3. 鳩ヶ峯経塚 4. 石清水八幡宮周辺遺跡 5. 山本遺跡(男山城跡) 6. 石不動古墳 7. 馬場遺跡 8. 清水井古墓 9. 清水井遺跡 10. 清水井東遺跡 11. 宮ノ背西遺跡 12. 島遺跡 13. 川口扇遺跡 14. 川口環濠集落 15. 今里遺跡 16. 出垣外遺跡



第50図 トレンチ配置図

時代後期から古墳時代前期の集落および古墳時代後期の集落が見つかっており、沖積地においても遺跡が広がっていることが明らかになった。また、慶長元(1596)年に起きた伏見大地震の痕跡(噴砂や曲隆)が確認されたことで地震考古学の分野においても注目されている。

今回の調査では、重力濃縮棟建設予定地に21m×25m、道路予定地に20m×5mの2か所の調査区を設定し、それぞれ第1トレンチ、第2トレンチとした。調査面積は、第1トレンチが550㎡、第2トレンチが100㎡である。

(1) 第1トレンチ

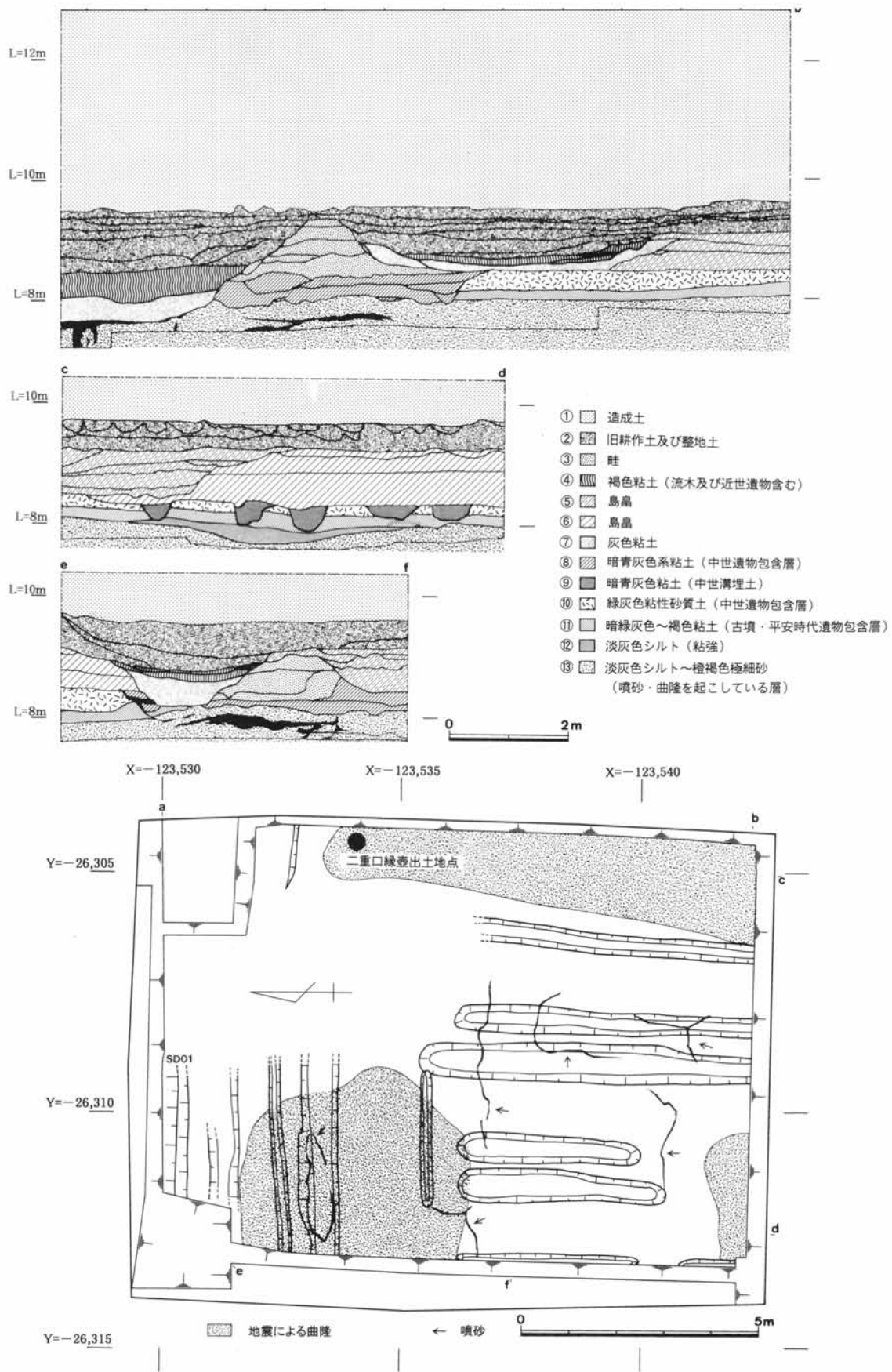
地表下約5mまで重機掘削を行った。基本層序は、地表下約3mまでが造成土で、以下順に旧耕作土が約0.5m、鳥島に伴う土層が約0.6m、中世遺物包含層が約0.3m、古墳時代および古代の遺物包含層が約0.2m堆積する。北東部の落ち込みは地震による噴砂を削平しており、近世以降に形成されたと考えられる。

検出遺構 鳥島および中世溝を確認した。中世溝は南北および東西方向で、13世紀後半から14世紀前半を中心とする遺物が出土している。溝S D01の底から瓦器椀がほぼ関係に近い状態で出土した。また、トレンチ東側排水溝掘削時に淡灰色シルト層より古墳時代前期の大型二重口縁壺が出土した。土器棺の可能性が考えられたため精査をしたが、掘形は確認できなかった。

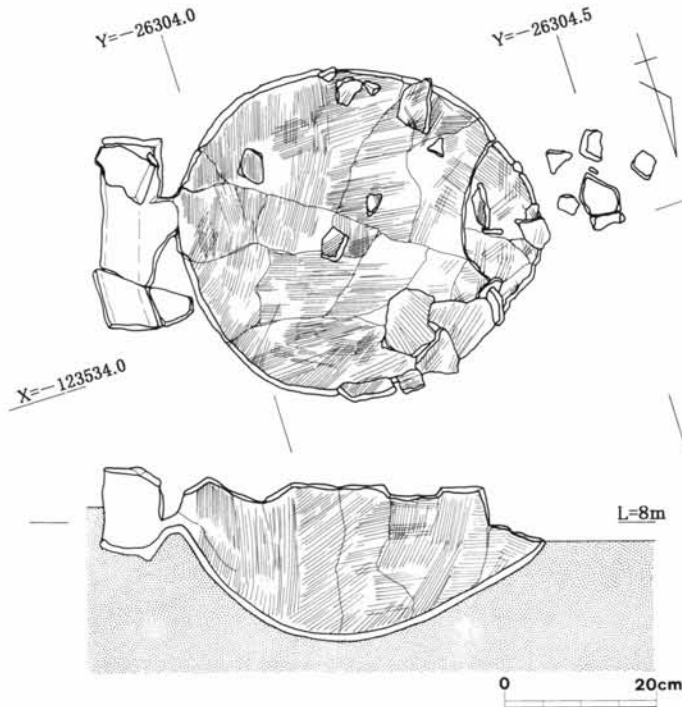
地震痕跡 地震による液状化によって生じた噴砂や曲隆を確認した。これらは中世の溝や包含層を引き裂いたり部分的に押し上げたりしており、中世以降におきた地震によるものと考えられる。過去の調査成果などから慶長元(1596)年の伏見大地震によるものである可能性が高い^(注3)。

(2) 第2トレンチ

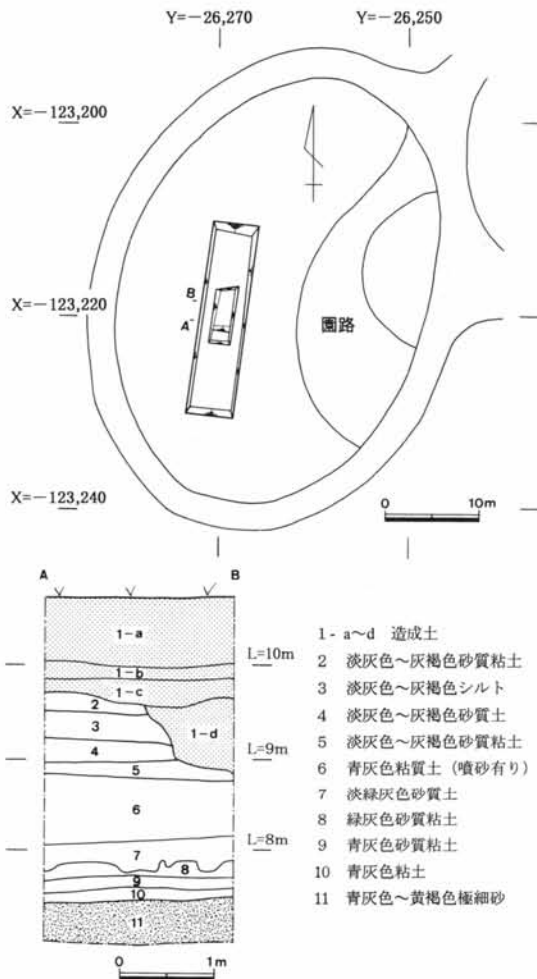
浄化センター入口の西側にある公園内に設定した調査区である。地表下3.5mまで重機で掘削し、主に断面観察により遺構などの有無を確認した。地表下約1mが公園の造成土で、海拔約7.5mで木津川の砂と考えられる橙褐色および灰白色砂層に達した。第5層から近世の土師器が出土していること、第6層が噴砂に引き裂かれていることから第6層から下は中世以前の土層であると考えられる。トレンチ中央部分において第9・10層の上面で遺構検出を試みたが遺構・遺物ともに確認されなかった。



第51図 第1トレンチ土層図および立面図



第52図 二重口緑壺出土状況図



第53図 第2トレンチ平面図および土層柱状図

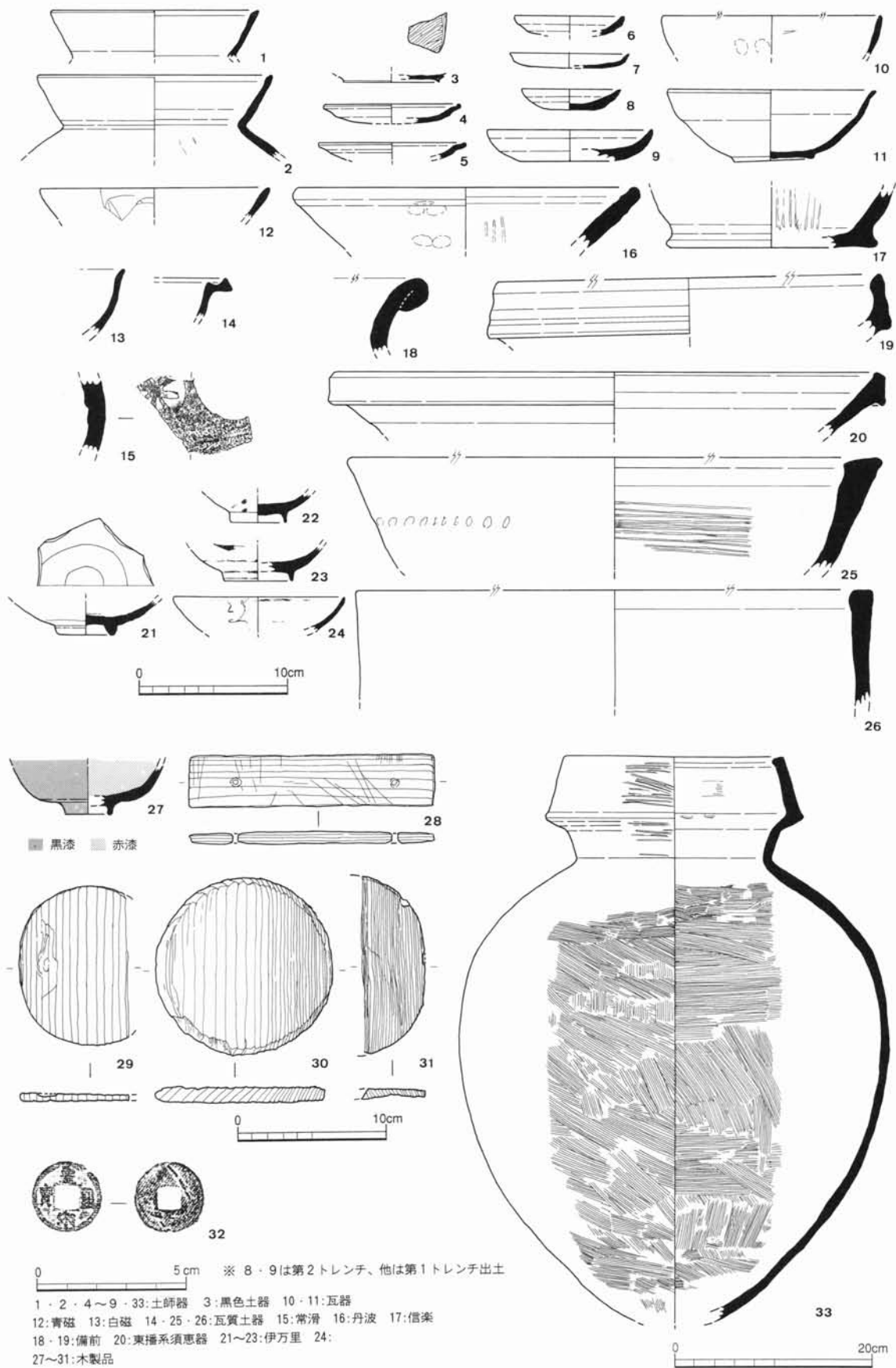
4. 出土遺物

土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、瓦質土器、瓦、輸入陶磁器(青磁・白磁)、国産陶磁器(備前焼・常滑焼・丹波焼・伊万里焼)、銭貨、木製品など古墳時代から近世いたる遺物が遺物整理箱で5箱出土した。これらの遺物の時期は13~14世紀が中心である。ほとんどが細片で図示できるものは少量である。ここでは主要な遺物について紹介する。

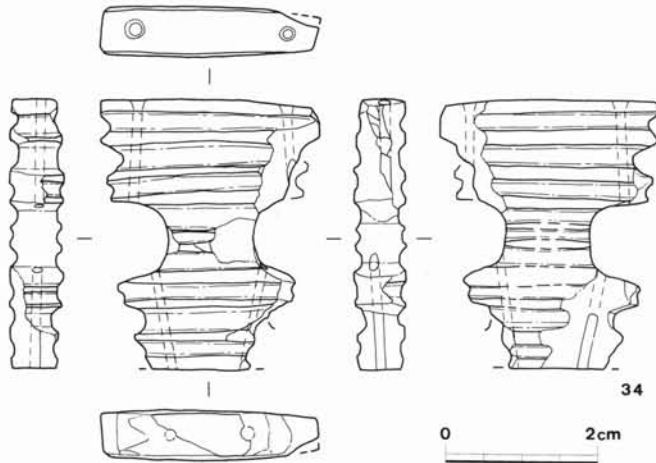
32は「皇宋通寶」である。第6層から出土した。

1・2は口縁端部が内側に肥厚する布留式甕である。いずれも磨滅が著しく調整は不明である。33は大型の二重口縁壺である。第1トレンチの第12層から出土した。半分は中世段階には削平されて欠損している。大きさは器高約58cm、胴部高約55.5cm、口径約22.5cm、頸部径20cm、最大胴部径44cmである。胴部は肩部が張り、胴部下半はすぼまる。最大径は中位よりやや上にある。底部は尖り気味の丸底である。頸部は締まり、口縁は上外方に外反し、二次口縁部が内傾して付く。口縁端部は面をもつ。外面調整は、胴部はタテハケの後ヨコハケ、口縁部は横方向のミガキである。内面調整は、底部はタタキ後ハケ、肩部はケズリ後ハケ、口縁部~頸部は磨滅のため不明である。施文はない。胎土には角閃石を多く含む。

琴柱形石製品(34) 第1トレンチの第11層掘削中に出土した。滑石製で縦3.5cm、上辺2.9cm、下辺1.1cm以上、厚さ0.6cmである。上下の横軸は両端とも小孔が貫通している。上辺にえぐりはなく、欠損部分は割と古い時期のものと考え



第54図 出土遺物実測図



第55図 琴柱形石製品実測図

である。集落出土例は今回出土例を入れても4例と少ない。

られる。両面に施されている溝の間隔はかなり雑である。京都府内における琴柱形石製品の出土例は福知山市八ヶ谷古墳出土例のみであり、碧玉製のものを含めても向日市寺戸大塚古墳出土例が追加されるのみである。いずれも今回出土したものとタイプが異なる。また、近畿地方での出土例を見ても約30例で、そのほとんどが奈良県の中期古墳からの出土

5. まとめ

今回の調査成果についてまとめると以下ようになる。

- (1) 今回の調査地点付近は、周辺の調査で確認されている遺構面よりも若干低いレベルにあり、水流がほとんどないところで堆積するシルト層から古墳時代前期の土器が出土したことからみて、古墳時代前期までは木津川の自然堤防にあたり、集落の縁辺に位置していたと考えられる。
- (2) その後、中世溝が掘削されるまでは後背湿地で、中世中頃に耕作地として利用されるようになる。その利用方法は時期によって異なり、中世段階では畑地が形成されるのみの平面的な景観であったが、少なくとも慶長元(1596)年の伏見大地震以後には大規模な溝などを掘削してその土を盛土し、島状の高まりを形成して島島が造成されるなど、立体的な景観となる。

(松尾史子)

注1 調査参加者(敬称略・順不同) 荻野富紗子・木村涼子・陸田初代・黒慶子・長尾美恵子・松下道子
協力者(敬称略・順不同) 寒川旭・植村善博

注2 中世以降に調査地付近をおそった大地震には1596年の伏見大地震、1662年の近江・若狭地震、1707年の南海地震などがあり、液状化や曲隆を生じさせる地震は震源や規模などから伏見大地震である可能性が高い。地震痕跡については、独立行政法人産業技術研究所寒川旭氏の御教示をいただいた。

参考文献

- 亀井正道「琴柱形石製品考」(『東京国立博物館紀要』第8号 東京国立博物館) 1992
『古墳時代の滑石製品～その生産と流通～』(第54回 埋蔵文化財研究集会 発表要旨・資料集) 埋蔵文化財研究会 2005
北条芳隆「雪野山古墳の石製品」(『雪野山古墳の研究』 八日市市教育委員会) 1996

8. 佐伯^{さえき}遺跡・佐伯館跡試掘調査概要

1. はじめに

この調査は、菰川の河川改修および付け替え工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した試掘調査である。

佐伯遺跡・佐伯館跡は、京都府亀岡市葎田野町佐伯に位置する。調査地の標高は、120m前後を測り、周辺は、西の山間部より流れでた山内川とそれに合流する菰川が形成する段丘および谷地形となっている。特に南西から流れてきた菰川が、調査地内で直角近くに屈曲し、あたかも区画されたような景観を呈することから、古代・中世の館跡である可能性や、佐伯という地名から平安時代の荘園遺跡の存在も予想された(第56図)。

発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長小池寛、専門調査員黒坪一樹が担当した。調査期間は、平成18年11月16日～12月8日までである。調査面積は約200m²である。

調査期間中、亀岡市教育委員会、葎田野町自治会など、関係諸機関のご協力をいただいた。感謝の意を表したい。

なお調査にかかる経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

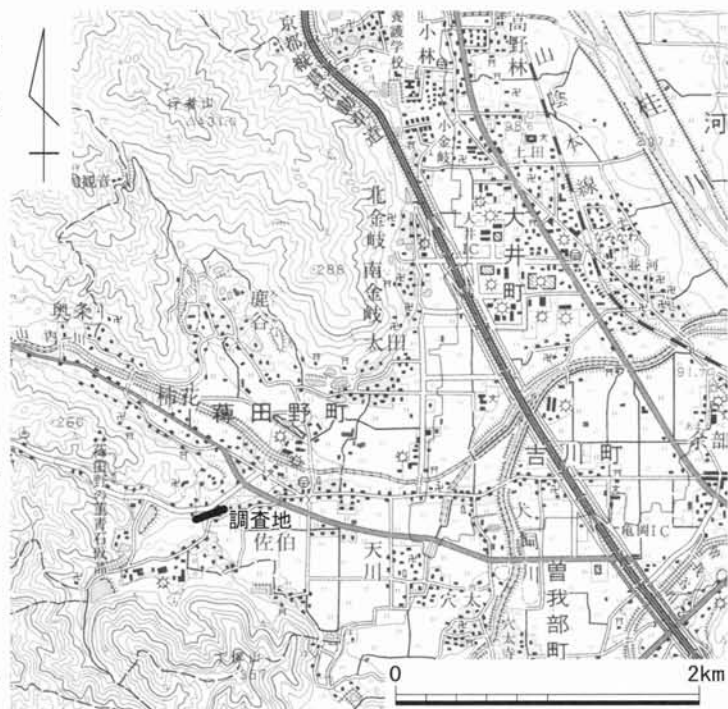
2. 調査概要

調査は、3か所のトレンチと4か所のグリッドを設定し掘削を行った。それぞれの地点における状況について記していきたい。

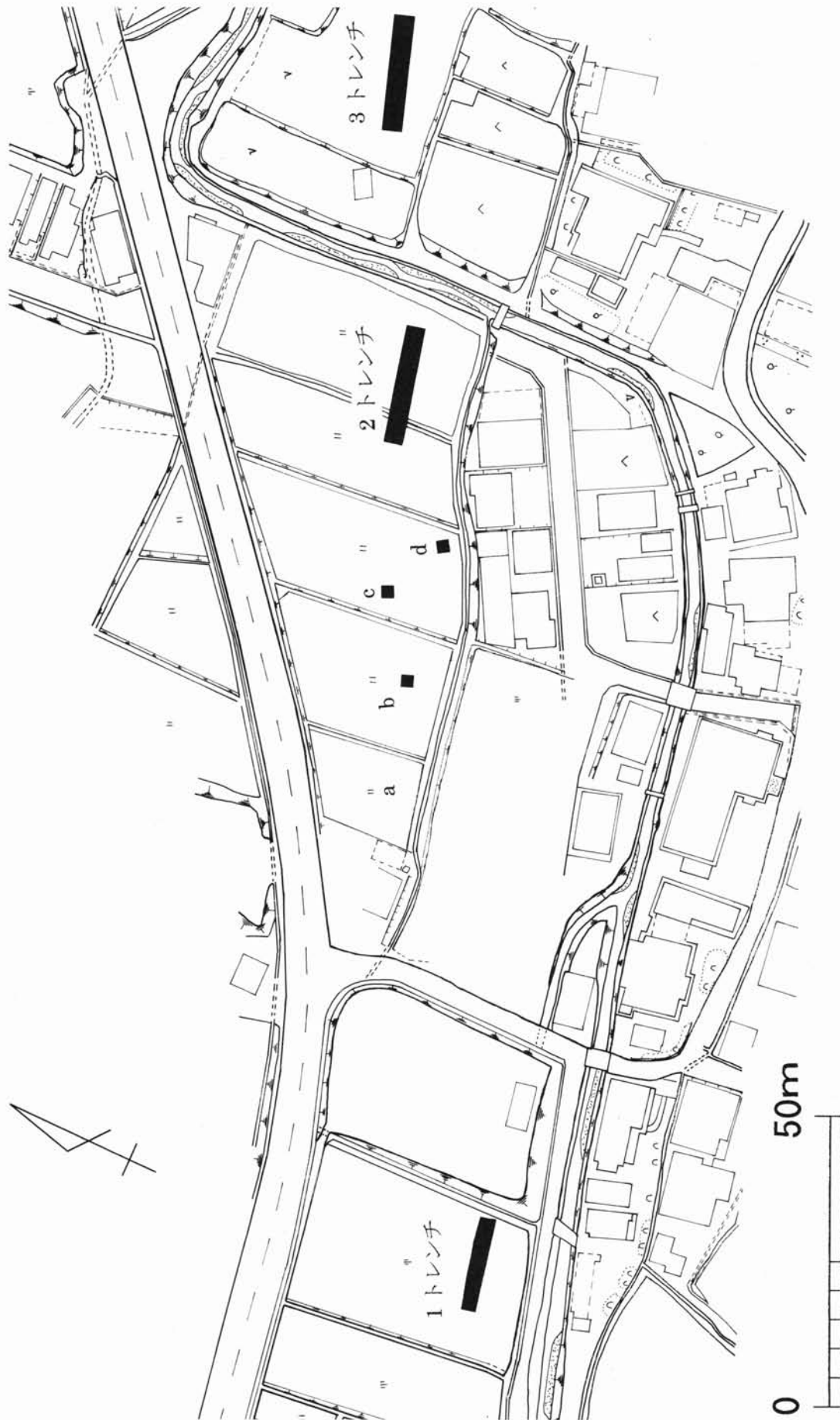
(1) 1トレンチ(第57・58図)

重機で耕土・床土を除去すると、中・近世の土器を含む層(第2層)となる。その下層は暗青灰色粗砂礫混じり粘質土(5層)が堆積する。各層を面的に精査したが、顕著な遺構は認められなかった。西側で検出した溝は、床土から掘り込まれた水田畦畔に伴う溝であった。

出土遺物としては、第2層中から縄文時代のチャート剥片、中世

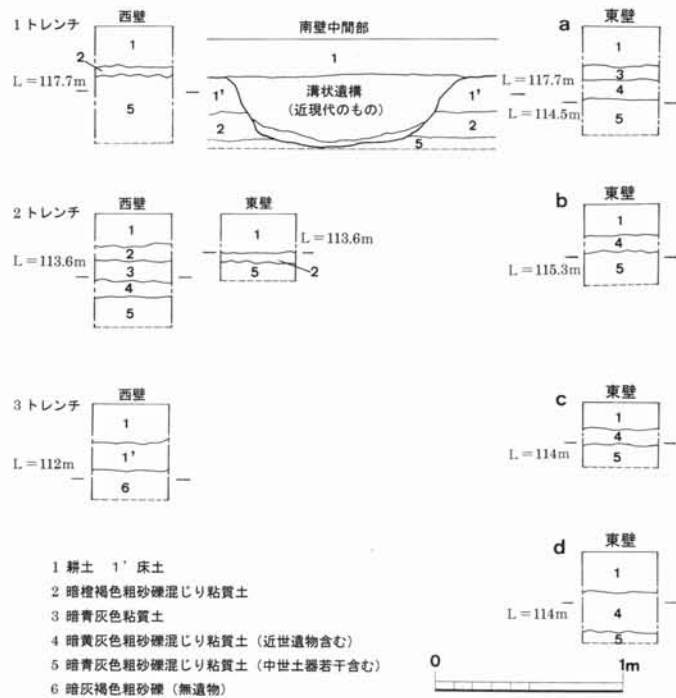


第56図 調査地位置図(国土地理院 1/50,000 京都西北部)



第57図 調査トレンチ(1～3)およびグリッド(a～d)配置図

の青磁椀片、備前焼鉢の底部片、土師器皿、瓦器椀、江戸時代の灯明皿、肥前系陶磁器の網目文椀、唐津焼椀、伏見人形、寛永通寶などが出土した。チャート剥片は、暗青色の縦長素材のものである。青磁椀2は2点あり、ともに龍泉窯で第60図4は15世紀代、もう1点は鎬蓮弁文をもつ13世紀代のものである。瓦器椀および皿は13世紀、備前焼の鉢は14～15世紀にかけての室町時代のものである。唐津焼の椀は江戸時代初期のものである。いずれの土器類もごく細片で磨滅が著しく、菰川上流域他から流転してきたものであろう。



第58図 各トレンチ柱状断面図

4層は粗礫を多く含み、河川堆積層とみられるが、この5層の直上からは中世の土器類が若干出土したが、これらも磨滅した細片である。

(2) 2 トレンチ(第57・58図)

重機による掘削で表土・床土を除去すると、橙褐色・暗青灰色などの粘質土(2～4層)が薄く堆積していた。ここからも1トレンチ同様、中・近世の土器、陶磁器が少量出土した。江戸時代の灯明皿、瓦器椀の細片などがある。この層より下層(第5層)は、暗青灰色粘質土で、粗砂礫も多く含む洪水堆積層である。この層からもわずかながら須恵器甕の体部片、奈良時代末の須恵器杯Bの破片(第60図1)、中世の輸入青磁椀片など、古代から中世にいたる土器類が出土している。いずれもきわめて小片で、磨滅も著しい。



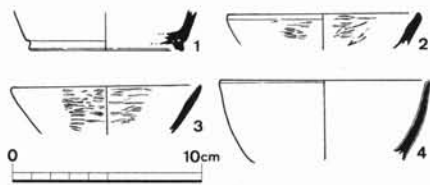
第59図 3トレンチ完掘状況(西から)

(3) 3 トレンチ(第57～59図)

直角近くに屈曲した菰川に区画されたような地点で、最も遺構・遺物の検出が期待された地点であったが、田畑耕土・床土直下は暗灰褐色粗砂礫が深く堆積し、トレンチ全面を覆っていた。遺構・遺物はまったく確認されなかった。

(4) a～dグリッド

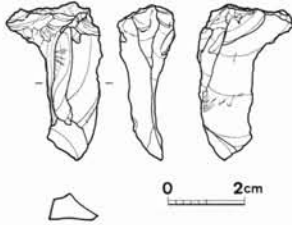
1トレンチと2トレンチの間に、確認のため4か所に設定した小規模(2m×2m)のグリッドである。掘削の結果は、1・2トレンチとほぼ同じ土層の広がりを追認したにすぎず、耕土・床



第60図 出土遺物実測図

1. 2トレンチ 2・3. dグリッド
4. 1トレンチ

土より下層は砂礫混じりの暗青灰色粘質土となり、遺構はなかった。遺物については、aグリッドから須恵器片、土師器甕、土師器皿、瓦器椀片が、bグリッドから土師器皿片が出土した。cグリッドでは顕著な遺物の出土はなかった。dグリッドの第5層(暗青灰色粗砂混じり粘質土)直上からは、鎌倉時代の土師器皿、瓦器椀・皿(第60図2・3)、灰釉陶器の小破片などが出土した。



第61図 チャート剥片

3. まとめ

今回の調査の結果、いずれの地点からも顕著な遺構やそれに伴う遺物を確認することはできなかった。当地における菰川の屈曲は人工的なものと思われるが、佐伯遺跡・佐伯館跡に関連する遺構の存在を確認することはできなかった。

出土遺物は、3トレンチとcグリッドを除く地区において、各包含層中から出土した。表土・床土を除去すると、濁ったような橙褐色や灰黄色の薄い層が重なった状況(2~4層)がみられる。これらの中からは縄文時代、奈良時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代の遺物が出土した。江戸時代を上限とする時代の堆積層とみられるが、遺物の示す時代幅は非常に広いことが特徴である。その下層の5層は暗青灰色の砂礫層となり、菰川の氾濫による河川堆積層である。ここからは中世の土器類を若干含むが、安定した生活面を確認できるような層ではない。ただ、いずれの層からの遺物もきわめて小片で磨滅しており、河川の氾濫によって当地にもたらされたことは明らかである。

以上のことから、上流域に広がる各時代の集落の存在を想定することは可能であるが、今回の調査地のなかにそれを見出すことはできなかった。

(黒坪一樹)

注 調査参加者 井上亮・長尾恵美子・原野実子・原野秀司・原野恭治・大西須美江・森田善久・白川晴章・前田勝治・石川佳一・桂明紀・高木定子・松本一郎

圖 版

図版第1 倭野廃寺



(1) 調査地遠景(北東から)



(2) 第1トレンチ瓦堆積状況(北東から)

図版第2 倭野廃寺



(1) 調査地遠景(南東から)



(2) 礎石発見場所(大正11年)
(北から)



(3) 第1トレンチ作業風景
(北東から)



(1)第1トレンチ瓦堆積状況
(南から)



(2)第2トレンチ瓦堆積状況
(北から)



(3)第2トレンチ作業風景
(西から)



(1) 第2トレンチ土坑SK1
検出状況(西から)



(2) 第3トレンチ全景(北から)



(3) 第3トレンチ瓦堆積状況
(南東から)



4



6



9



11



10



12



13



14



15



16



17



(1) 中山城跡遠景(西から)



(2) 1 トレンチ全景(北から)



(3) 2 トレンチ全景(北から)



(1) 3トレンチ堀切3 調査前風景
(西から)



(2) 堀切3 断面(西から)



(3) 4トレンチ全景(北から)

(1) 4トレンチ柱穴群(西から)



(2) 4トレンチ堀切1断面
(東から)



(3) 4トレンチ斜面・犬走り全景
(南から)





(1) 4 トレンチ斜面・犬走り断面
(東から)



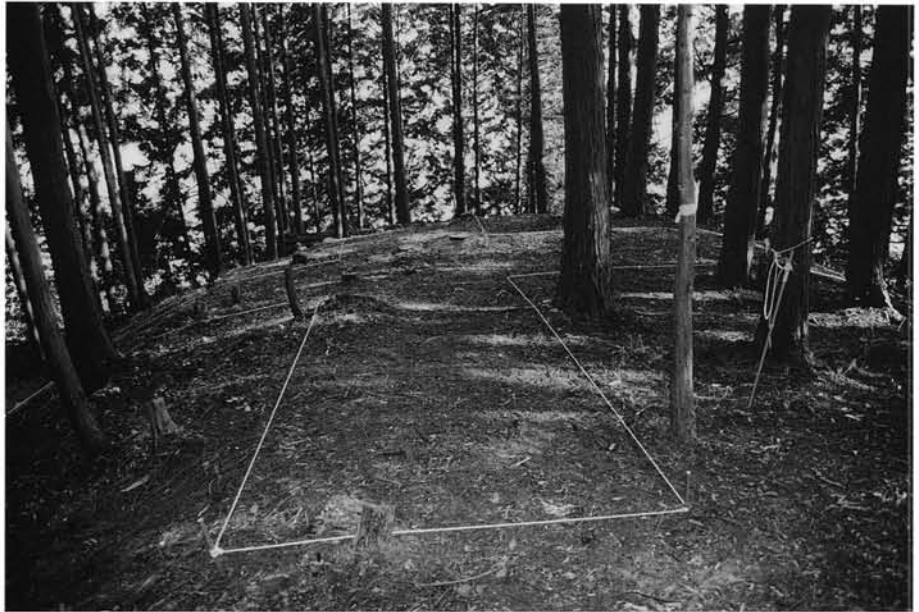
(2) 5 トレンチ全景(南から)



(3) 5 トレンチ柱穴群全景
(南から)



(1) 調査地遠景(南から)



(2) 第1地点8号墳調査前状況
(北西から)



(3) 第1地点8号墳下位の平坦地
調査前状況(南東から)



(1) 第1地点1 トレンチ全景
(北西から)



(2) 第1地点1 トレンチ中央部
(南東から)



(3) 第1地点3 トレンチ全景
(西から)

(1) 第2地点調査前状況(南から)



(2) 第2地点西部(南から)



(3) 第2地点全景(西から)





(1) 第2地点全景(南東から)



(2) 第2地点北壁断面
5号墳の切り離し溝(南西から)



(3) 第2地点土坑S K01(南から)



(1)野条遺跡第11次調査地全景(上が東)



(2)野条遺跡第11次調査トレンチ(北から)



(1) 野条遺跡第11次重機掘削風景
(北西から)



(2) 野条遺跡第11次作業風景
(北西から)



(3) 野条遺跡第11次
調査地空撮作業風景



(1)野条遺跡第11次第1トレンチ
溝S D04検出状況(南から)



(2)野条遺跡第11次土坑S K05
検出状況(東から)



(3)野条遺跡第11次土坑S K05
掘削風景(西から)



(1)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D01検出状況(北西から)



(2)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D01検出状況(南東から)



(3)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D01埋土の状況(北西から)

(1)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D02検出状況(西から)



(2)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D02検出状況(西から)



(3)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D02遺物出土状況
(上が南)





(1)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D03検出状況(北西から)



(2)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D02掘削風景(南から)



(3)野条遺跡第11次第2トレンチ
溝 S D01遺物出土状況



(1)室橋遺跡第4次調査地全景(上が北)



(2)室橋遺跡第4次第1トレンチ全景(上が西)



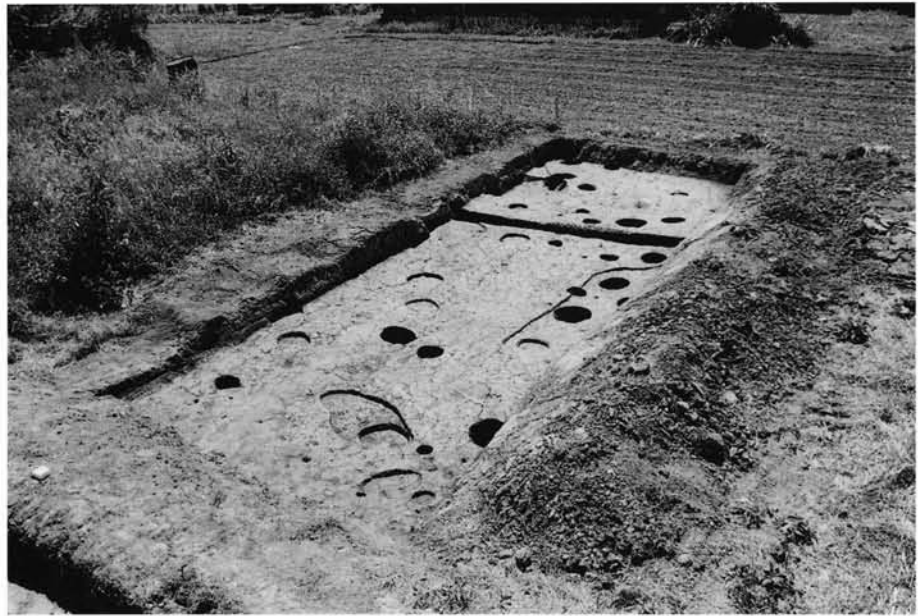
(1)室橋遺跡第4次第1トレンチ
溝S D02全景(南から)



(2)室橋遺跡第4次第1トレンチ
溝S D02埋土(南から)



(3)室橋遺跡第4次第1トレンチ
溝S D02掘削風景(西から)



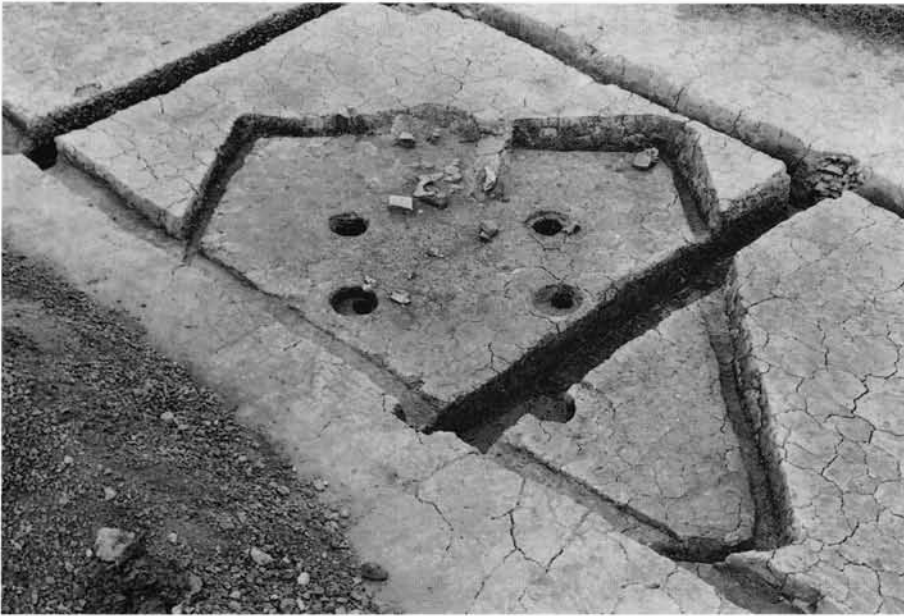
(1)室橋遺跡第4次第1トレンチ
ピット検出状況(北東から)



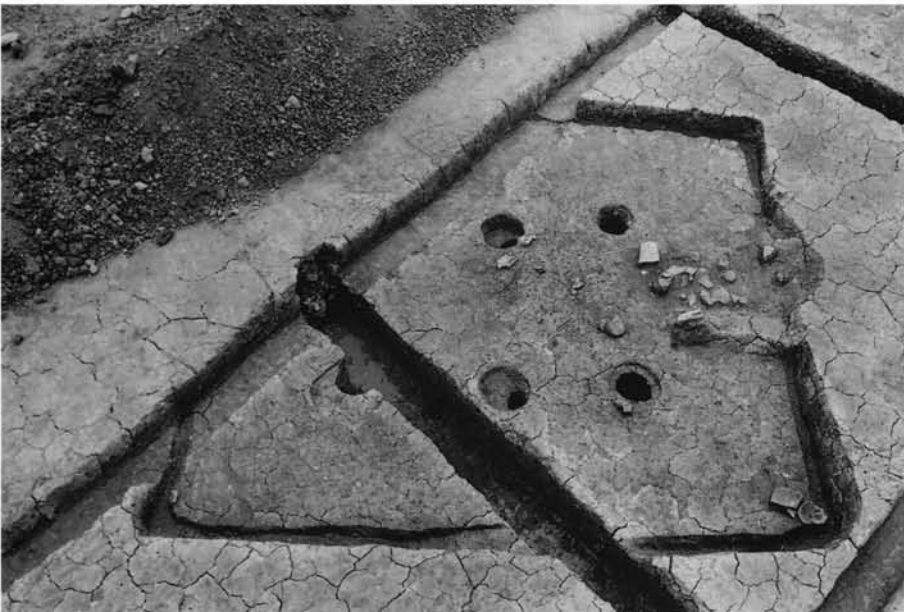
(2)室橋遺跡第4次第1トレンチ
ピット検出状況(北西から)



(3)室橋遺跡第4次第1トレンチ
調査風景(北東から)



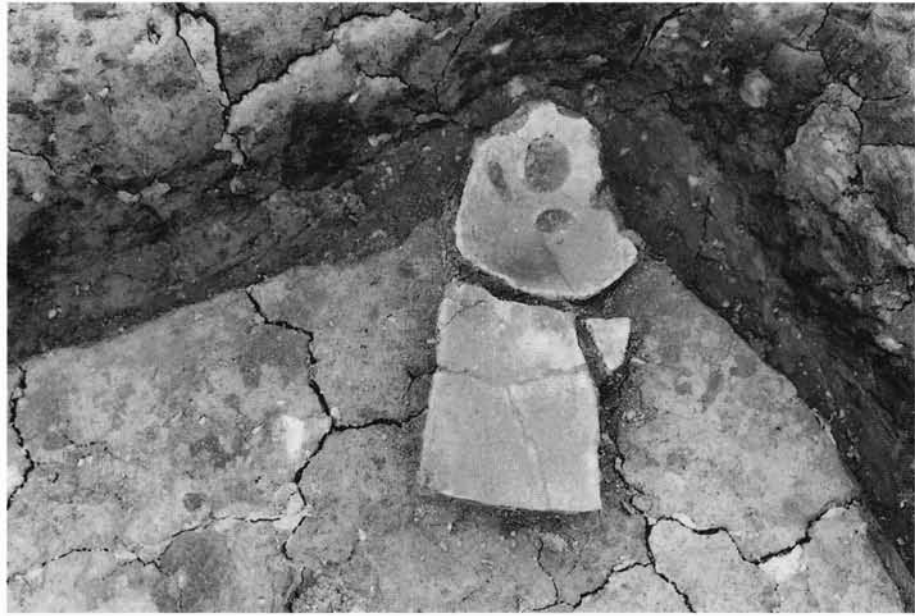
(1) 室橋遺跡第4次第1トレンチ
竪穴式住居跡S H01全景
(南東から)



(2) 室橋遺跡第4次第1トレンチ
竪穴式住居跡S H01全景
(北東から)



(3) 室橋遺跡第4次第1トレンチ
竪穴式住居跡S H01カマド跡
(南東から)



(1)室橋遺跡第4次第1トレンチ
竪穴式住居跡SH01
遺物出土状況



(2)室橋遺跡第4次第1トレンチ
竪穴式住居跡SH01
遺物出土状況



(3)室橋遺跡第4次第1トレンチ
溝SD02遺物出土状況
(上が東)



(1) 室橋遺跡第4次第3トレンチ
溝 S D06(南から)



(2) 室橋遺跡第4次第3トレンチ
溝 S D06(東から)



(3) 室橋遺跡第4次第3トレンチ
溝 S D06埋土(南から)



(1) 調査前風景(北西から)



(2) トレンチ全景(北西から)



(3) トレンチ全景(南東から)



(1) 調査前風景(北西から)



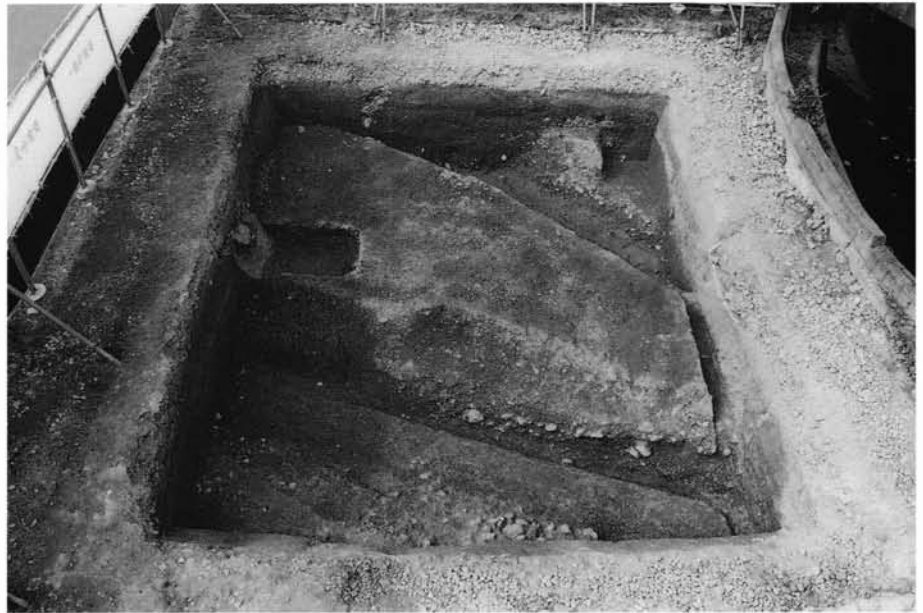
(2) 南トレンチ全景(南から)



(3) 北トレンチ全景(南東から)



(1) 調査地手前(2トレンチ)全景
(北から)



(2) 1トレンチ全景(東から)



(3) 1トレンチ溝S D01全景
(北東から)



(1) 1 トレンチ溝 S D02 全景
(北から)



(2) 1 トレンチ溝 S D01 断面
(北から)



(3) 1 トレンチ溝 S D01 断面
(北から)



(1) 2トレンチ全景(北から)



(2) 2トレンチ溝S D03断面
(北から)



(3) 2トレンチ東壁断面(西から)



1



3



4



6



7



8



10



14



16



17



18



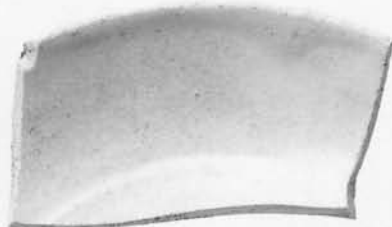
19



22



23



31



34



(1)第1トレンチ島畠(東から)



(2)第1トレンチ中世溝(東から)



(1)二重口緑壺出土状況(南から)



(2)第1トレンチ西壁曲隆部分(南西から)



(4)第1トレンチ填砂(東から)



(3)第1トレンチ東壁(北端填砂:西から)



(5)第1トレンチ作業風景(北西から)



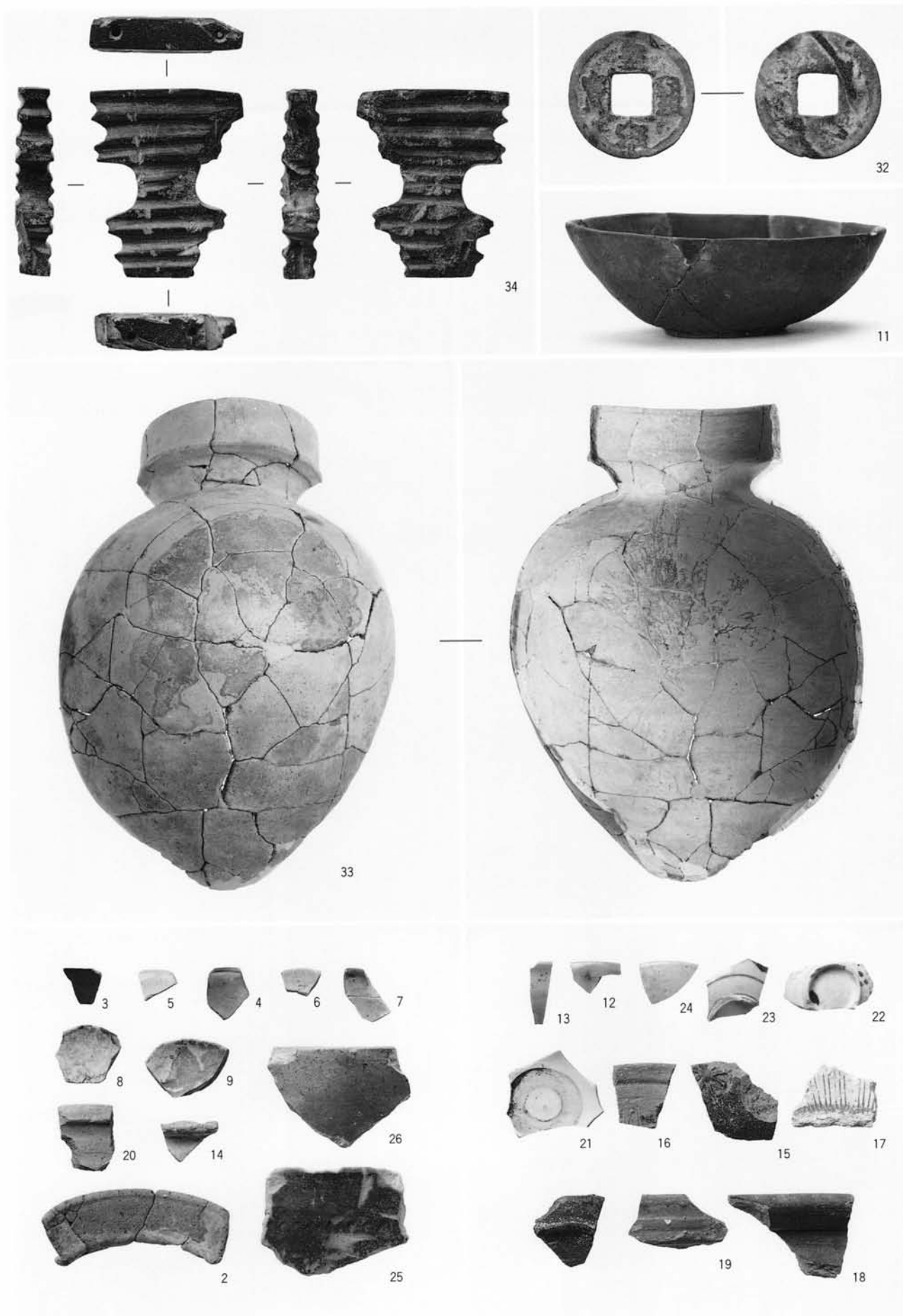
(1) 第2 トレンチ全景(北から)



(2) 第2 トレンチ中央部分
(南西から)



(3) 第2 トレンチ西壁中央部分
(東から)





(1) 1 トレンチ全景(東から)



(2) 1 トレンチ西半部溝検出状況
(北東から)



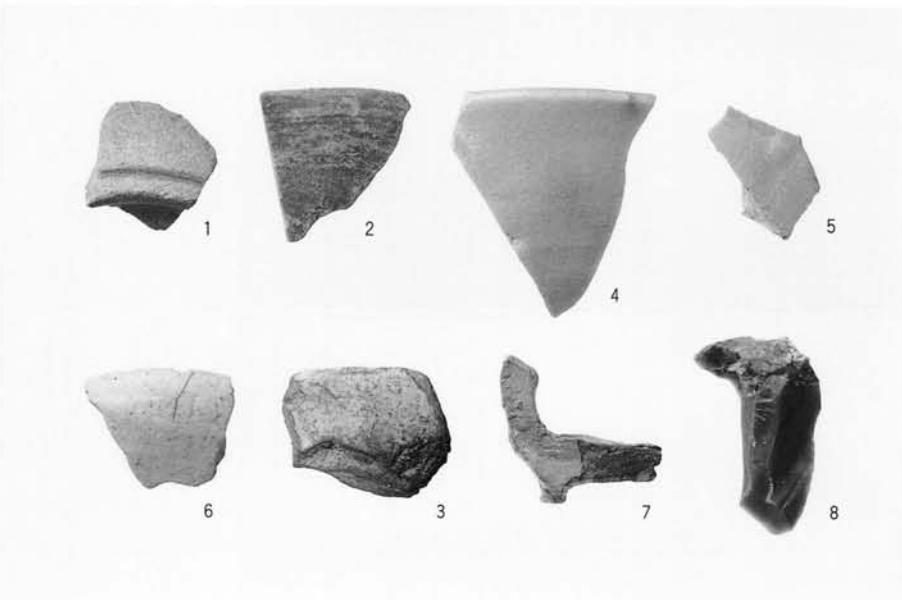
(3) 2 トレンチ全景(西から)



(1) 試掘グリッド b・c 掘削風景
(西から)



(2) b グリッド完掘状況(東から)



(3) 出土遺物

報告書抄録

| ふりがな | | | | | | | | |
|-----------------------------|----------------------------|-------|-------|-------------|--------------|---------------------------|----------------|------|
| 書名 | | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 京都府遺跡調査概報 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第122冊 | | | | | | | |
| 編著者名 | | | | | | | | |
| 編集機関 | (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター | | | | | | | |
| 所在地 | 〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3 | | | | Tel | | 075(933)3877 | |
| 発行年月日 | 西暦 | | 2007年 | | 3月 | | 30日 | |
| ふりがな | ふりがな | コード | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
| 所収遺跡名 | 所在地 | 市町村 | 遺跡番号 | ° ' " | ° ' " | | m ² | |
| たわらのはいじ | きょうとふきょうたんごしあみのちょうたわらの | | | | | | | |
| 俵野廃寺 | 京都府京丹後市網野町俵野 | 26501 | 38 | 35° 38' 54" | 124° 57' 44" | 20061017 ~ 20061129 | 150 | 河川整備 |
| なかやまじょうあとだいさんじ・なかやまきんせいば | きょうとふまいづるしなかやま | | | | | | | |
| 中山城跡第3次・中山近世墓 | 京都府舞鶴市中山 | 26202 | 5 | 35° 28' 05" | 135° 17' 02" | 20061122 ~ 20061222 | 150 | 道路建設 |
| あらすこふんぐん | きょうとふふくちやましおおえちようきたありじ | | | | | | | |
| 阿良須古墳群 | 京都府福知山市大江町北有路 | 26441 | | 35° 23' 49" | 135° 10' 02" | 20061019 ~ 20061115 | 100 | 防災工事 |
| のじょういせきだいじゅういちじ・むろはしいせきだいよじ | きょうとふなんだんしやぎちようむろはし | | | | | | | |
| 野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次 | 京都府南丹市八木町室橋 | 26402 | 1 | 35° 06' 06" | 135° 31' 41" | 20060518 ~ 20060908 | 1,000 | ほ場整備 |
| あぜちいせきだいはちじ | きょうとふかめおかしほづちようかみひなし | | | | | | | |
| 案察使遺跡第8次 | 京都府亀岡市保津町上火無 | 26206 | 41 | 35° 01' 53" | 135° 35' 05" | 20061201 ~ 20061221 | 100 | 道路建設 |
| さくらくほいせき | きょうとふかめおかしちとせちようびしゃもんけのつほ | | | | | | | |
| 桜久保遺跡 | 京都府亀岡市千歳町毘沙門下坪 | 26206 | 40 | 35° 01' 57" | 135° 34' 55" | 20061201 ~ 20061221 | 100 | 道路建設 |

| ながおかきょう あとうきょうだ いはっぴやくは ちじゅうくじ・ いのうちいせき | きょうとふなが おおかきょうしい のうちよこがは た | | | | | | | |
|---|-------------------------------------|-----------------|-------|-----------------------|--------------|--|-----|---|
| 長岡京跡右京第 889次・井ノ内 遺跡 | 京都府長岡京市 井ノ内横ヶ端 | 26209 | 91・10 | 35° 56' 24" | 135° 41' 07" | 20061002 ～ 20061116 | 250 | 道路建設 |
| きづがわかしょ ういせき | きょうとふやは たしやはたやい き | | | | | | | |
| 木津川河床遺跡 | 京都府八幡市八 幡焼木 | 26210 | 4 | 34° 53' 31" | 135° 42' 34" | 20061106 ～ 20070116 | 550 | 建物建設 |
| さえきいせき・ さえきやかたあ と | きょうとふかめ おかしひえだの ちょうさえき | | | | | | | |
| 佐伯遺跡・佐伯 館跡 | 京都府亀岡市葺 田野町佐伯 | 26206 | 44 | 35° 00' 59" | 135° 31' 35" | 20061116 ～ 20061208 | 200 | 河川改修 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | | 主な遺構 | | 主な遺物 | | 特記事項 |
| 俵野廃寺 | 寺院跡 | 奈良～平安 | | 瓦堆積・杭列・土坑 | | 軒丸瓦・軒平瓦・ 丸瓦・平瓦・須恵 器・土師器・墨書 土器 | | 奈良時代前期の 寺院跡から瓦堆積 を検出。 |
| 中山城跡第3 次・中山近世墓 跡 | 山城 古墓 | 中世 近世 | | 堀切・柱穴 | | | | 試掘調査 |
| 阿良須古墳群 | — | — | | なし | | なし | | 試掘調査 |
| 野条遺跡第11 次・室橋遺跡第 4次 | 集落 | 古墳 奈良～平安 | | 竪穴式住居跡 溝 | | 土師器 須恵器・土師器 | | 平安時代以前に 掘削された大溝を 検出。 |
| 案察使遺跡第8 次 | — | — | | なし | | なし | | 試掘調査 |
| 桜久保遺跡 | — | — | | なし | | なし | | 試掘調査 |
| 長岡京跡右京第 889次・井ノ内 遺跡 | 都城 集落・城館 | 平安 鎌倉 | | 溝・柱穴 | | 緑釉陶器 土師器・瓦器・白 磁 | | 長岡京跡に伴う顕著な 遺構なし。 中世城館に伴う溝を検 出。 |
| 木津川河床遺跡 | 集落・墓 集落 | 古墳 中世～近世 | | 土器棺墓 島畠・溝・地震痕跡 | | 土師器・琴柱形石 製品 土師器・須恵器・ 黒色土器・陶磁 器・瓦器・銭貨・ 木器・ | | 琴柱形石製品 の出土。 |
| 佐伯遺跡・佐伯 館跡 | 集落・城館 | 縄文～近世 | | なし | | チャート片・瓦 器・陶磁器・銭貨 | | 試掘調査 |

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第122冊

平成19年3月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 河北印刷株式会社

〒601-8461 京都市南区唐橋門脇町28
Tel (075)691-5121(代) Fax (075)671-8236